

宮城県岩沼市文化財調査報告書第9集

丸 山 遺 跡

—岩沼市図書館建設工事に伴う発掘調査報告書—

2010年3月

岩 沼 市 教 育 委 員 会

丸山遺跡

—発掘調査報告書—

例　　言

1. 本書は宮城県岩沼市二木二丁目 8 番 1 号に所在する「丸山遺跡」発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、岩沼市新図書館建設工事に伴う事前の記録保存を目的として実施されたものである。
3. 本地点では 2008(平成 20)年 11 月 4 日から 9 日に確認調査を、本調査を 2009 (平成 21) 年 2 月 4 日から 3 月 31 日にかけて実施し、岩沼市教育委員会生涯学習課が調査を担当した。調査対象面積は 1,600 m² である。
4. 出土品整理及び報告書作成については、2009 年 4 月 1 日から 2010 年 2 月 26 日まで、岩沼市文化財展示室にて行なった。
5. 本書の第 2 図・第 7 図は岩沼市(旧岩沼町含む)発行の 1/10,000、第 3 図・第 8 図は 1/2,500 の地形図を複製して使用した。
6. 第 4 図・第 5 図・第 6 図の掲載については、それぞれ所蔵機関の承諾を得た。
7. 本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、現地調査時に付したものを使用した。遺構記号は以下の通りである。

SB ; 捜立柱建物跡 SA ; 柱列跡 SE ; 井戸跡

SK ; 土坑 SD ; 溝跡

8. 本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又隆央・熊谷篤が担当した。各執筆分担は以下のとおりである。

川又・・・ 第 II 章、第 III 章、第 IV 章、第 V 章

熊谷・・・ 第 I 章

9. 本書に掲載した写真は、遺構・遺物とも川又が撮影した。
10. 本書に関わる出土品および記録図面等は岩沼市教育委員会生涯学習課にて保管してある。
11. 発掘調査及び資料整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順・敬称略）
片岡太郎　日下和寿　熊谷満　小泉博明　斎木秀雄　手代木美穂　手塚均　吉井宏
米村洋央　渡辺清子　渡部紀
一関市博物館　仙台市博物館　東北芸術工科大学　宮城県図書館
宮城県教育庁文化財保護課
12. 本報告書作成に係わる資料整理は川又の指示を受けて伊藤和雄・熊谷篤・菅原孝子、塙野あい子、三浦徹也が行なった。
13. 本報告書における遺構・遺物挿図等の指示は次の通りである。
 - (1) 遺構実測図の水系高は海拔を示す。
 - (2) 縮尺は図に示すとおりである。
 - (3) 遺物観察表の法量における単位は「cm」である。
 - (4) 土層及び土器の色調は「新版標準土色帖」(小川・竹原; 1973) に拠った。

目 次

第Ⅰ章 遺跡の概観	
1. 位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	2
3. 調査区における土地利用の変遷	10
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	
1. 調査に至る経緯	12
2. 調査経過と方法	13
3. 基本土層	15
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物	
1. 掘立柱建物跡	17
2. 柱列跡	19
3. 井戸跡	19
4. 溝跡	35
5. 土坑	52
6. 遺構外出土遺物	54
第Ⅳ章 考察	
1. 遺物について	56
2. 出土遺物から見る特色	58
3. 溝跡について	58
4. 井戸跡について	59
5. 各遺構の年代について	60
第Ⅴ章 まとめ	61

挿 図 目 次

第1図 岩沼市の位置と地形分類	1
第2図 岩沼市内遺跡分布図	3
第3図 竹内神社跡付近	10
第4図 岩沼平城跡切堀跡と調査地点	11
第5図 岩沼之船岡と調査地点	11
第6図 名取郡岩沼陣屋井戸下経図と調査地点	11
第7図 昭和32年地図と調査地点	11
第8図 遺跡範囲と調査地点	12
第9図 グリッド配置図	14
第10図 基本土層模式図	15
第11図 遺構全体図	16
第12図 SE01 掘立柱建物跡	17
第13図 SA01・SA02 柱跡	18
第14図 井戸跡（1）	20
第15図 SE01 出土遺物	21
第16図 SE01 出土遺物	22
第17図 SE01 出土遺物	23
第18図 SE01 出土遺物	24
第19図 SE01 出土遺物	25
第20図 SE04 出土遺物	1
第21図 SE04 出土遺物	2
第22図 SE04 出土遺物	3
第23図 SE04 出土遺物	4
第24図 SE04 出土遺物	5
第25図 井戸跡（2）	32
第26図 SE05・06・08・10・12 出土遺物	34
第27図 SD01・02・03・04・05・06 溝跡	37
第28図 SD01 1 線出土遺物	1
第29図 SD01 1 線出土遺物	2
第30図 SD01 1 線出土遺物	3
第31図 SD01 1 線出土遺物	4
第32図 SD01 1 線出土遺物	5
第33図 SD01 1 線出土遺物	6
第34図 SD01 1 線出土遺物	7
第35図 SD01 1 線出土遺物	8
第36図 SD01 1 線出土遺物	9
第37図 SD01 1 線出土遺物	10
第38図 SD01 2 線出土遺物	1

第39図 SD01.2層出土遺物	2	49
第40図 SD01.3層出土遺物		49
第41図 SD01.4層出土遺物		50
第42図 SD02.03・04出土遺物		51

写真図版目次

写真図版1		65
1. 調査区北側全景 (東から)		
2. 調査区南側全景 (東から)		
写真図版2		66
1. SB01 直立柱建物跡 (東から)		
2. SA01・02 柱跡 (東から)		
3. SD02溝跡 (北から)		
4. SD03・06 溝跡 (北西から)		
5. SD04・05 溝跡 (北から)		
6. SD06 溝跡 (北西から)		
7. SD04溝跡上断面 (南から)		
8. SD05溝跡上断面 (南から)		
写真図版3		67
1. SD01 溝跡 (東から)		
2. SD01 溝跡上断面 (東から)		
3. SD01 溝跡上層・加工骨出士状況 (東から)		
4. SD01 溝跡上層・加工骨出士状況 (近景)		
写真図版4		68
1. SD01 溝跡・白磁皿出土状況 (北から)		
2. SD01 溝跡・漆器陶器出士状況 (東から)		
3. SD01 溝跡・陶器棒状土状況 (北から)		
4. SD01 溝跡・染付皿出士状況 (南から)		
5. SD01 溝跡・染付伝瓶具出土状況 (北から)		
6. SD01 溝跡・陶器皿出士状況 (北から)		
7. SD01 溝跡・陶器皿出士状況 (西から)		
8. SD01 溝跡・陶器棒状土状況 (東から)		
9. SD01 溝跡・下駄紐出士状況 (南から)		
10. SD01 溝跡・下駄紐出士状況 (南から)		
写真図版5		69
1. SE02 井戸跡検出状況 (南から)		
2. SE02 井戸跡断面 (南から)		
3. SE02 井戸跡 (南から)		
4. SE02 井戸跡・積石の状況 (南から)		
5. SE02 井戸跡・漆器陶器出士状況 (南から)		
写真図版6		70
6. SE02 井戸跡・水槽施設状況 (南東から)		
7. 水槽施設結合状況 (南から)		
8. SE02 井戸跡・完掘状況 (南から)		
写真図版7		71
1. SE04 井戸跡上断面 (西から)		
2. SE04 井戸跡土層断面 (南西から)		
3. SE04 井戸跡・完掘状況 (南から)		
4. SE01 井戸跡土層断面 (東から)		
5. SE01 井戸跡・完掘状況 (東から)		
6. SE01 井戸跡・陶器組出土状況 (東から)		
7. SE01 井戸跡・金属製品出土状況 (北から)		
8. SE01 井戸跡・かめらけ出土状況 (北から)		
9. SE03 井戸跡土層断面 (東から)		
10. SE03 井戸跡・完掘状況 (西から)		
写真図版8		72
1. SE05 井戸跡土層断面 (西から)		
2. SE06 井戸跡・完掘状況 (西から)		
3. SE06 井戸跡土層断面 (西から)		
4. SE06 井戸跡・完掘状況 (西から)		
5. SE07 井戸跡土層断面 (北から)		
6. SE07 井戸跡・完掘状況 (西から)		
7. SE08 井戸跡土層断面 (東から)		
8. SE08 井戸跡・完掘状況 (南から)		
写真図版9		73
研器1		

写真図版 10	74	写真図版 17	81
磁器 2		瓦質土器・瓦・中世遺物 3点	
写真図版 11	75	写真図版 18	82
磁器 3		漆器・木製品 1	
写真図版 12	76	写真図版 19	83
陶器 1		木製品 2	
写真図版 13	77	写真図版 20	84
陶器 2		木製品 3	
写真図版 14	78	写真図版 21	85
陶器 3		土器・土製品・石製品	
写真図版 15	79	写真図版 22	86
陶器 4		金属製品・自然遺物	
写真図版 16	80		
陶器 5			

調査要項

遺跡名	丸山遺跡（宮城県遺跡登録番号：15055）
遺跡記号	MY
所在地	岩沼市二木二丁目 8 番 1 号
調査主体	岩沼市教育委員会
調査協力	宮城県教育庁文化財保護課
調査面積	1600 m ²
調査期間	平成 21 年 2 月 4 日～3 月 31 日

〔試掘調査参加者〕（五十音順）

安住新吉、伊藤和雄、今野優、菅原孝子

〔発掘調査参加者〕（五十音順）

安住新吉、伊藤和雄、岩渕絵巳香、今野優、齊藤達、佐藤厚、
佐藤健一、佐藤トシ子、柴田敬三、菅原孝子、高橋博茂、塚野あい子、
南城美代子、三浦秀逸、三浦徹也

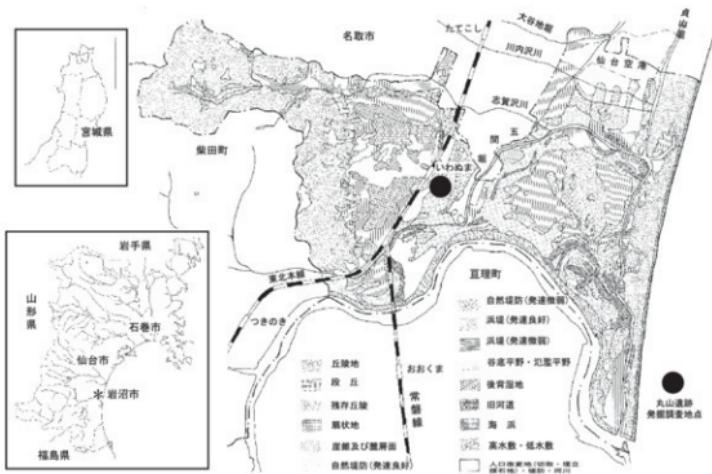
第Ⅰ章 遺跡の概観

1. 位置と地理的環境（第1図）

今回調査を実施した丸山遺跡は岩沼市二木二丁目に所在し、JR岩沼駅から南に約0.4kmの位置にある。現在の岩沼市二木周辺は住宅や商工業施設が建ち並ぶ市街地であり、調査地点は調査直前まで岩沼公民館として利用されていた。

岩沼市は宮城県南東部の都市であり、県庁所在地である仙台市から約17km南方に位置している。東に太平洋が広がり、西は名取市高館から南北に伸びる高館丘陵を境として村田町・柴田町と接する。市域の南端を流れる阿武隈川は、栃木県北部の那須三本槍岳付近から、福島県の郡山盆地・福島盆地を経由し宮城県へと至る、全長239km、流域面積5400km²の大河川であり、当市はこの阿武隈川が太平洋へ注ぐ河口の北岸に位置する。阿武隈川を隔てた河口南岸には亘理町が位置し、市域の北は太平洋沿岸から丘陵部まで名取市と接している。現在、岩沼市は国道4号線と同6号線、さらにJR東北本線と同常磐線が合流する地点として知られているが、これは古来より東街道と浜街道が当市から分岐していたことに由来する。

岩沼市を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の沖積地に分けられる。西側は標高100m～300m前後の高館丘陵と、その東側で帶状に連なる標高10～100m前後の岩沼丘陵が南北に走っている。これら丘陵は主に溶岩・火碎岩類から成り、岩沼丘陵からいくつかの小丘陵が舌状に沖積平野へ張り出す。東側の沖積地は名取平野と通称され、岩沼丘陵東縁から太平洋沿岸までの間に7～8kmの幅を持って発達する。この名取平野は周辺河川の堆積作用によって形成され、各河川の沿岸には自然堤防・後背湿地、海岸線に平行して浜堤列が顕著に発達している。



第1図 岩沼市の位置と地形分類

(岩沼市1992を改変)

2. 周辺の遺跡と歴史的環境（第2図）

岩沼市域では、近年の遺物採集や発掘調査等により、徐々にではあるが着実に考古資料が蓄積されている。

以下、これまでの発掘調査による成果を時代別に整理し、歴史的環境を概観する。

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	丸山遺跡	集落	中世・近世	20	白山横穴墓群	横穴墓	古墳後
2	北原遺跡	散布地・集落・貝塚	旧石器・縄文早～後・弥生・古墳前	21	白山古墳	前方後円墳	古墳
3	杉の内遺跡	集落	縄文早・前・弥生・古墳中	22	引込横穴墓群	横穴墓	古墳後
4	長塚北遺跡	散布地	縄文・古墳・奈良・平安	23	石垣山横穴墓群	横穴墓	古墳後
5	長塚古墳	円墳	古墳中	24	土ヶ崎横穴墓群	横穴墓	古墳後
6	新明塚古墳	前方後円墳	古墳中	25	鶴ヶ崎城跡	城館	縄文早・中・中世・近世
7	上根崎遺跡	散布地	縄文・古墳中	26	丸山横穴墓群	横穴墓	古墳後
8	長徳寺前遺跡	礫石経塚	中世・近世	27	二木横穴墓群	横穴墓	古墳後
9	中ノ原遺跡	墓	中世	28	竹駒神社境内遺跡	社寺	近世
10	熊野遺跡	散布地	古代	29	古闇山遺跡	散布地	弥生・奈良
11	県史跡 かめ塚古墳	前方後円墳	古墳中	30	新船跡	城館	中世
12	かめ塚西遺跡	散布地	弥生・古墳	31	新船前遺跡	散布地	縄文～平安
13	鷲崎横穴墓群	横穴墓	古墳	32	畠堤上貝塚	貝塚	縄文早・前・古代
14	朝日古墳群	散布地・円墳	弥生・古墳・中世	33	畠堤上横穴墓群	横穴墓	古墳後
15	朝日遺跡	散布地	古墳・古代	34	根方泉遺跡	散布地	弥生
16	竹倉部遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	35	長谷古館跡	城館	室町
17	長谷寺横穴墓群	横穴墓	古墳後	36	東平王塚古墳	前方後円墳	古墳
18	平等山横穴墓群	横穴墓	古墳後	37	原遺跡	散布地	平安
19	新田遺跡	散布地	縄文・古墳・古代	38	南玉崎遺跡	散布地	古代

第1表 遺跡地名表



第2図 岩沼市内遺跡分布図

【旧石器時代】

岩沼市域の遺跡において旧石器時代の遺構は未検出であり、現時点での概要是不明なところが多いものの、同時代に該当する遺物は2の北原遺跡で確認されている（小村田達也・三好秀樹ほか1993）。

県南城市町の動向

岩沼市に北接する名取市の野田山遺跡では、後期旧石器時代後半のものと位置づけられる合計60点の石刃石器群が出土している（庄田 忍・佐藤通子2002）。

村田町では旧石器時代の遺跡がある程度のまとまりを持って分布し、「新川流域遺跡群」として知られている。この遺跡群の中でも、特に賀籠沢遺跡では東北学院大学佐川ゼミナールによる発掘調査が平成15年度から18年度にかけて実施され、石器の出土数は県内最多の1,000点近くに及ぶ。賀籠沢遺跡は玉髓を近隣から搬入し、石器を集中的に製作した生産地であることが指摘されており、県南域における石材利用の様相を解明する上で重要な遺跡である（佐川正敏ほか2006）。

以前は旧石器時代の痕跡が顕著に認められなかった名取川以南地域であるが、発掘調査の成果により近年は資料が増加しており、今後はこれらの資料をもとに更なる研究が進められていくことが期待される。

【縄文時代】

縄文時代の遺跡は概ね市域西側の丘陵部に所在し、これらの遺跡は縄文海進期の海岸線に沿う形で形成されていると思われる。

岩沼市域における縄文土器出土遺跡

25の鶴ヶ崎城跡では平成16年度に第4地点の発掘調査を行った際、土里下から縄文土器群を含む遺物包含層が発見された。この遺物包含層より出土した土器を概観すると、織維の混和されない薄手の条痕文土器である櫛木貝塚下層出土資料に類するものや、織維混入が顕著で三角文を構成し、結節点に円形刺突文を配し内面に条痕文を有する鶴ヶ島台式に比定される土器、そして織維混入が顕著で外面に縄文、内面に条痕文を有する梨木烟式に比定される土器で形成されている。出土した土器の約8割を梨木烟式が占め、総じて縄文時代早期後葉に位置付けられる（川又隆央2005b）。

北原遺跡では、平成4年に行われた発掘調査の際に、断面形状がフラスコ状を呈する特異な土坑が多数確認されたほか、遺構には伴わないものの縄文時代前期及び後期に比定される土器が出土している（小村田達也・三好秀樹ほか1993）。

県南域の他市町と岩沼市域の縄文遺跡

県南域では、北接する名取市の泉遺跡で、縄文時代早期末～前期前葉頃のものと考えられる約50軒の堅穴住居跡、その他に貝塚跡や貯蔵穴などの遺構が多数発見されている（名取市教育委員会2007）。平成6年度～8年度にかけても発掘調査が行われ、23軒の堅穴住居跡が確認されていることから、遺跡の周辺は縄文時代の拠点的な集落だと考えられている（大友透・鶴崎哲也1998）。

岩沼市域では縄文遺跡の発掘調査事例は少ないが、丘陵上に山畑南貝塚や32の畠堤上貝塚などの貝塚跡も存在することから、前述の周辺市町の発掘調査事例も鑑みると、市域西側丘陵付近にも居住域が存在する可能性がある。

【弥生時代】

弥生時代の遺跡も、前時代と同様に丘陵部に多く存在している。しかしながら、12のかめ塚西遺跡のような市域の平野部でも弥生時代の痕跡は確認されており、該期の岩沼市域の海岸線はすでに現在の堆積地より東側であったと推定され、前時代からの居住域の拡大を示している可能性がある。

岩沼市域の弥生土器と遺構

北原遺跡と、それに隣接する3の杉の内遺跡では弥生時代中期中葉の樹形圓式、同時代中期後葉の十三塚式、後期の天王山式の土器が出土・表採されている。

29の古関山遺跡では樹形圓式が、朝日古墳群でも樹形圓式と十三塚式の土器が確認されており、現時点での岩沼市域の弥生土器は中期中葉以降のものが主体を成す。

鶴ヶ崎城跡では、土里下から弥生土器や石包丁が出土し、さらに中期後葉のものと思われる堅穴住居跡1軒を検出した（川又隆央 2005 b）。

阿武隈川流域他市町と岩沼市域の弥生遺跡

北接する名取市の原遺跡では土器植墓や土坑墓などが確認されている（大友透・鶴崎哲也 2000）。阿武隈川流域に所在する藤王町鍛治沢遺跡では複数の土器が埋納された再葬墓が検出され、同じく阿武隈川流域の白石市和尚堂遺跡では中期中葉の包含層が確認されているものの、岩沼市域内では弥生時代の発掘調査事例が少なく、水田跡などの生産域や墓域は未だ検出されていない。今後、周辺市町の発掘調査成果を踏まえた広い視点で、岩沼市域の弥生時代を復元していく必要がある。

【古墳時代】

古墳時代の遺跡は、集落跡が市域の東西に分布しており、西側丘陵部では北原遺跡が、東側自然堤防上では孫兵衛谷地遺跡が確認されている。

集落遺跡

北原遺跡では塙釜式期に比定される土師器や堅穴住居跡36軒が確認され、このうち10号住居跡からは漁撈時の錘として使用したと考えられる土玉が39個まとまって出土し、穀作以外の生業として漁撈を行っていたことが判明している（小村田達也・三好秀樹ほか1993）。

古墳

岩沼市域内には、県史跡第1号に指定された11のかめ塚古墳をはじめ、36の東平王塚古墳、にら塚古墳などの高塚式古墳が数基存在する。このうち過去に発掘調査が実施されたのは5の長塚古墳、6の新明塚古墳の2基で、両古墳とも昭和20年代の國學院大學による発掘調査である。

長塚古墳は墳丘全体が黄褐色粘土を用いて構築されていることが確認され、新明塚古墳は発掘調査以前までは円墳と考えられていたが、調査の結果、本来は前方後円墳であった可能性が高いという指摘がなされている。しかしながら、両古墳では埴輪などの遺物が出土していないため、作られた年代は不明である。

横穴墓群

横穴墓群は今まで10箇所で確認されているが、これら横穴墓群の多くは市域の西側を縦断する岩沼丘陵や、そこから舌状に伸びた朝日山公園を包括する低位丘陵の斜面上に位置している。

27の二木横穴墓群では、頭椎太刀の柄頭の一部や裝飾太刀など多種多様な遺物が出土している

(鍛治一郎・佐藤宏一ほか 1962)。また、17 長谷寺横穴墓群では子持平瓶が出土し、県内初の装飾土器出土事例となった（小野力ほか 1968）。

22 の引込横穴墓群では、8 基の横穴墓の発掘調査が実施され、玄室の左右両側に棺座が確認された 6 号墓では、直刀や馬具などの武具類を中心とする副葬品が出土しており、被葬者は武人であった可能性が推察されている。また高い。8 号墓では羨道の排水溝で長さ約 4 m を測る木製の蓋も発見されている（渡辺清子 2000）。

これらの横穴墓群は、構造上では平面形が方形あるいは不整形形、断面はドーム型であり、玄室内に棺座を有することが大きな共通項として挙げられる。出土遺物も土師器よりも須恵器の出土量が圧倒的に多く、中でも静岡県湖西地域を中心とした東海諸窯、または猿投窯産と推察されるフラスコ形瓶などの製品が県内の横穴墓群出土資料と比べた場合、比較的多く存在する。また、これまでに多数の直刀などの金属製品も出土している。

市域内に残る横穴墓群の多くは高度経済成長期の開発工事に伴う緊急調査であり、引込横穴墓群を除けば正式な発掘調査報告書として刊行されたものは無く、現在までに残された記録も少ないことから全容を明らかにするのは困難である。しかし、前段階でも東北地方最大級の古墳が造営されていた当地域は、『国造本紀』では未記載であるが、中小支配者層として有力者が存在していた可能性が高い。

【古代】

古代名取郡は『倭名類聚抄』の郷名などからみて 7 郷で形成されていたと考えられ、このうち岩沼市域内にあったと思われる郷は、市城南部の玉崎地区に比定される「玉前郷」と、北西部の志賀地区に比定される「指賀郷」の 2 つである。

玉前郷と玉前駅

東山道及び東海道からの連絡路の分岐点であった玉前郷には「玉前駅」が設置され、多賀城跡からは安積団の兵士たちが軍役を終えて帰還する際に玉前駅を通過する旨を申請した過所木簡が出土している（東北歴史博物館 2005）。

また、南長谷に所在する 37 の原遺跡では平成 17・18 年に実施された下水道工事の際、古代の遺物・遺構の存在が明らかとなった。ここでは古代の所産と思われる土師器・須恵器が出土し、竪穴住居跡のカマドと考えられる焼土遺構や溝跡、柱穴などの遺構も確認されている。玉崎地区周辺は玉前駅やそれに関連する遺跡の発見が見込まれる地域であり、今後の資料の増加が期待されている。

指賀郷

一方、指賀郷でも幹線道路である東山道が通過していたと思われ、この路線は文久元年（1861）に作成された『名取郡南方小川村絵図』に見える「東街道古道」などの記載から、市域内の南長谷・玉崎・小川を通過し、名取市北目・高館・仙台市大野田・郡山を抜け、陸奥国分寺經由で最終的に多賀城へと至る路線であったと推察される（千葉宗久 1985）。この路線を概ね踏襲すると思われるものが現在の県道仙台岩沼線であり、岩沼市域から名取市域へと抜ける丘陵東麓の道路沿いには、今日においても歴史的な地名、伝承地、それに伴う遺跡が点在している。

東街道の推定線上にある北原遺跡では、9世紀後半の時期と思われる土器器や赤焼土器を含む1軒の堅穴住居跡が確認されており、周辺で集落存在の可能性を考える上で貴重な発見となった。

岩沼市域の古代史

岩沼市域の古代史については未だ解明されていない部分が多いが、「玉前郷」や「指賀郷」、及び「玉前駅」などの記録から、古代に人馬の往来、人々の営みがあったことは疑いない。今後も文献や発掘調査成果を随時活用しながら、郷・道・駅を念頭に置いた究明活動を続けていく必要がある。

【中世】

岩沼市域の中世については、文献による記録が少なく、領主層の特定や各地域の具体的な成立過程などは明らかにされていない。しかしながら近年は中世に該当する発掘調査事例が徐々に蓄積されており、いくつかの中世遺跡が確認されている。

城館跡

鶴ヶ崎城跡では、15世紀前半頃の年代観が与えられる龍泉窯系の青磁盤や同じく15世紀代の所産と考えられる天目釉を施した瀬戸小壺、13世紀～15世紀頃のものと思われる常滑産瓈片などが出土している。さらに中世から近世の時期にかけて構築されたと推定される土塁や整地層が確認され、土塁については発掘調査の成果により中世の段階で構築された可能性が指摘されている。また、土塁構築の際に平場側の縁辺部において大規模な地形変革を行っていたことも確認されている（川又隆央 2005b）。

35の長谷古館跡は、『仙台領古城書上』では、亘理氏の家臣であった長谷紀伊守景重が築城したとされる中世城館である。発掘調査は未実施であるが、南長谷字柳に所在する鷹観寺の一角には、かすかに天文二年（1533）と読める墓石が存在し、これは館主であった長谷氏の墓だという言い伝えがある（阿部昭平 2003）。過去には遺跡範囲内において中世陶器片が採取されており、街道に接するこの地域は中世の段階で特定領主の勢力下に置かれていた可能性もある。古代以来の街道沿いに点在する諸所の調査結果も踏まえた上で、今後の実態解明と資料増加が待たれる地域である。

集落遺跡

下野郷館跡では、平成12～15年にかけて県道改良工事に伴い発掘調査が実施され、12世紀後半頃の年代観が与えられる中国産白磁瓈片や龍泉窯系の青磁瓈片、及び中世陶器瓈片などが出土し、五間堀川の自然堤防上で中世遺跡が営まれていたと考えられている（川又隆央・小泉博明 2004）。

墓地・信仰関連遺跡

墓地・信仰関連遺跡では14の朝日古墳群で土葬土坑墓群が確認されている。この土葬土坑墓群は丘陵の東側斜面に位置する岩盤面を削りだした小平場において発見され、13世紀後半～15世紀代に機能していたものと思われる。このうち1基では北宋錢が13枚出土している。同様の平場群が他にもこの丘陵地に点在することから、この地は中世期において墓域として認識されていた可能性がある。さらに別の1基の遺構底面では他の遺構覆土とは異なる少量の砂の堆積が認められることから、密教の葬送儀礼である土砂加持が行われた可能性について指摘している（川又隆央 2007）。これらの発掘調査成果は、今後の岩沼市域周辺の中世葬送関連研究の検討材料として貴重である。

28の竹駒神社境内遺跡では、溝跡から白石古窯群跡の製品である中世陶器瓈片が出土している。

この溝跡は区画溝であると考えられ、近世以前の参道は現在まで踏襲される道筋とは若干異なることが判明した（川又隆央 2009）。

その他の信仰に関連するものとしては、板碑が岩藏寺遺跡で 7 基、中ノ原遺跡で 2 基、総計で 9 基確認されている。

中ノ原遺跡と岩藏寺遺跡の板碑

9 の中ノ原遺跡は名取熊野から南下する街道沿いに位置し、該遺跡に所在する 2 基の板碑は平成 17 年度に農作業の円滑化のため從来箇所から 5 m ほど西に移設されたが、その後に行われた分布調査の際、移設された板碑付近から内面に火葬骨が付着した中世陶器甕片が採取された。さらに、移設の際に板碑の下部から白石古窯跡群の製品と考えられる火葬骨の詰まった短頸壺が出土し、地権者によって保存されていた。これら 2 種類の骨蔵器は 2 基の板碑に伴って埋納されたものであり、板碑は相互に関連が強い人々の墓標として立てられたものと推量している（川又隆央・熊谷篤 2009）。

市域北西部の山中に展開する岩藏寺遺跡では 7 基の板碑が薬師堂付近で確認されており、寺院の最深部と思われる場所に板碑群が立地するという特殊性や、その内の 1 基が周辺に集石造構などを伴うこと、約 7,000 基に上る宮城県内の板碑分布数の中で、決して多いとは言えない岩沼市域の板碑 9 基の内、7 基が集中して岩藏寺遺跡所在であることなどを合わせて検討すると、古來岩藏寺が葬送供養の場、或いは寺院に関連する靈場的な場であった可能性が指摘できる（川又隆央 2005c、石黒伸一郎 2009）。慈覚大師円仁の開基という伝承をはじめとし、蛇石の古譚や興味深い様々な言い伝えが残る岩藏寺は、将来の発掘調査による解明が待たれる貴重な遺跡の一つである。

【近世】

近世の造構・遺物は今回の調査対象である丸山遺跡をはじめ、鶴ヶ崎城跡、竹駒神社境内遺跡、朝日古墳群、長徳寺前遺跡、下野郷館跡、西須賀原遺跡で確認されている。岩沼は近世において城下町、宿場町として発展し、竹駒神社の門前町としても賑わいを見せたといわれ、考古学的な成果も近年では近世が最も充実している。

鶴ヶ崎城跡（岩沼要害）

鶴ヶ崎城跡ではこれまで 4 地点で調査が行われ、このうち第 1 地点では東北福祉大学吉井ゼミナールが学術目的の発掘調査を 2001 年から毎年行っている。ここでは丘陵頂部の平場で南北方向に走る溝跡と、その東岸を併走する石垣が確認された。溝跡は 20m ほど北進すると東に屈曲し、それを北限とするかのように主だった造構の大半はこの溝跡の南側で検出されている。建物跡としては第 5 次～第 8 次調査にかけて礎石列が確認されているが、どのような建物が構成されていたのかの検討は今後の課題である。このほか、完形の大堀相馬焼の碗や、それに蓋をするようにかわらけを被せ、小穴へ意図的に正位状態で埋めたと考えられる碗埋納造構が 3 基検出され、これらは現時点では地鎮関連造構であると解釈されている（吉井宏ほか 2002～2009）。

第 2 地点では掘立柱建物跡、土坑、及び近現代の大規模な地形変容の痕跡が確認され（川又隆央 2004a）、第 3 地点では掘立柱建物跡内から延びる魚骨を含む溝跡などが発見されている（川又隆央 2004b）。なお、鶴ヶ崎城跡で出土する遺物は、18 世紀後葉～19 世紀代のものが主体を成すが、第 4 地点では 16 世紀末～17 世紀前半頃と考えられる染付風陶器（志野焼）が出土している（川又隆

央 2005 b)。

長徳寺前遺跡の礎石経塚

長岡字塚腰に所在する8の長徳寺前遺跡では、曹洞宗龍谷山長徳寺（1657年開山）門前の下水道工事の際に2基の礎石経塚が発見され調査された。これらの経塚は垂直に掘り込まれた土坑に、礎石経（一字一石経）を埋納したものである。平面形状は1号経塚が径1.4mほどの円形、2号経塚は一辺が1.0mほどの方形であり、1号経塚からは14,897点、2号経塚からは11,479点の礎石経が出土している。書写經典については、1号経塚では妙法蓮華經譬喻品第三を中心と書写したものと考えられ、2号経塚では仏説觀普賢菩薩行法經を中心に、妙法蓮華經各品の代表的な部分を書写したと考えられる。1号経塚は共出した唐津産陶器の年代観から17世紀後半頃と考えられ、2号経塚は付近の経碑の年号から19世紀前半頃と考えられる。また、1号経塚からは「一之巻口口之内」と記された木簡も出土している（川又隆央 2005a・2005d）。

近世の屋敷跡

下野郷館跡では、平成12年から平成15年にかけて県道直理・塩釜線の改良工事に伴って発掘調査が実施された。検出された遺構は江戸期の屋敷跡を構成するものであり、これらの屋敷跡は矢ノ目領主であった佐藤氏や奥山氏、また、奥山氏の所替え以降に仙台藩によって招抱えられた矢ノ目足軽に係わるものと考えられる。中心的な遺構は掘立柱建物跡や井戸跡及び溝跡などで、掘立柱建物跡は61棟、井戸跡は58基が検出されている。ここで確認された井戸跡は素掘りのものが大半を占めるが、支柱を木材で組み、その外側に竹や葦を立てかけるものが2基確認されている。また溝跡は規模や方向から屋敷、もしくは館全体の区画溝である可能性が高い（川又隆央・小泉博明 2004）。

竹駒神社境内の発掘

竹駒神社境内遺跡では、天保十三年（1842）に造営された向唐門の解体修復工事に伴い発掘調査が実施された。この発掘調査では総重量40～50tの構造物を支えるために、地下1.7mまで根石を詰め込んだ地下構造が明らかになったほか、宝永7年（1710）に仙台藩5代藩主・伊達吉村によつて行われた本殿修造時のものと考えられる大規模な整地層を確認した。この整地面では小規模な掘立柱建物跡や旧参道跡、そして参道に面した柱列を検出したほか、マツと考えられる針葉樹の葉の上にアワビ貝を載せ、それを埋納したものと思われる神事関連遺構が発見されている。このほか、出土遺物としては瓦が多く出土しており、周知の文献や絵図には描かれていないものの、瓦葺施設の存在が示唆されている。また、神社の境内という特殊な空間であることを反映してか、市域内他の遺跡に比べ、かわらけが多く出土したことでも特筆される（川又隆央 2009）。

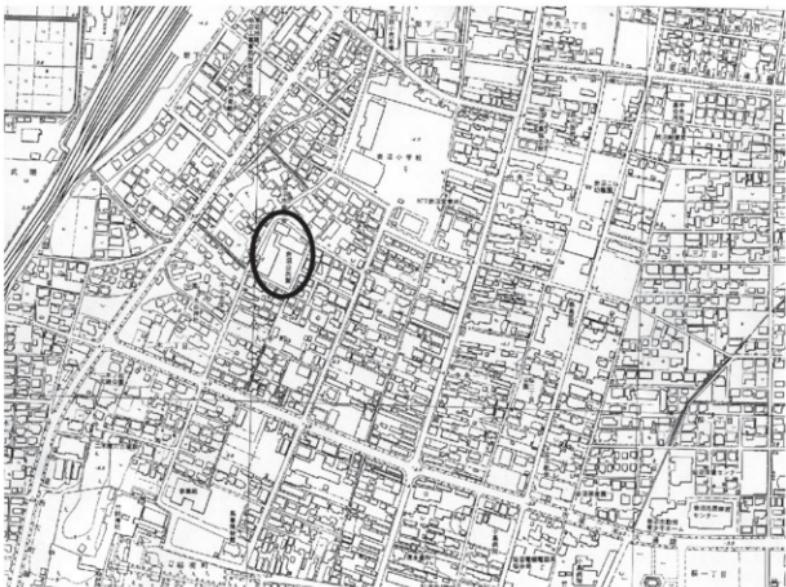
3. 調査区における土地利用の変遷

本調査区周辺の土地利用の変遷を絵図資料等から追ってみる。寛文元年（1661）以前の絵図の可能性が考慮される「岩沼平城御廻切絵図」（仙台市博物館所蔵・第4図）では、本調査区は侍屋敷と記されており、17世紀半ばには、すでに武家屋敷が存在していたと思われる。

「岩沼之絵図」（一関市博物館所蔵・第5図）は、寛文元年～天和2年（1682）の間に成立したものとされるが、この時期は田村氏が仙台藩の支藩として岩沼を拝領した時期に当たり、本調査区部分では野村左平次や斎藤長太夫など田村氏の家臣と思われる人物名が確認できる。

元禄2年（1689）以後の成立という「名取郡岩沼郷館井館下絵図」（宮城県図書館所蔵・第6図）では、下中屋敷と記されており、この絵図から人物名などの詳細は確認できないものの、武家屋敷地としての土地利用は継続的に行われていたと考えられ、田村氏移封の後に岩沼要害を拝領する古内氏の時代も、本調査区を家臣団の居住地としていたことがわかる。

『岩沼市史』によると、明治以降、古内氏の元家臣である松本円三郎がこの土地で果樹園を営んでいたというが、その後は空地となり、昭和22年（1947）に至って岩沼中学校が落成された。昭和32年（1957）の地図（第7図）でも中学校の記載を確認できる。しかし、昭和39年（1964）2月に岩沼中学校の校舎が焼失し、その後、焼け残った体育館をホールとして利用する関係上、昭和41年（1966）に岩沼中学校跡地へ岩沼公民館を移転させ、平成19年（2007）まで利用された。



第3図 丸山遺跡周辺図（○が調査区付近）



第4図 岩沼平城御廻切絵図



第5図 岩沼之絵図



第6図 名取郡岩沼郷館井館下絵図



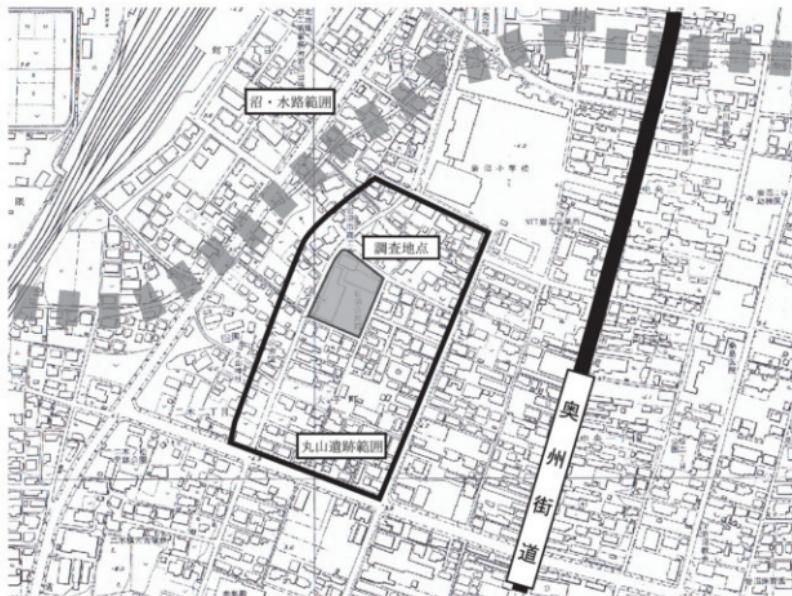
第7図 昭和 32 年（1957）地図

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至る経緯（第8図）

平成 19 年 3 月 31 日に、昭和 41 年から供用を開始し、永く市民に親しまれてきた旧岩沼公民館が耐震強度不足によりその使用が停止され、同年 9 月～11 月にかけて解体作業が実施された。

市では跡地の有効活用をめぐり様々な方策が提案され協議を行った結果、同地で新図書館を建設するという結論に達した。これを受けて市教育委員会生涯学習課では、対象地が平成 18 年に登録されている丸山遺跡範囲内に位置することから、江戸時代に岩沼要害を中心に描かれた幾多の古絵図で「侍屋敷」「下中屋敷」などと標記される地点で地下掘削を行うことにより、当該期に関わる遺構・遺物が遺存していた場合にはこれらが大きく損なわれることを危惧した。このため事前に遺跡の有無、密度等を把握する必要性があると考え、平成 20 年 10 月 10 日に宮城県教育委員会文化財保護課と協議を行った結果、同年 10 月 17 日に同課から発掘調査が必要との回答があった。



第8図 遺跡範囲と調査地点

試掘調査は平成 20 年 11 月 4 日から 7 日にかけて実施した。対象地は江戸時代以降、第 I 章 3 にあるように様々な土地利用変遷を辿っているため、土層部分では擾乱が著しいことは旧公民館解体工事に際して実施した工事立会でも確認しており、掘削に際しては重機を使用した。設定したトレーナーは建物建設予定範囲内で 3 箇所とし、その全てで江戸時代を中心とする遺構・遺物の存在を確認している。この結果を受けて地下工事についての協議を行ったが、掘削深度などの計画の変更是困難となり、平成 21 年 2 月 4 日から 3 月 31 日にかけて本格調査を実施する運びとなった。

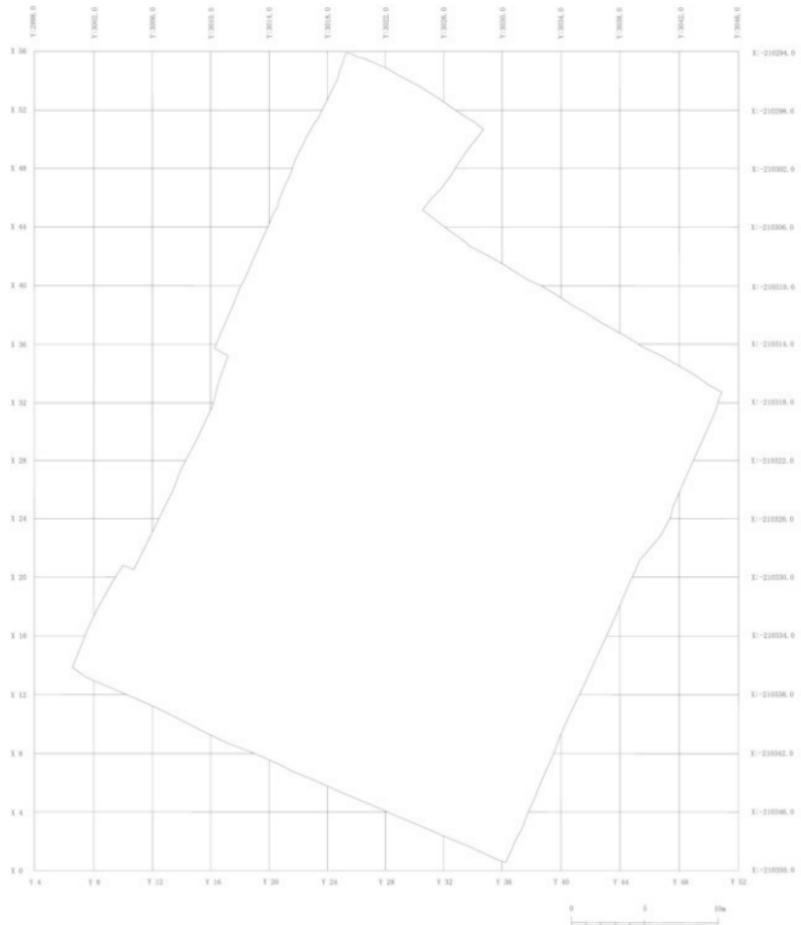
2. 調査経過と方法（第 9 図）

本格調査は平成 21 年(2009)2 月 4 日から実施した。設定した調査区の面積は約 1,600 m²である。調査では表土掘削に伴って発生する残土の場外搬出が困難なことから、調査区を北部・南部の二つに分割して行うこととした。さらに表土掘削には重機を使用し、その後人力によって遺構面の検出に努めた。作業の経過は以下の通りである。

2/4	北側調査区表土掘削開始
2/5	遺構面精査開始
2/9	遺構掘下げ開始。遺構断面図作成開始
2/13	トランバース測量
2/16	SD01 漢跡上層から加工骨群出土
2/24	北側調査区全景撮影
2/25	遺構平面図作成
2/28	北側調査区埋め戻し
3/2	南側調査区表土掘削開始
3/3	遺構面精査開始
3/7	遺構掘下げ開始。土層断面図作成開始
3/8	トランバース測量
3/23	南側調査区全景撮影。遺構平面図作成
3/28	南側調査区埋め戻し
3/31	機材撤収。調査終了

本調査で使用した測量軸の設定に関しては、国家座標を使用した。使用した測量原点は岩沼市公用基準点 3-086 (X ; -210099.586・Y ; 3048.541) と同 3-087 (X ; -210227.351・Y ; 2958.689) である。これにより調査対象地南西の X ; -210350.000・Y ; 2994.000 の地点に XYOY オフを設定し、東西ライン (X 軸) に南から 1 m ごとに X 1 ~ 56 と、南北ライン (Y 軸) に西から 1 m ごとに Y 1 ~ 52 と附した（第 7 図）。各グリッドライン間の距離は 4 m である。また各グリッドの名称は北東隅の交点を採用した。

出土品の整理作業・報告書の作成は 2009 年 4 月 1 日から 2010 年 2 月 26 日にかけて岩沼市文化財展示室内で行なった。



第9図 グリッド配置図

3. 基本土層（第10図）

本地点で確認された土層は以下のとおりである。なお、I、II層は近現代の盛土層等であることから概ね水平堆積であったが、III層以下では若干東から西へかけての傾斜が見られた。

第I層：中学校及び公民館として利用されていた頃の盛土。層厚は20~30cm程である。底面付近には焼失した中学校火災面が部分的に残存している。

第II層：I層直下で認められた客土。層厚20~40cm。暗褐色のシルトを基調とし、にぶい黄褐色粘質シルトをブロック状に含む。しまりは弱く、中学校建設以前にこの地に存在した桑畠の耕作土とみられる。

第III層：黒褐色の砂質シルトで、炭化物と酸化鉄粒を微量含む。層厚は10~15cm程である。近代陶磁器片を少量出土している。

第IV層：にぶい黄褐色の砂質シルト層で、層厚は10~15cmである。しまりはやや強く、酸化鉄粒と炭化物を微量含む。近世~近代遺物をごく少量包含している。

第V層：調査区のほぼ全域で確認された黒褐色粘質シルト層である。旧表土とみられる。層厚は約5~10cmで、大堀相馬陶器碗片瓶が出土しており、19世紀頃の堆積層とみられる。

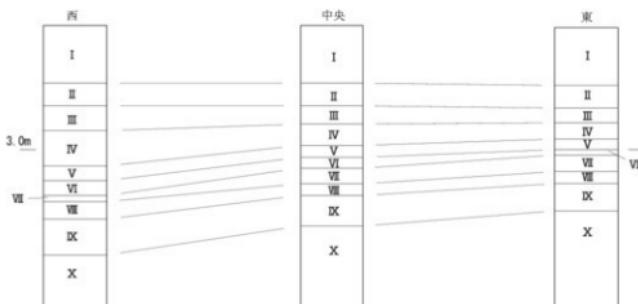
第VI層：旧表土に覆われるにぶい黄褐色粘質シルト層で層厚は5~10cm程である。調査区のほぼ全域で確認されている。遺構確認面である。

第VII層：黒褐色粘質シルト層。しまりは強く酸化鉄粒を少量含む。層厚は10cm程度で、遺物が含まれていないため、年代などについては不明である。

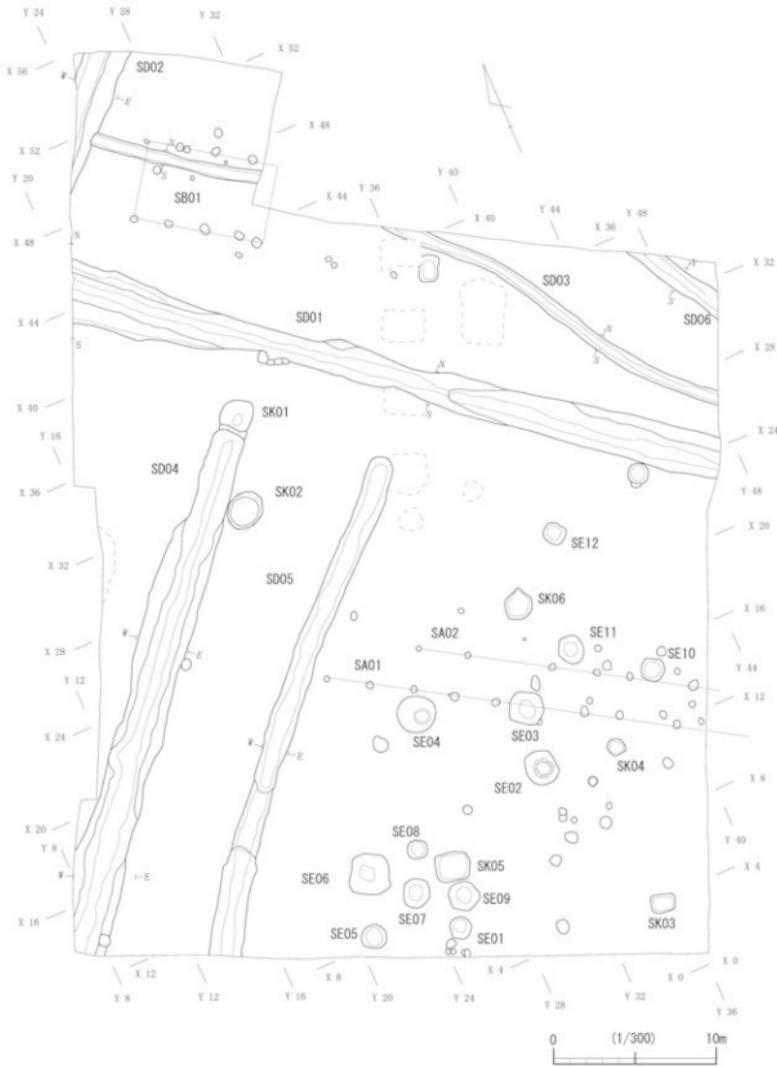
第VIII層：灰白色粘質シルト層。均質なシルト層で酸化鉄粒を多く含むが他の混入物は顕著には認められない。層厚は20~30cmほどで、遺物は出土していない。

第IX層：青灰色砂質シルト層。層厚は40~50cmである。井戸跡、溝跡などの壁面で確認できることから、広範な地域で堆積しているものと思われる。なお層中に植物遺体をごく少量含む部分もある。

第X層：灰オリーブ色砂層。細粒砂で形成される。井戸跡の壁面及び一部の溝跡底面で確認でき、その層厚は50cm以上である。主に南側で確認できたがおそらくは全面的に展開しているものと思われ、浜堤列の構成土である可能性が考慮できる。



第10図 基本土層模式図



第11図 遺構全体図

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

本調査地点で発見した遺構は、掘立柱建物跡1棟、柱列跡2列、井戸跡12基、溝跡6条、土坑6基、ほか小ピットである。本調査区北側で東西方向に走るSD01溝跡、中央部から南側にかけて南北に走るSD04溝跡・SD05溝跡は、その軸線関係からある時期の区画溝と捉えられる。この溝跡の内側（南東部）では井戸跡が集中して確認されるが、それ以外の部分からは全く確認できないなど偏った分布状況を呈する。なお、遺構確認面の海拔は概ね2.7m前後である。

出土遺物はSD01溝跡西側上層から大量の近世陶磁器片が出土している。また井戸跡ではSE02井戸跡、SE04井戸跡から同様に近世陶磁器が出土している。全体的な出土傾向としては大堀相馬、瀬戸・美濃系、肥前系をはじめとする陶器類が大勢を占めるが、染付を主体とした肥前系磁器も比較的多く出土している。以下に本調査地点での成果について詳述する。

1. 掘立柱建物跡

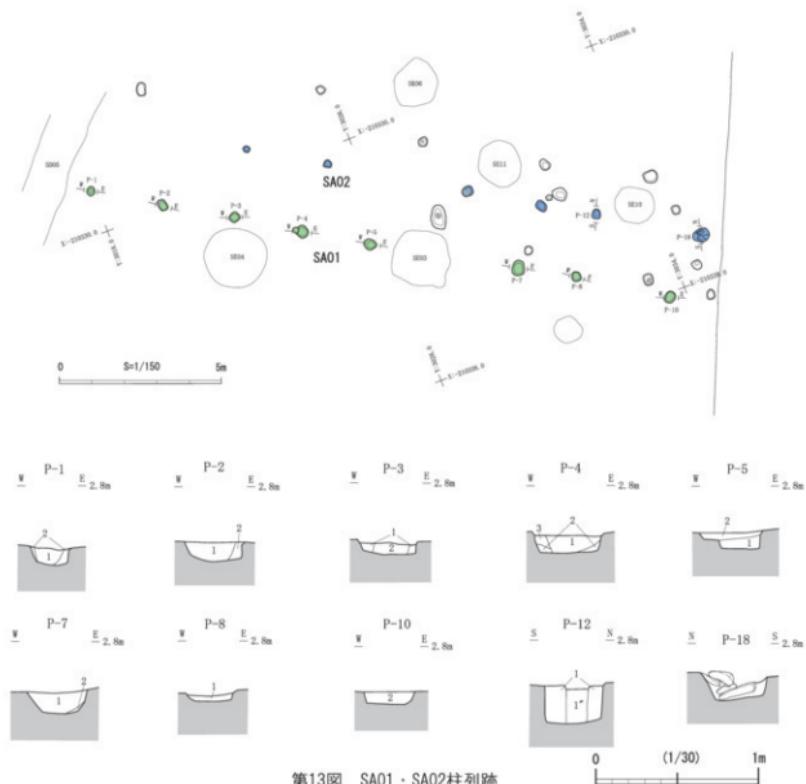


第12図 SB01掘立柱建物跡

SB01 堀立柱建物跡（第12図）

調査区北西部に位置する南北1間、東西3間の東西棟で、東側に半間の庇が取付くものと思われる。SD03 溝跡と重複するが、直接的に切り合わず、新旧関係は不明である。平面規模は南側柱列で桁行総長8.1m、西側柱列で梁行総長5.0m、推定建物面積は40.5 m²を測る。主軸方位はN-55°W。柱穴は9穴が確認でき、2ヶ所では直径約10cmほどで円形の柱痕跡がみとめられたが、他では明瞭に確認できなかった。柱穴の規模は長軸30~70cm、短軸20~60cm、確認面からの深さは9~29cmほどであり、平面形は橢円形あるいは不整形である。掘方埋土は大別して黒褐色・暗褐色・にぶい黄褐色のシルトで構成され、地山ブロック(灰白色シルト)を若干含む。

遺物は出土していない。



2. 柱列跡

SA01 柱列跡（第 13 図）

調査区中央部から東西方向に延び、東側は調査区外へさらに展開すると思われる。SE03 井戸跡と重複し、これより古い。なお、本址は北側に位置する SD01 溝跡と平行し、また SD05 溝跡とはほぼ直交関係にあることから、溝によって大きく区画された内部をさらに小規模に区画するための溝跡あるいは柵跡である可能性が高い。確認した柱列の規模は東西方向 8 間以上（総長 23.8m）で、柱穴は 8 穴であり、うち 7 穴で柱痕跡がみられる。柱穴の規模は長軸 28~47cm、短軸 24~35cm、確認面からの深さは 5~15cm ほどであり、平面形は円形あるいは梢円形である。柱痕跡は径 8~10cm の円形である。主軸方位は N - 59° - W。掘方埋土は黒褐・暗褐・にぶい黄褐色などのシルトで、地山ブロック(灰白色シルト)をやや多く含む。

遺物は出土していない。

SA02 柱列跡（第 13 図）

調査区中央部から東西方向に延び、東側は調査区外へさらに展開すると思われる。本址は南側に位置する SA01 柱列跡と平行していることから、同様に屋敷地内部を細分するための区画施設である可能性が高いが、SA01 柱列跡との新旧関係については不明である。確認した柱列の規模は東西方向 5 間以上（総長 18.2m）で、柱穴は 6 穴であり、うち 3 穴で柱痕跡がみられる。柱穴の規模は長軸 22~53cm、短軸 20~40cm、確認面からの深さは 14~21cm ほどであり、平面形は円形あるいは梢円形である。柱痕跡は径 8~10cm の円形である。主軸方位は N - 59° - W。掘方埋土は黒褐・暗褐・にぶい黄褐色などのシルトで、地山ブロック(灰白色シルト)をやや多く含む。なお、調査区の東端に位置する P-18 では底面に栗石または礎盤石の可能性がある縁が確認されている。

遺物は出土していない。

3. 井戸跡

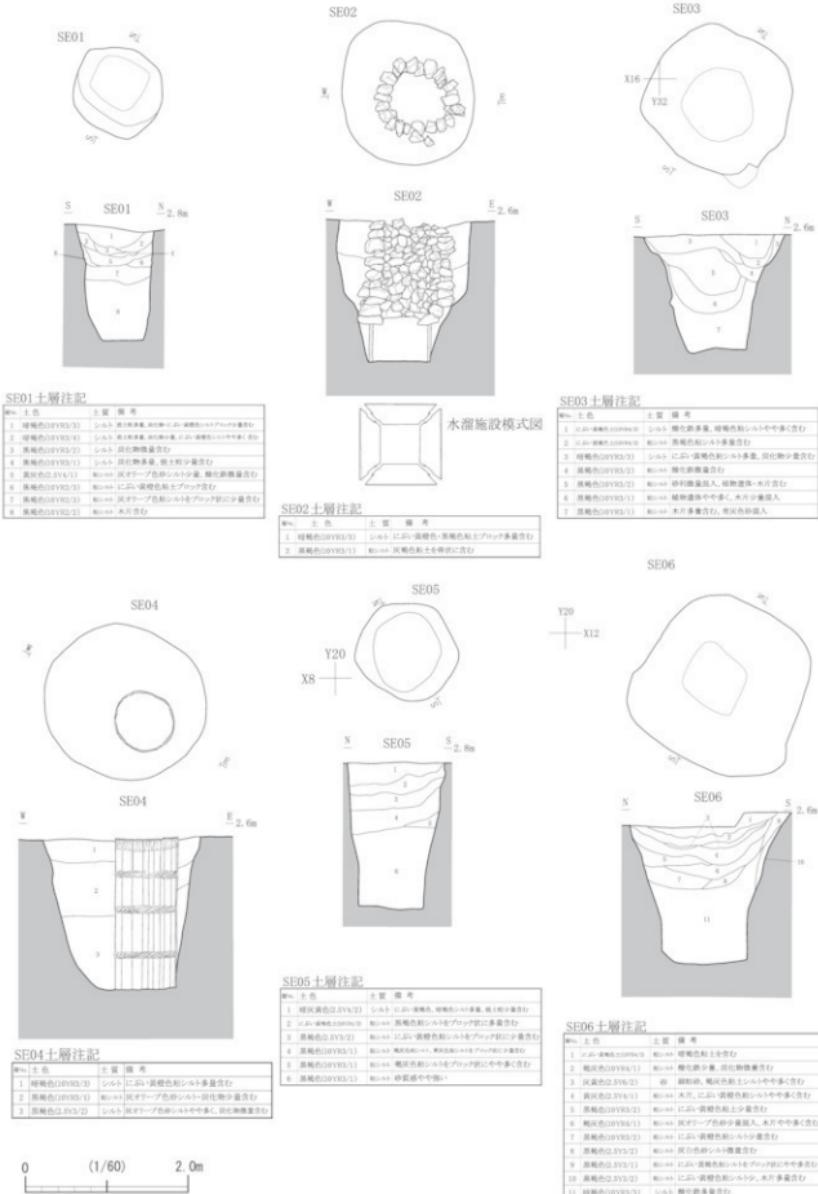
SE01 井戸跡（第 14・15 図）

調査区南側中央部に位置する。素掘りの井戸で平面形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸 1.08m、短軸 1.06m を測る。断面形状はほぼ円筒形状を呈し、確認面より 1.43m で底面を検出している。堆積土は大別して 8 層に分層でき、1 ~ 6 層は人為的理土、7・8 層は自然堆積土と考えられる。

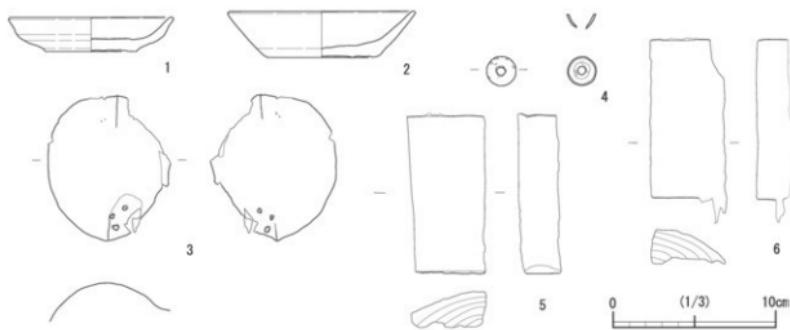
遺物は、15 図 1 ~ 6 が出土している。このうち 1 の瀬戸・美濃産皿は覆土上層（1 層）から、2 のかわらけ、3 の不明銅製品、4 の煙管火皿は覆土中層（5 層）から出土している。

SE02 井戸跡（第 14・16~19 図）

調査区南東部に位置する。掘り方平面形状はやや南北に長い梢円形であり、規模は長軸 1.86m、短軸 1.73m を測る。断面形状は中位より狭くなる漏斗状を呈し、確認面より 1.75m で底面を検出している。この最下面ではそれぞれ長さ約 70cm、幅約 40cm、厚み 3.5~4.0 cm を計測する凸型の板材 2 枚、凹型の板材 2 枚を四角形に組み合わせて水溜施設を設置した後に、人頭大ほどで無加工の礎石を円形に積み上げて井戸桿としていた。安山岩を主体とした礎石は 11~12 段ほど積み上げるが、いずれも長軸方向を中心部から放射状に配置しており、また積み上げに際しては内部への転



第14図 井戸跡(1)



SE01出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	陶器	皿	瀬戸	16c末	(10.2)	(5.6)	2.1	内底面横村着・磨耗 内面一部釉剥離 外底面に輪状痕有	13-11	61
2	土器	かわらけ	在地	17c末～18c初	11.6	6.7	2.85	外表面横ナデ 内底面ナデ 回転系切	21-3	308
3	金属製品	不明鋼製品			8.95	7.55	-	下部に穿孔3箇所	22-1	68
4	金属製品	煙管			0.8	0.8	-	火皿 真鍮製	22-2	69
5	木製品	不明			9.9	4.9	-	両端部切削面あり 板目取り	24a	
6	木製品	不明			11.5	4.7	-	両端部切削面あり 板目取り	19-8	24b

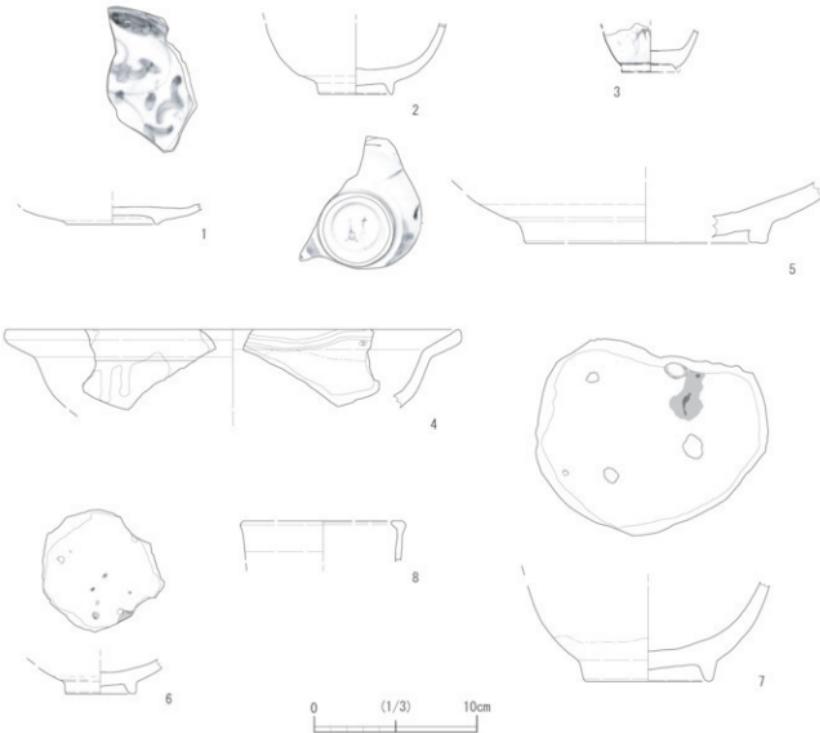
第15図 SE01出土遺物

落防止のためか井戸内側が高く、裏込側が若干低くなっていた。井戸内の堆積土は2層、掘り方は3層に分層でき、全て人為的埋土である。なお、井戸内の北東隅堆積土中からは竹が1本直立した状態で埋没していた。竹は遺存状態が劣悪で取り上げられなかったが、節は抜かれていなかった。

遺物は全て井戸内からの出土であり、掘り方からの出土は無い。出土遺物は染付碗皿、陶器鉢・碗・灰吹、壺甕類、擂鉢、砥石、漆器椀、手桶、曲物、杭などが出土している。このうち 17 図 2 ～ 7 の擂鉢は胎土からほぼ同一個体と考えられるが、接合関係はない。また 18 図 2 の漆器椀は内面及び外面の文様は朱漆、外面及び高台内は黒漆が施される。19 図 2 は桶であり、立木 10 枚で作られる。角状に対となる立木の 2 本には円形の孔が穿たれているが、位置的に低いことから井戸から水を汲むための担い桶と考えられる。

SE03 井戸跡（第 14 図）

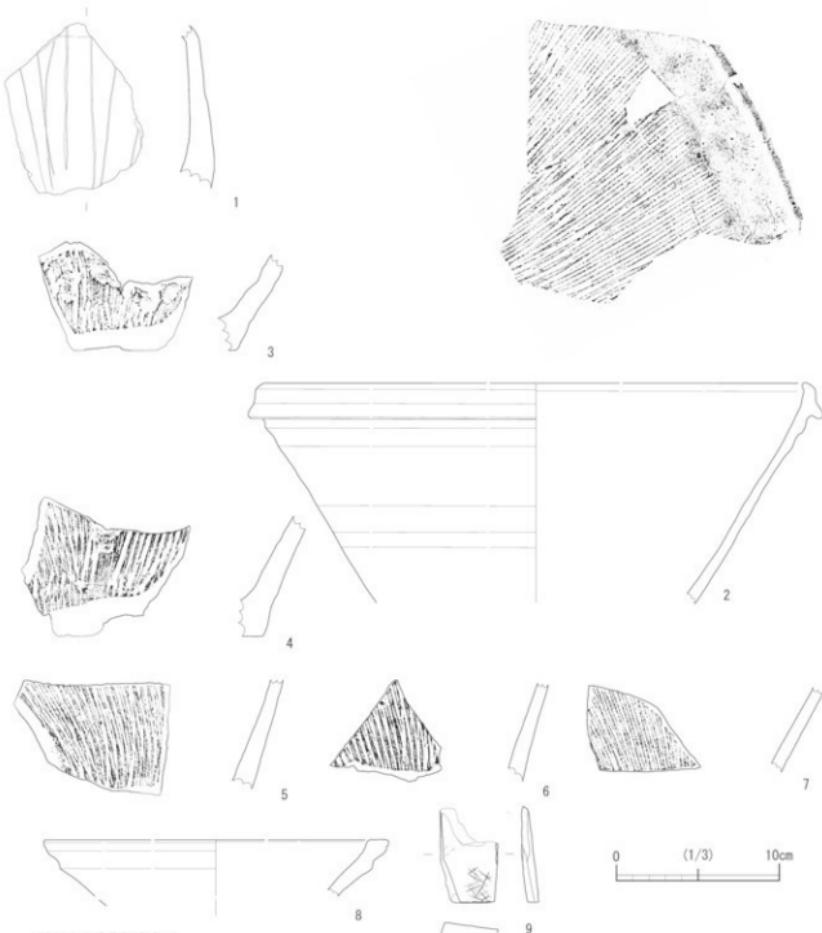
調査区南東部に位置する。SA01 柱列跡と重複し、これより本址が新しい。素掘りの井戸で平面



SE02出土遺物観察表

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	磁器	染付皿	肥前	17c前	—	(5.7)	(1.25)	草木文 表面施着物有	10-9	42
2	磁器	染付碗	肥前	18c前	—	4.6	(1.4)	不明文様 外面に2条巻縞 高台内側有	10-11	45
3	磁器	染付小杯	肥前	19c	—	(3.7)	(2.6)	草花文 2条巻縞	10-7	44
4	陶器	鉢	唐津	17c後～18c	(28.2)	—	(4.8)	口縁部波状文 灰釉付掛け 下平部斜鋸彫有	12-10	65
5	陶器	鉢	唐津	17c後～18c	—	(15.0)	(3.75)	内外面灰釉	12-7	66
6	陶器	碗	大隅相馬	18c後～19c	—	(4.4)	(2.1)	釉付行銷縞(不明文様) 斜り高台 内底面凹縛3ヶ所	14-10	59
7	陶器	鉢	唐津	17c後～18c	—	8.0	(6.1)	内外面灰釉 内底面に凹縛4ヶ所 斜り出し高台	12-9	67
8	陶器	灰吹小	不明	19c?	(10.2)	—	(2.5)	付掛け 斜り縞	15-32	54

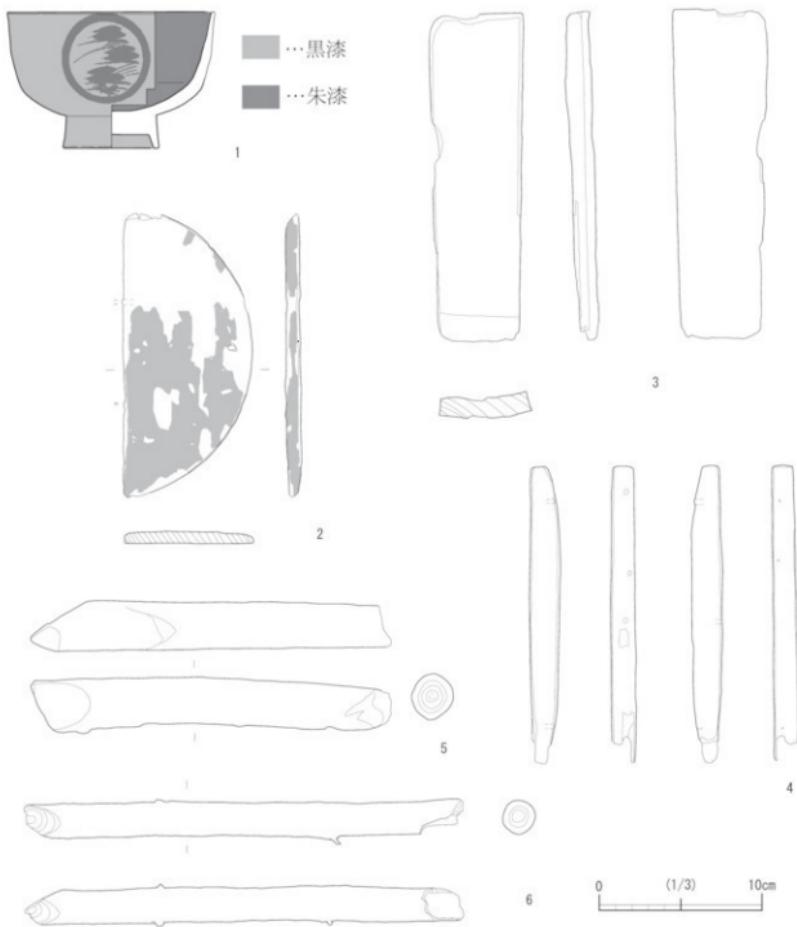
第16図 SE02出土遺物・1



SE02出土遺物観察表 2

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登錄 番号
1	陶器	壺・甕	不明	19c?	—	—	(10.6)	外面部鉛粒 外面に削離7本有	15-6	70
2	陶器	盤鉢	在地△	19c	(34.6)	—	(13.1)	内外面鉛粒 内面自然剥落	16-12	71
3	陶器	盤鉢	在地△	不明	—	—	(5.9)	内外面鉛粒 焼成不良	—	76
4	陶器	盤鉢	在地△	不明	—	—	(7.4)	焼成不良	—	77
5	陶器	盤鉢	在地△	不明	—	—	(7.1)	内外面鉛粒 焼成不良	—	78
6	陶器	盤鉢	在地△	不明	—	—	(6.6)	内外面鉛粒 焼成不良	—	79
7	陶器	盤鉢	在地△	不明	—	—	(5.2)	内外面鉛粒	—	80
8	陶器	鉢	不明	不明	(21.2)	—	(3.5)	内外面鉛粒	12-4	81
9	石製品	硃石			(0.85)	(3.5)	—	剥離有	21-12	72

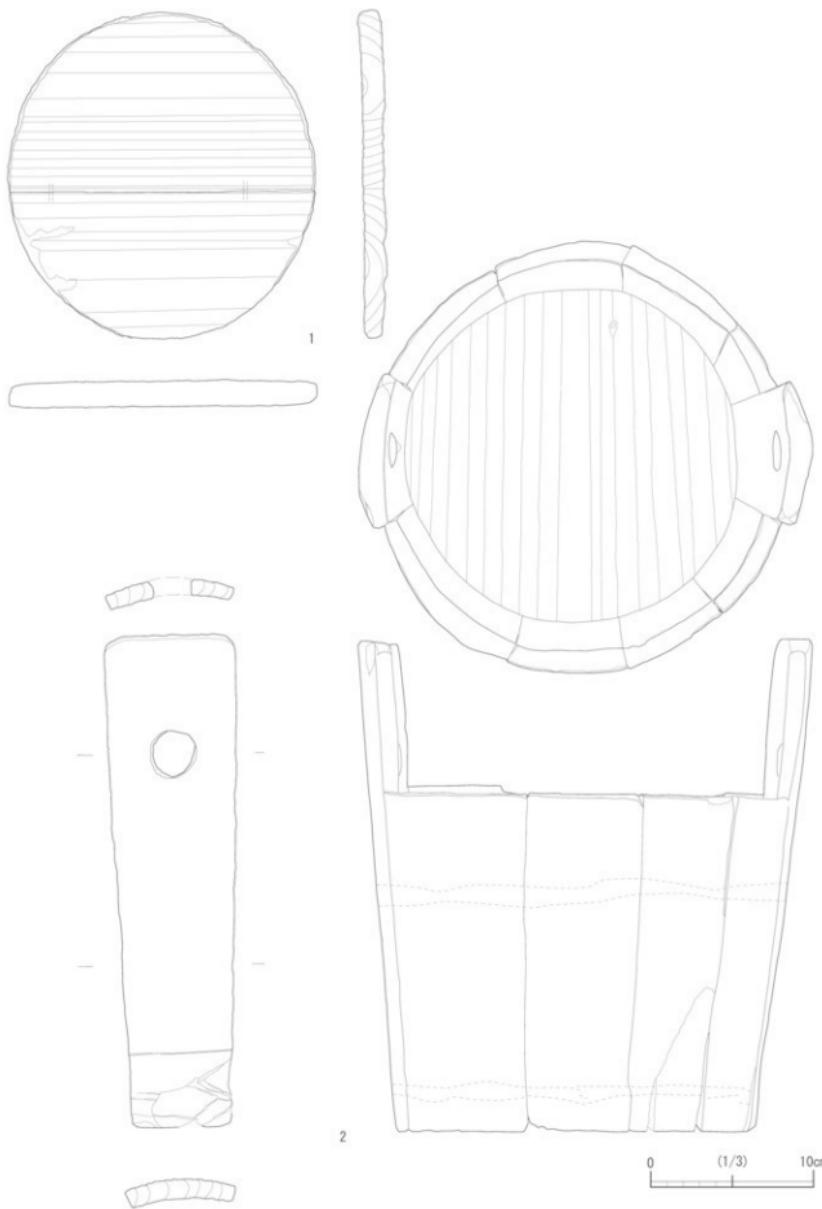
第17図 SE02出土遺物・2



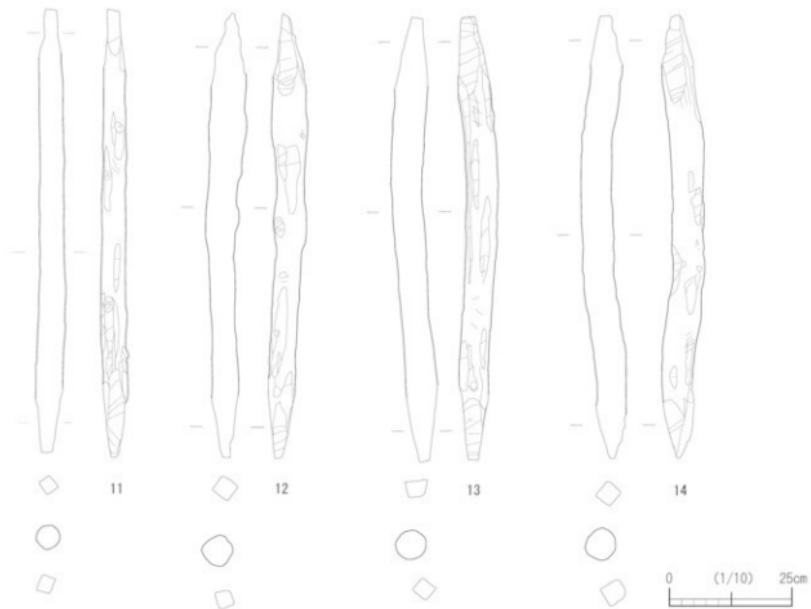
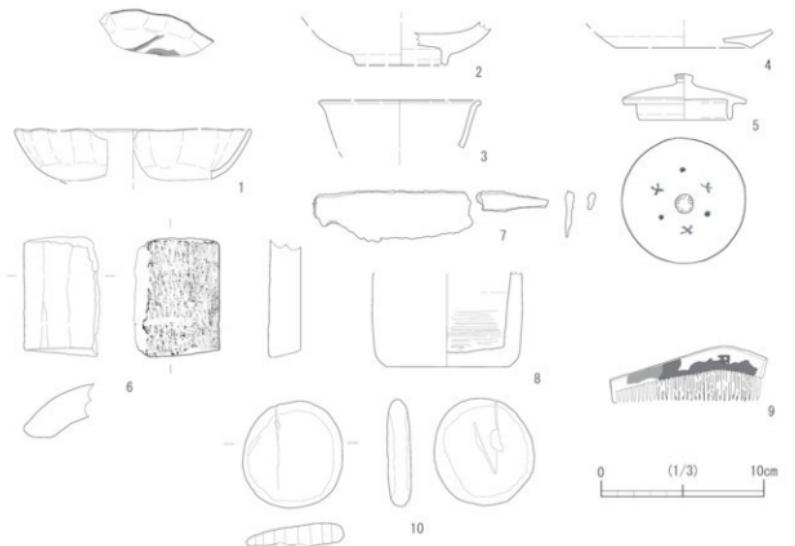
SE02出土遺物観察表 3

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	漆器	桶	不明	19c?	12.8	5.9	8.45	内面朱漆 外面黒漆 文様は朱漆に上乙松文	18-1	22
2	木製品	桶			17.5	8.05	C1.1	底板 板目取り 表面に黒漆付着 板材か	19-3	6
3	木製品	手桶			22.5	5.85	C1.7	側板 板目取り 板材か	19-9	8
4	木製品	桶			18.45	1.95	-	把手 板材か		7
5	木製品	板			22.1	19.0	-		19-11	9
6	木製品	板			2.8	27.0	-		19-12	10

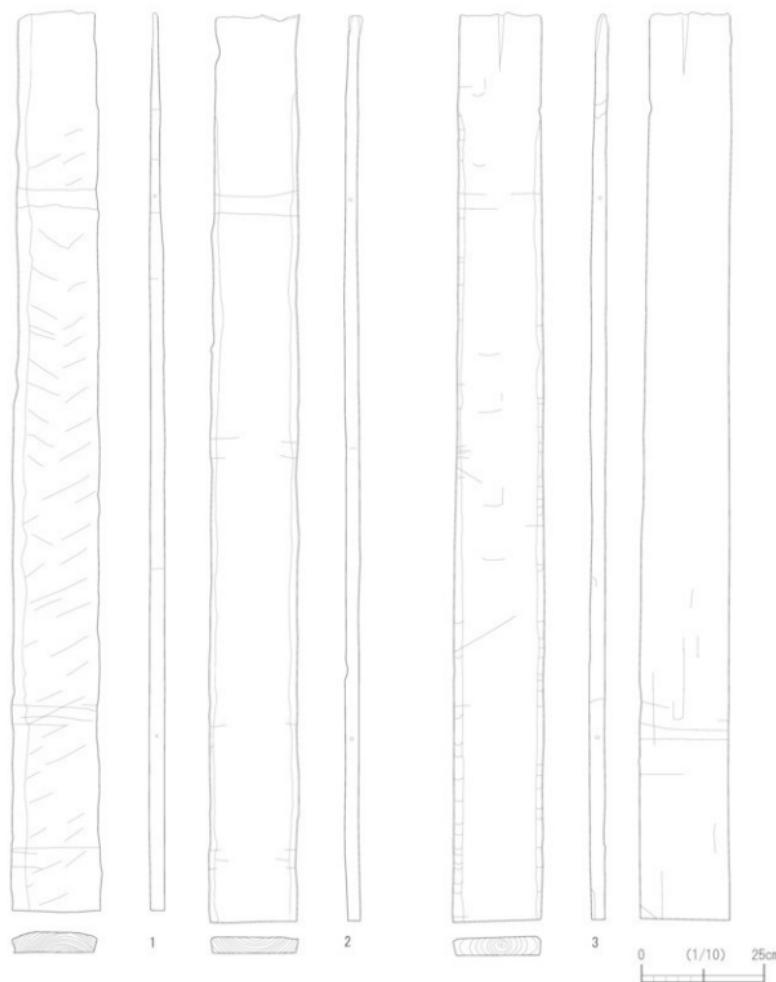
第18図 SE02出土遺物・3



第19図 SE02出土遺物・4



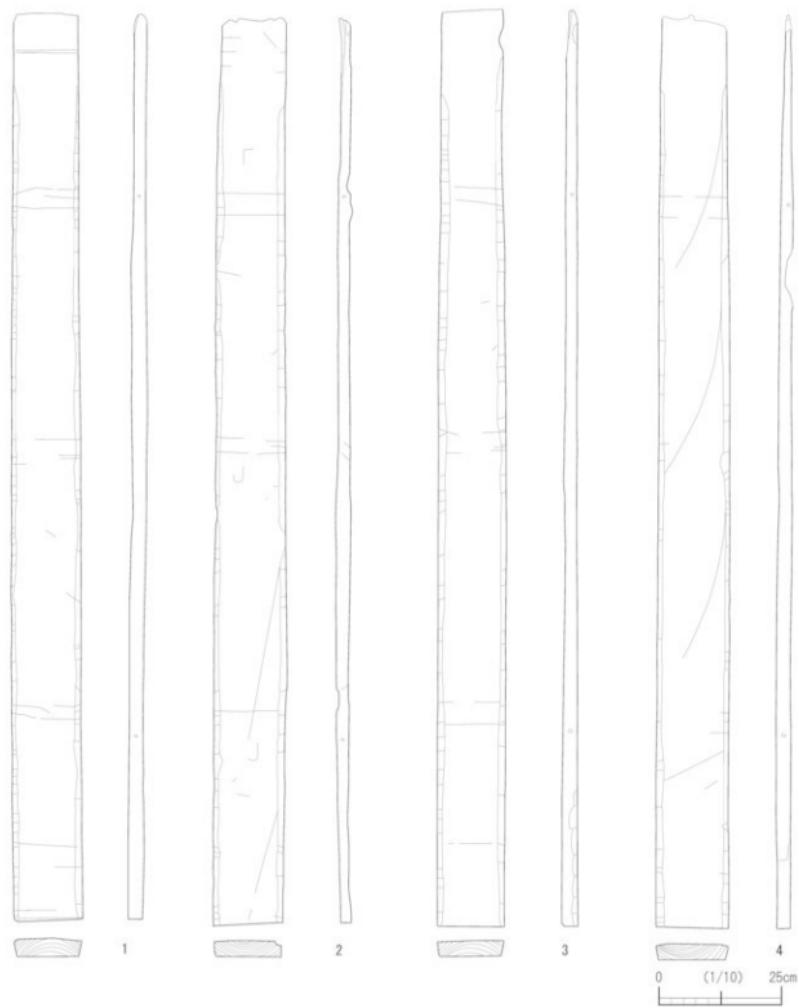
第20図 SE04出土遺物・1



SE04出土遺物観察表2

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	木製品	井戸枠			184.0	18.0	4.0	板目取り	20-1	101
2	木製品	井戸枠			186.0	18.0	3.5	板目取り	20-2	101-2
3	木製品	井戸枠			186.0	18.5	4.0	板目取り	20-3	101-3

第21図 SE04出土遺物・2



SE04出土遺物觀察表 3

No.	種別	器種	生産地	年代	口徑・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	壁紙 番号
1	木製品	井戸枠			186.5	15.0	4.0	板目取り	20-4	101-4
2	木製品	井戸枠			186.0	15.0	3.0	板目取り	20-5	101-5
3	木製品	井戸枠			188.0	14.0	3.5	板目取り	20-6	101-6
4	木製品	井戸枠			187.5	15.0	3.5	板目取り	20-7	101-7

第22図 SE04出土遺物・3



SE04出土遺物觀察表 3

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	木製品	井戸枠			196.0	15.0	3.5	板目取り	20-8	101-8
2	木製品	井戸枠			196.0	18.0	4.0	板目取り	20-9	101-9
3	木製品	井戸枠			194.0	19.0	3.5	板目取り	20-10	101-10
4	木製品	井戸枠			196.0	15.0	3.0	板目取り	20-11	101-11
5	木製品	井戸枠			196.0	12.0	3.5	板目取り	20-12	101-12

第23図 SE04出土遺物・4



SE04出土遺物観察表 5

No.	種別	部機	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	木製品	井戸棒			186.5	11.0	4.0	板目取り	20-13	101-13
2	木製品	井戸棒			187.0	12.0	3.5	板目取り	20-14	101-14
3	木製品	井戸棒			184.5	12.0	3.0	板目取り	20-15	101-15
4	木製品	井戸棒			187.5	14.0	3.5	板目取り	20-16	101-16
5	木製品	井戸棒			186.5	11.0	4.0	板目取り	20-17	101-17

第24図 SE04出土遺物・5

SE04 出土遺物観察表 4

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	直径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	部録 番号
1	木製品	桶			28.2	19.0	—	底板 板目柄付 杉材	19-1	10
2	木製品	桶			29.0	26.7	30.4	底板にはタガ正直 板目柄付 杉材	19-2	11

SE04 出土遺物観察表 1

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	直径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	部録 番号
1	陶器	染付型押皿	不明	不明	(14.6)	—	(3.00)	円錐底無下付蓋	10-10	56
2	陶器	碗	肥前か	19c	—	(5.7)	(2.60)	内外面灰釉 高台落削脚	13-22	69
3	陶器	小鉢	大堀相馬	19c	(10.0)	—	(2.85)	内外面灰釉	14-11	53
4	陶器	土瓶	大堀相馬	19c	—	(8.4)	(1.15)	内外面灰釉	15-29	62
5	陶器	土瓶蓋	大堀相馬か	19c～20c	6.0	—	2.8	円錐脚	15-22	39
6	瓦	丸瓦	在地	不明	(7.0)	(3.25)	—	内外面黒墨色 内面有目痕有	17-15	82
7	金属製品	刀子			—	3.2	0.5		22-6	30
8	漆器	圓盆			—	7.5	(5.8)	木地盤	18-2	25
9	木製品	横櫛			9.58	3.6	—	漆漆 一部に星字テ	19-8	23
10	木製品	手ぬ			6.6	6.2	—		19-7	21
11	木製品	板			91.0	6.0	—	両端端加工 基部分に板目通存	19-14	1
12	木製品	板			91.5	7.5	—	両端端加工 部分的に板目通存	19-15	2
13	木製品	板			91.0	8.5	—	両端端加工 部分的に板目通存	19-16	3
14	木製品	板			91.0	8.5	—	両端端加工 基部分に板目通存	19-17	4

形状は不整形を呈し、規模は長軸 1.80m、短軸 1.67m を測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より 1.42m 下で底面を検出している。堆積土は 7 層に分層でき、自然堆積層である 7 層を除くと全て人為的埋土である。なお、7 層は有機質の植物遺体を含んでいる。

遺物は出土していない。

SE04 井戸跡（第 14・20～24 図）

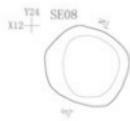
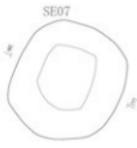
調査区中央部南側に位置する。平面形状はほぼ円形の掘り方を呈する。規模は長軸 2.02m、短軸 1.83m を測る。断面形状は底面がやや広い円筒形状を呈し、確認面より 1.85m 下で底面を検出している。この掘り方の南西隅に高さ 1.8m ほどで底板が無い桶を埋設して井戸枠としている。桶は 17 枚の立木で構成され、上・中・下の 3 筒所を竹製のタガで締める。また立木はそれぞれ上下 2 筒所を竹釘によって連結されていた。3 層に分層できた掘り方埋土は全て人為的埋土であり、同様に崩落により分層はできなかった井戸内部の堆積土も全て人為的埋土である。

遺物は全て井戸枠内からの出土であり、掘り方からの出土は無い。出土遺物は染付型押皿、陶器鉢・小杯・土瓶・土瓶蓋・丸瓦、金属製品の鉄製刀子のほか、木製品として筒状製品、横櫛、不明円盤状製品、杭などが出土している。このうち 20 図 8 の筒状製品は内外面とも漆を施さない木地製品であり、また 10 の用途不明の円盤状製品縁部は丁寧に整形されている。

SE05 井戸跡（第 14・26 図）

調査区南端中央に位置する。素掘りの井戸で平面形状は不整円形を呈し、規模は長軸 1.20m、短軸 1.17m を測る。断面形状は円筒状を呈し、確認面より 1.79m 下で底面を検出している。堆積土は大別して 6 層に分層でき、自然堆積層である 6 層を除くと全て人為的埋土である。

遺物は 26 図 1 の永楽通寶と 2 の桶立木が出土している。



SE07土層注記

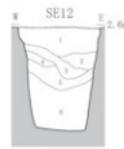
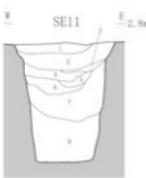
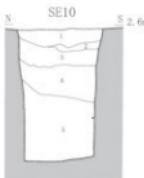
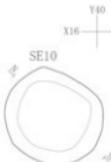
番号	土色	土質・備考
1	黄褐色(2,YVA/1)	シルト 売出物多量、鐵化鉄や多く含む
2	黄褐色(2,YVA/2)	シルト 売出物多量
3	黄褐色(2,YVA/2)	モルタル灰褐色シルト鉄化物含む
4	黄褐色(2,YVA/1)	モルタル灰褐色シルト鉄化物含む
5	黄褐色(2,YVA/2)	モルタル灰褐色シルト鉄化物含む
6	黄褐色(2,YVA/2)	モルタル灰褐色シルト鉄化物含む
7	黄褐色(2,YVA/2)	モルタル灰褐色シルト鉄化物含む
8	黄褐色(2,YVA/2)	モルタル灰褐色シルト鉄化物含む

SE08土層注記

番号	土色	土質・備考
1	黄褐色(2,YVA/2)	シルト 水溶性褐色シルト鉄化物多量含む
2	黄褐色(2,YVA/1)	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む
3	黄褐色(2,YVA/2)	シルト 水溶性褐色シルト鉄化物多量含む
4	黄褐色(2,YVA/1)	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む
5	黄褐色(2,YVA/2)	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む

SE09土層注記

番号	土色	土質・備考
1	暗褐色(3)IVY3/3	シルト 鉄化物多量、鐵化鉄や多く含む
2	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色、鉄化物多量含む
3	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む
4	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む
5	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む



SE11土層注記

番号	土色	土質・備考
1	暗褐色(3)IVY3/3	シルト 鉄化物多量、鐵化鉄や多く含む
2	暗褐色(3)IVY3/3	シルト 鉄化物多量、鐵化鉄や多く含む
3	暗褐色(3)IVY3/3	シルト 鉄化物多量、二回り 黄褐色シルト鉄化物多量含む
4	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む
5	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色、鉄化物多量含む
6	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む
7	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む
8	オーブー褐色(3)IV/2	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む

SE12土層注記

番号	土色	土質・備考
1	暗褐色(3)IVY3/3	シルト 鉄化物多量、鐵化鉄や多く含む
2	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色、鉄化物多量含む
3	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む
4	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む
5	暗褐色(3)IVY3/3	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む
6	オーブー褐色(3)IV/2	モルタル灰褐色シルト鉄化物多量含む

0 (1/60) 2.0m

第25図 戸井跡(2)

SE06 井戸跡（第 13・25 図）

調査区南側中央に位置する。素掘りの井戸で平面形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸 2.20m、短軸 1.97m を測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より 1.85m 下で底面を検出している。堆積土は 11 層に分層でき、自然堆積層である 10・11 層を除くと全て人為的埋土である。

遺物は 26 図 2 の金属製品である鉄製刀子が出土している。

SE07 井戸跡（第 25 図）

調査区南側中央に位置する。素掘りの井戸で平面形状は梢円形を呈し、規模は長軸 1.55m、短軸 1.35m を測る。断面形状は円筒状を呈し、確認面より 1.47m 下で底面を検出している。堆積土は 8 層に分層でき、自然堆積層である 6～8 層を除くと全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SE08 井戸跡（第 25・26 図）

調査区南側中央に位置する。素掘りの井戸で平面形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸 1.02m、短軸 0.90m を測る。断面形状は円筒状で、確認面より 1.35m 下で底面を検出している。堆積土は 5 層に分層でき、1～4 層は人為的埋土、5 層は有機質の植物遺体をやや多く含む自然堆積である。

遺物は 26 図 1・2 の染付皿が 2 点出土している。

SE09 井戸跡（第 25 図）

調査区南側中央に位置する。素掘りの井戸で平面形状は不整円形を呈し、規模は長軸 1.62m、短軸 1.46m を測る。断面形状はほぼ円筒状で、確認面より 1.77m 下で底面を検出している。堆積土は 4 層に分層でき、1・2 層は人為的埋土、3・4 層は有機質の植物遺体を含む自然堆積である。

遺物は出土していない。

SE10 井戸跡（第 25・26 図）

調査区東端中央部に位置する。SA02 柱列跡と重複する可能性があるが直接切り合わず、新旧関係は不明である。素掘りの井戸で平面形状は隅丸方形を呈し、規模は 1.23m、短軸 1.08m を測る。断面形状は円筒状を呈し、確認面より 1.64m 下で底面を検出している。堆積土は 5 層に分層でき、1～3 層は人為的埋土、4・5 層は有機質の植物遺体を多く含む自然堆積である。

遺物は 26 図 6 の生産地不明の擂鉢片が 1 点出土している。

SE11 井戸跡（第 25 図）

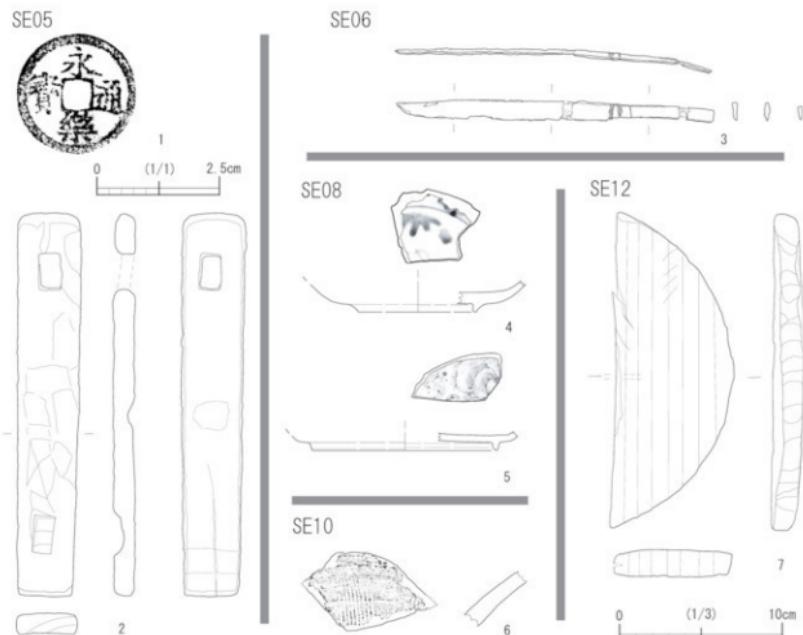
調査区東側中央部に位置する。素掘りの井戸で平面形状は梢円形を呈し、規模は長軸 1.46m、短軸 1.28m を測る。断面形状は円筒状で、確認面より 1.46m 下で底面を検出している。堆積土は 8 層に分層でき、1～7 層は人為的埋土、8 層は有機質の植物遺体をやや多く含む自然堆積である。

遺物は出土していない。

SE12 井戸跡（第 25・26 図）

調査区中央部東側に位置する。素掘りの井戸で平面形状は梢円形を呈し、規模は長軸 1.20m、短軸 0.98m を測る。断面形状は円筒状で、確認面より 1.26m 下で底面を検出している。堆積土は 6 層に分層でき、1～4 層は人為的埋土、5・6 層は有機質の植物遺体を多く含む自然堆積である。

遺物は 26 図 7 の木製品曲物底板が 1 点出土している。



SE05出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	古鏡	永樂通宝	中国	15c~	—	—	—	出量(mn) 外径24.99 内径20.91 厚さ1.03	22-10	35
2	木製品	桶			23.6	3.95	—	側板 板目取り	19-5	13

SE06出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
3	金製品	刀子			19.6	1.25	—		22-7	30

SE08出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
4	磁器	染付皿	肥前	17c後	—	(7.0)	(1.0)	質文? 高台染付砂粒付着	10-8	43
5	磁器	染付皿	不明	不明	—	11.5	(1.0)	透明釉 上面に不明文様 高台内側に染付砂粒付着	10-1	48

SE10出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
6	陶器	桶鉢	不明	19c以前	—	—	—		16-8	83

SE12出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
7	木製品	油壺			19.5	7.6	—	油瓶 板目取り 杉材	19-2	15

第26図 SE05・06・08・10・12出土遺物

4. 溝跡

SD01 溝跡（第 27～41 図）

本調査区北側西壁から東壁にかけて直線状に延びる溝跡である。東西ともに調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 40.6m に渡って検出している。主軸方位は N-51°-W。壁面観察及び西側の壁面付近の平面観察において、ほぼ同位置で少なくとも 3 時期の造り替えが行われていたことを確認している。検出面での規模は上幅 1.4～2.8m、下幅 0.4～0.8m、確認面よりの深さは 77～85cm を測る。断面形状は大部分で逆台形を呈し、東側から西側へ緩やかに傾斜している。堆積土は、上層では人為的埋土である暗褐色やにぶい黄褐色の粘質シルトで概ね構成されているが、下層部分では全て有機質の植物遺体等を多量に含む黒褐色粘質シルトを基調とした自然堆積である。なお、本址の性格としては、それぞれ直接は連結していないものの、後述する SD04 溝跡、SD05 溝跡などとほぼ直交関係にあることから屋敷地を区画するための区画溝である可能性が高い。またこの西側延長線上では、現在も同様の主軸を有する区画がみられる。

遺物は 1 層（27 図最上段土層図の 10～12 層に対応）を中心に 468 点を数える大量の近世陶磁器、及び加工骨などが出土している。また 2 層（同図 13・14 層に対応）からも 38 点を数える少量の近世陶磁器が出土している。3 层（同図 15 層に対応）・4 层（同図 16 層に対応）からは有機質の遺物は多く出土するが、陶磁器類はそれぞれ 5 点前後と激減している。1 层中から出土した近世陶磁器類の出土位置については、主に西側から中央部にかけて分布し、東側にいくほど出土量は減少する傾向がある。各層の時期としては、1・2 层では 17 世紀代から 19 世紀後半頃の年代観を与えられる遺物が見られるが、3・4 層では須恵器甕片、中世陶器甕・捏鉢片をはじめとし、16 世紀代の漆器椀・瓦質土器擂鉢片が最新となっており、堆積土の相違だけではなく出土遺物の年代観からも明瞭に時期差がうかがえる。なお、1 层中の西壁付近からは牛馬の中手骨などがまとまりをもって出土しているが、これらはいずれも関節部のみであり、骨幹部分は未製品も含めて出土していない。

SD02 溝跡（第 27・42 図）

調査区北西隅部に位置する南北溝跡で、約 4.8m に渡って検出した。主軸方位は N-39°-E。壁面観察からほぼ同位置で 2 時期の造り替えが行われていたと推定される。それぞれの規模は新段階では上幅 2.2m、下幅 1.5m、確認面よりの深さは 65 cm を測り、旧段階では上幅 1.1 m、下幅 0.65 m、確認面よりの深さは 93 cm を測る。新段階の溝跡の断面形状はやや深い皿状、旧段階の溝跡の断面形状は箱状を呈し、底面の起伏は南に向ってやや傾斜する。堆積土は上層では人為的埋土である暗褐色やにぶい黄褐色の粘質シルトで概ね構成されているが、下層部分では全て有機質の植物遺体等を多量に含む黒褐色粘質シルトを基調とした自然堆積である。

遺物は上層より青磁皿、陶器壺甕類、皿、碗片が 8 点ほど出土しているが、図示可能なものは 42 図 1 の陶器鉢のみである。なお、上下層ともにウメとクルミの種子が出土している。

SD03 溝跡（第 27・42 図）

調査区北側に位置する東西溝跡で、約 40.9m に渡って検出した。SD02 溝跡、SB01 掘立柱建物跡と重複し、前者よりは古く、後者との新旧関係については不明である。主軸方位は東側では N-36°-W であるが、西側では N-51°-W となる。規模は上幅 0.4～0.5m、下幅 0.25～0.3m、確

認面よりの深さは 6 cm を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、底面の起伏は殆ど無く平坦である。堆積土は黒褐色などのシルトで、自然堆積である。

遺物は 42 図 2 の中世陶器甕片が出土している。

SD04 溝跡（第 27・42 図）

調査区中央部西側から南部に位置する南北溝跡である。南端部は調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 35.2m に渡って検出している。主軸方位は N・40°・E。壁面観察からほぼ同位置で 2 時期の造り替えが行われていたと推定される。それぞれの規模は新段階で上幅 2.8~3.2 m、下幅 1.3m、確認面よりの深さは 65 cm を測り、旧段階は上幅 1.6~2.0m、下幅 0.6m、確認面よりの深さは 80 cm を測る。新段階の溝跡の断面形状はやや深い皿状、旧段階の溝跡の断面形状は箱状を呈し、底面の起伏は南に向ってやや傾斜する。堆積土は上層では人為的埋立である暗褐色やにぶい黄褐色の粘質シルトで概ね構成されているが、下層部分では全て有機質の植物遺体等を多量に含む黒褐色粘質シルトを基調とした自然堆積である。なお、本址の性格としては、SD05 溝跡と平行することから道路側溝の可能性も考慮できるが、北側へは展開しておらずまた東西方向でもそれぞれに対応する溝跡は見られない。以上の点から現時点では前述のとおり直接は連結していないものの、SD01 溝跡とほぼ直交関係にあることから屋敷地を区画するための区画溝である可能性を考慮したい。

遺物は 42 図 3 の石鉢片が出土している。

SD05 溝跡（第 27 図）

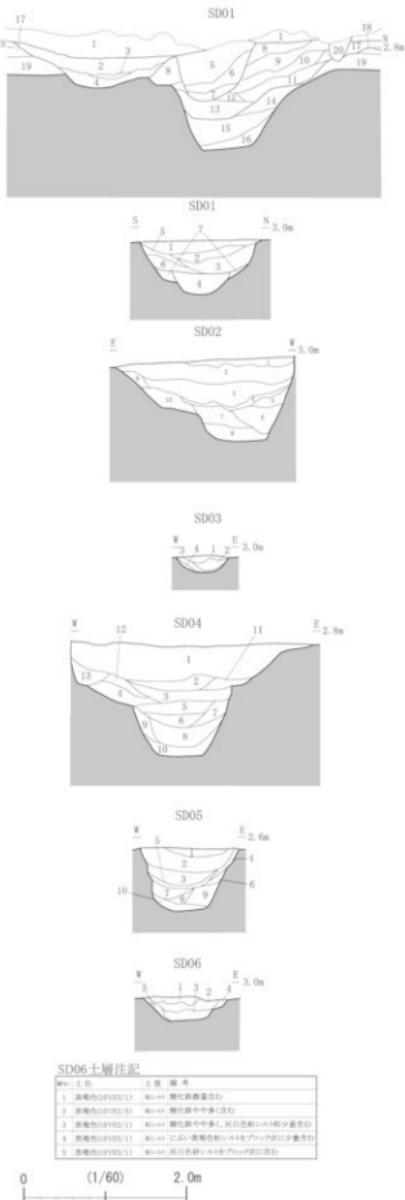
調査区中央部西側から南部に位置する南北溝跡である。南端部は調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 31.8m に渡って検出している。主軸方位は N・43°・E。規模は上幅 1.2~2.0m、下幅 0.6~1.0m、断面形状は箱状を呈するが、底面までの深さは北側・南側では確認面より 70 cm ほどであるのに対し、中央付近南寄りでの深さは 20 cm ほどであるなど一様ではない。堆積土は黒褐色などのシルトで、もっとも深い北側部分では下層は自然堆積であるが、これ以外は全て人為的堆積である。なお、本址の性格としても、前述のとおり直接は連結していないものの、SD01 溝跡とほぼ直交関係にあることから屋敷地を区画するための区画溝である可能性が高く、同様の走方向を呈する SD04 溝跡とは新旧関係にあるものと思われるが、それぞれ年代観の根拠となる遺物を欠くため、詳細把握については今後の課題である。

遺物は出土していない。

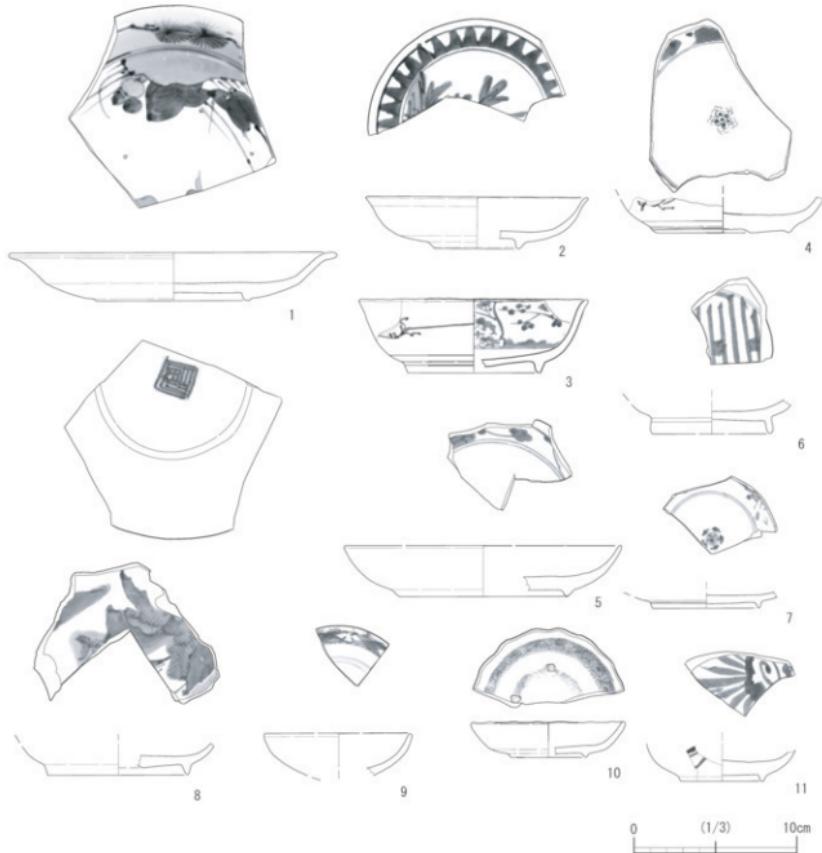
SD06 溝跡（第 27 図）

調査区北東隅に位置する東西溝跡で、約 6.2m に渡って検出した。主軸方位は N・33°・W。規模は上幅 1.2m、下幅 0.6m、確認面よりの深さは 0.67m を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、底面の高低差は殆ど無く平坦である。堆積土は黒褐色などのシルトで、自然堆積である。

遺物は出土していない。



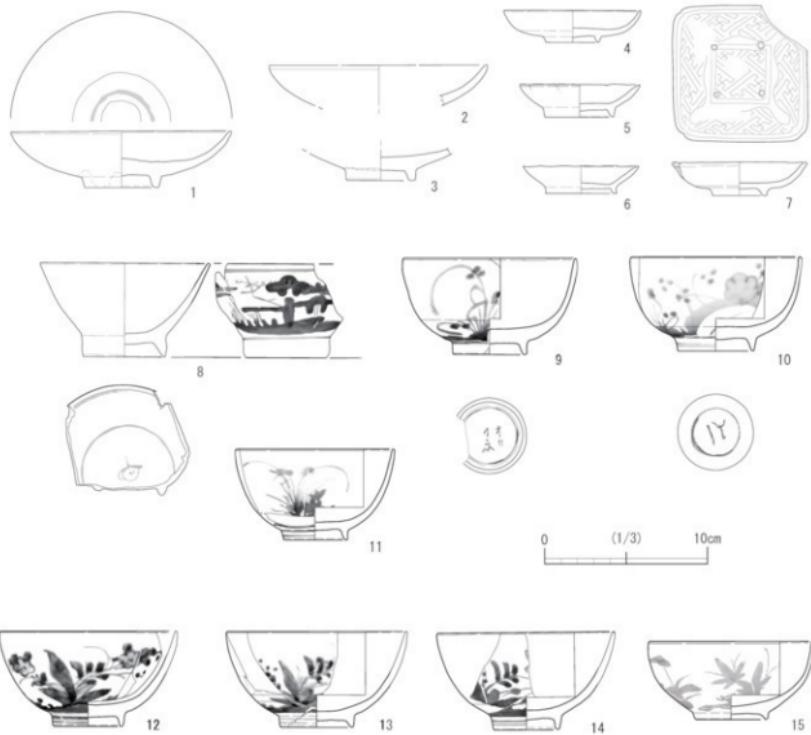
第27図 SD01・02・03・04・05・06溝跡



SD01 1層出土遺物觀察表 1

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	磁器	染付盤	肥前	17c前	20.4	9.4	2.05	体面内面菊文、底部草花文、底部外側孤弧文、日絞3ヶ所	9-8	379
2	磁器	染付盤	肥前	17c前	(13.8)	(5.4)	3.2	内外面透明釉、体面内面唐草文、底部草文？	9-14	376
3	磁器	染付盤	不明	19c	(14.2)	8.2	4.55	内面梅文・唐草文、底部玉莎花文、体面内面唐草文、高台部2条巻繩、「大」款有り	9-5	375
4	磁器	染付小皿	不明	18c	-	8.4	(2.2)	体面内面梅文、底部玉莎花文、高台部外側に2条巻繩、刻印の日輪台	9-12	373
5	磁器	染付盤	不明	18c~19c	(17.2)	(10.4)	3.15	内外面透明釉、内面梅文、2条巻繩、内面蛇の目軸剥ぎ	9-16	391
6	磁器	染付盤	不明	19c	-	(7.5)	(2.1)	内面幾何学文、外面高台部に2条巻繩、刻印高台	9-15	382
7	磁器	染付盤	肥前	17c後	-	6.6	(1.0)	内面2条巻繩、梅文？、五瓣花文、外面高台部に2条巻繩	9-7	381
8	磁器	染付盤	不明	19c	-	(8.7)	(1.9)	内外面透明釉、内底面山文文、刻印高台	9-13	374
9	磁器	染付小皿	不明	18c~19c	(9.2)	-	(2.1)	内面青釉、内面透明釉、西方棒文、口縁部に溝付番	9-10	392
10	磁器	型押皿	平瀬水	19c	9.6	(4.7)	2.25	内面に刻青草文、内面目綱2ヶ所	9-4	356
11	磁器	染付小皿	肥前	17c前	-	(5.1)	(2.3)	内外面透明釉、内外面文様不明	9-6	378

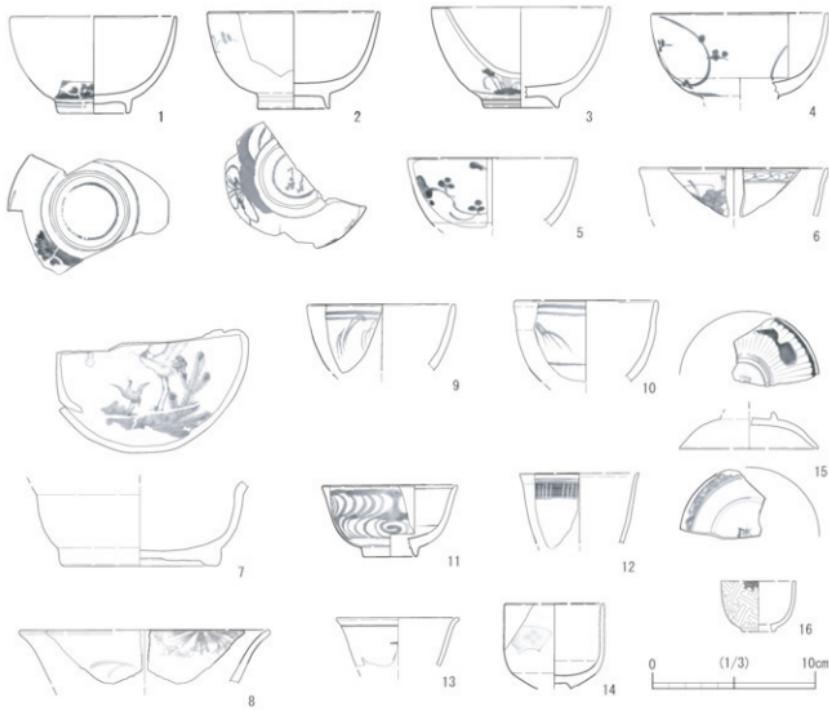
第28図 SD01 1層出土遺物・1



SD01 1層出土遺物観察表 1

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・底 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	青磁	皿	肥前	18c前	13.6	4.6	3.65	青磁釉、内面輪の日輪剥ぎ(砂付茎)、高台砂付茎	9-1	310
2	青磁	皿	肥前	不明	(13.4)	-	(2.3)	青磁釉	9-17	381
3	青磁	皿	肥前	不明	-	(4.2)	(1.95)	青磁釉、蛇の目輪剥ぎ、高台砂付茎、内底面に砂付茎	9-18	382
4	白磁	小皿	不明	不明	8.5	3.3	1.95	内外面白磁釉、削竹高台	9-9	387
5	白磁	梅花小皿	不明	不明	7.4	4.3	2.0	蔓付け白磁釉	9-3	322
6	白磁	梅花小皿	不明	不明	7.2	4.4	1.7	蔓付け白磁釉、内底面外周に沈綻	9-11	388
7	白磁	型押皿	平瀬水か	19c	8.4	3.4	2.05	内外面透明白磁、型底江原文、内底面に目録4ヶ所	9-2	319
8	磁器	広葉編	不明	19c	10.5	5.1	5.8	外底文様不明、口縁内面下部に2条捲繩、底部下に捲繩、底部斜面に横繩	11-8	352
9	磁器	菊付編	肥前	18c前	10.8	4.6	5.9	草花文、高台内面に「大明年製」	11-4	321
10	磁器	菊付編	肥前	18c前	10.6	4.7	5.8	内底面透明白磁、外底面草花文、口縁下に2条捲繩、底部下に捲繩、外底斜面に横繩	11-6	327
11	磁器	菊付編	肥前	18c前	5.8	4.0	5.6	高台外側に2条文、底面に直腹文・リシニヤク形2条文、外底部に1条文	11-1	309
12	磁器	編	肥前	11.0	4.4	5.85	内底面透明白磁、高台口に捲繩、高台外側に2条捲繩、外底面に捲繩	11-2	311	
13	磁器	菊付編	肥前	18c前	11.2	4.6	5.9	外底面草花文、下部に捲繩、高台部に2条捲繩、底面に捲繩	11-5	325
14	磁器	菊付編	肥前	18c前	11.0	4.1	6.0	外底面草花文、下部に捲繩、高台部に2条捲繩、底面に捲繩	11-7	330
15	磁器	菊付編	肥前	18c前	10.2	4.5	4.8	内底面透明白磁、草花文7、地成不良	11-3	312

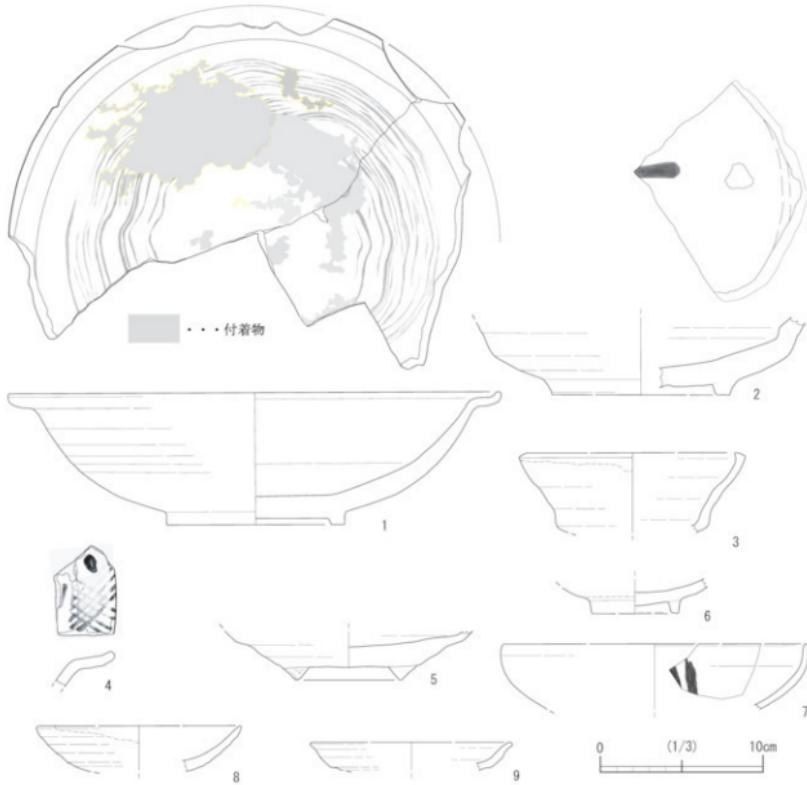
第29図 SD01 1層出土遺物・2



SD01 1層出土遺物観察表 3

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	磁器	染付碗	肥前	18c前?	10.3	4.5	6.0	外面草花文 高台間に2条網目 番付高台に砂付着 斜り高台	11-16	393
2	磁器	染付碗	肥前	18c	10.7	4.5	5.9	外面草花文 高台間に2条網目 番付高台 部有り	11-10	355
3	磁器	染付碗	肥前	18c前?	11.1	4.7	6.2	体面に直線文	11-12	383
4	磁器	染付碗	肥前	18c	11.0	—	(5.3)	体面に草花文	11-17	353
5	磁器	染付碗	肥前	18c	10.5	—	(4.2)	体面に草花文	11-9	354
6	磁器	碗	平塗水	不明	(11.7)	—	(2.96)	内外面透明釉 外面草花文 内面油鑽彫文	11-15	386
7	磁器	染付碗	肥前	18c後~19c	—	9.8	(5.2)	外面灰釉 内面透明釉 錦文 若松文 蛇の目高台	11-20	380
8	磁器	染付碗	瀬戸	19c	(15.6)	—	(3.3)	内外透明釉 内面松葉文 外面草文 内面に付着物	11-21	389
9	磁器	染付碗	肥前	17c前?	9.2	—	(4.1)	内外透明釉 外面2条網目 柳文	11-13	384
10	磁器	染付碗	肥前	17c前	8.9	—	(5.0)	内外透明釉 外面2条網目 柳文	11-14	385
11	磁器	染付小杯	瀬戸	19c	8.4	(3.4)	4.35	外而漬文 高台間に團扇 内面網目2ヶ所 底面不明文様	11-22	358
12	磁器	染付碗	瀬戸・美濃	19c	(7.4)	—	(4.3)	外而網目文	11-19	177
13	磁器	焼反碗	肥前か	不明	7.6	—	(3.0)	外而口縁下部に團扇 体部に不明文様	11-11	357
14	磁器	小杯	肥前	19c	6.2	—	(5.3)	内外透明釉 外面に不明文様	11-24	351
15	磁器	染付碗+蓋	瀬戸	19c	8.6	—	(2.3)	—	11-23	350
16	磁器	染付小碗	瀬戸か	19c	(4.6)	(2.0)	3.1	型抜記承文	11-18	176

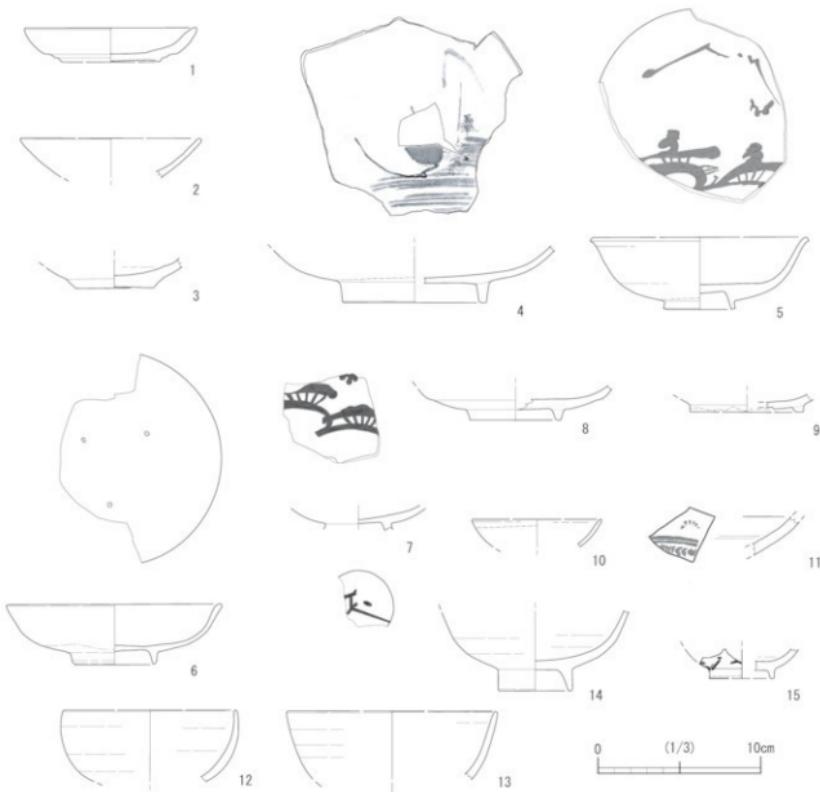
第30図 SD01 1層出土遺物・3



SD01 1層出土遺物観察表4

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	陶器	鉢	唐津	17c	(30.2)	11.0	8.1	白化粧土による象徴 未成不良	12-1	111
2	陶器	鉢	唐津か	不明	-	(11.0)	(4.8)	内底面に鉄軸による擦付け 脚付つけ高台	12-12	140
3	陶器	鉢	唐津	18c	(12.8)	-	(4.9)	口縁部鉄軸流し剥け	12-3	105
4	陶器	鉢	唐津	18c	-	-	(2.2)	両面白薬釉 緑部四方摩文 未成不良	12-2	183
5	陶器	鉢	唐津	18c?	-	(6.5)	(3.0)	底部削軸系切 脚貼り付け	12-8	106
6	陶器	鉢	小野相馬	18c~19c	-	(5.4)	(2.1)	脚付つけ高台	12-5	169
7	陶器	皿	大隅相馬	不明	(18.8)	-	(4.0)		12-14	125
8	陶器	皿	肥前	17c末~18c	(12.6)	-	(2.7)	青釉 同一破片有り	12-11	124
9	陶器	皿	棚口・美濃	16c末~17c初	(12.4)	-	(1.7)	断面漆黒が底有り 未成不良	12-15	127

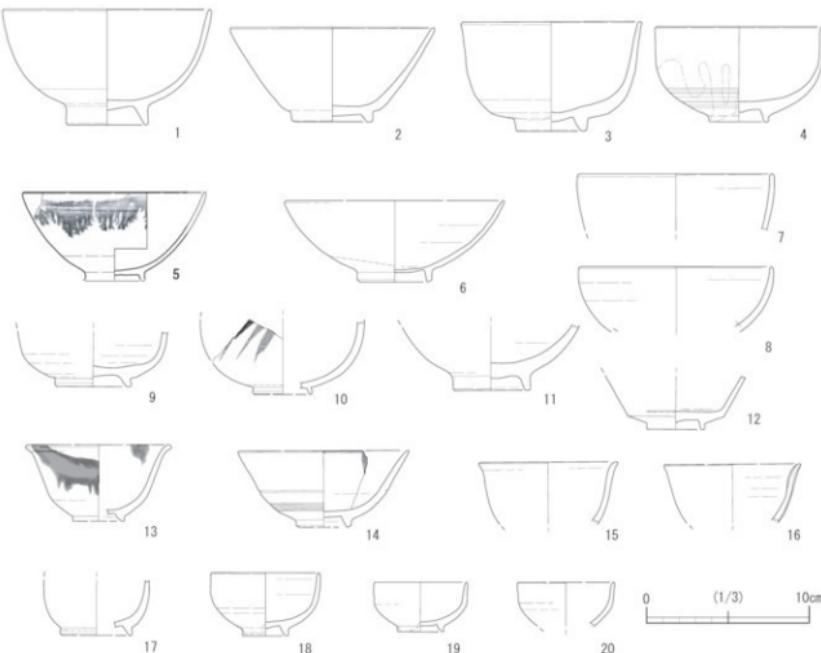
第31図 SD01 1層出土遺物・4



SD01 1層出土遺物観察表5

No.	種別	器種	生産地	年代	口徑・長 (cm)	直径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	陶器	皿	志野	16c末～17c	(10.6)	(6.0)	2.1	鼠志野か、貼り付け高台か	13-1	134
2	陶器	皿	肥前	不明	(11.2)	—	(2.4)	青釉	13-7	173
3	陶器	皿	唐津	17c後～18c	—	(4.8)	(1.8)	三鳥手	13-6	175
4	陶器	皿	京焼風肥前	17c末～18c	—	8.8	(3.5)	内面歓びによる桜蘭山文、貼り付け高台	132	136
5	陶器	皿	大堀相馬	18c後～19c	(13.2)	(4.0)	4.4	真栄松(山水文)、削り高台、内面目絵3ヶ所	14-1	132
6	陶器	皿	大堀相馬	不明	13.2	5.2	3.7	内外面灰釉、削り高台、内底面目絵3ヶ所、灰釉付け剥け	12-16	323
7	陶器	皿	瀬戸・美濃	16c末～19c初	—	—	1.6	真栄松(山水文)、焼成不良	13-4	129
8	陶器	皿	小野相馬	18c末	—	(5.6)	(2.1)	貼り付け高台、蛇の目彫刻が、焼成不良	13-3	131
9	陶器	皿	大堀相馬	18c	—	(7.0)	(1.1)	貼り付け高台	13-9	133
10	陶器	皿	大堀相馬	18c	(8.0)	—	(2.7)	—	13-8	126
11	陶器	皿	唐津	17c後～18c	—	—	(2.4)	三鳥手、白化粧土による象嵌	13-5	174
12	陶器	丸皿	京・懶業	不明	(10.6)	—	(4.4)	—	14-7	116
13	陶器	碗	唐津	17c?	13.0	—	(4.2)	内外面灰釉	13-20	349
14	陶器	丸皿	肥前	不明	—	4.6	(4.9)	削り高台、焼成不良	14-5	112
15	陶器	碗	肥前か	不明	—	(4.0)	(1.8)	真裏、不明文様、貼り付け高台	14-3	120

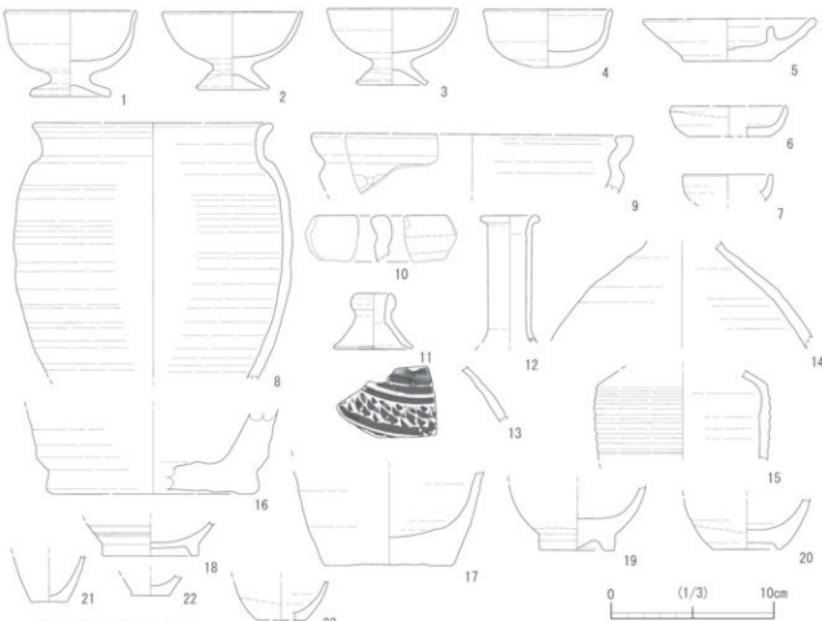
第32図 SD01 1層出土遺物・5



SD01 1層出土遺物観察表 6

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	陶器	碗	不明	不明	12.9	5.1	7.1	内外面灰釉付け 掛り高台	13-17	326
2	陶器	碗	瀬戸	18c後～19c初	12.6	5.0	5.8	内面黒釉流し掛け 内外面目付 線茶碗	13-15	313
3	陶器	碗	大坂相馬	不明	11.2	4.4	6.75	内外面灰釉 外面一部鉢脚 削り高台	13-19	329
4	陶器	碗	大坂相馬	18c後～19c前	10.4	3.6	5.85	内面・外面上部灰釉 外面下部鉢脚 削り高台 掛け分片7箇	13-16	314
5	陶器	碗	大坂相馬	18c後～19c	11.3	3.7	5.45	口縁部へ外面に鉢脚流し掛け 削り高台	13-18	328
6	陶器	平型碗	大坂相馬か	不明	(13.4)	4.1	5.0	削り高台 高台内に墨書き 内外面目跡20所	14-15	119
7	陶器	丸碗	肥前	不明	(12.0)	—	(0.5)	112在同一固体心 塗成不良	14-13	115
8	陶器	丸碗	大坂相馬	18c後～19c	(11.8)	—	(4.0)		14-4	117
9	陶器	丸碗	大坂相馬	不明	—	4.6	(3.4)	掛分け碗 削り高台	14-6	114
10	陶器	丸碗	京・但馬	不明	—	(3.4)	(4.6)	土勘の赤(色鉻)薄青・緑の着色 第二心 接け付け高台 塗成不良	14-9	121
11	陶器	丸碗	小野相馬か	19c?	—	4.6	(4.0)	削り高台 塗成不良	14-14	118
12	陶器	腰折碗	大坂相馬	18c後～19c前?	—	3.6	(3.3)	削り高台	14-16	113
13	陶器	碗	大坂相馬	19c	(9.0)	(3.2)	4.65	鉢脚流しL17 削り高台 壁反襯	15-35	151
14	陶器	小碗	大坂相馬	19c	(10.4)	(2.9)	4.7	削り高台 沈籠模様5条	14-17	153
15	陶器	小碗	大坂相馬	19c	(8.4)	—	(3.8)	内外面灰釉	14-19	148
16	陶器	小碗	大坂相馬	19c～20c	(8.4)	—	(3.6)	眞入模 肉青ひづれ	14-20	152
17	陶器	小碗	大坂相馬	19c	—	(4.4)	(3.4)	内外面灰釉 削り高台	14-28	150
18	陶器	小杯	大坂相馬	19c	6.8	2.8	3.9	内外面灰釉 削り高台	14-12	320
19	陶器	小碗	大坂相馬	19c	(5.8)	(2.8)	3.05	内外面灰釉 削り高台	14-18	147
20	陶器	小碗	大坂相馬	19c	(6.0)	—	(2.7)	内外面灰釉	14-21	149

第33図 SD01 1層出土遺物・6



SD01 1層出土遺物観察表 7

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	陶器	仏龕具	小野相馬	18c?	8.2	5.0	9.3	内外面灰釉	14-24	315
2	陶器	仏龕具	小野相馬	18c?	8.6	4.5	4.8	内外面灰釉 挾成不良	14-25	316
3	陶器	仏龕具	小野相馬	18c?	8.1	4.5	4.7	内外面灰釉	14-26	317
4	陶器	仏龕具	小野相馬	18c?	8.0	—	(3.55)	内外面灰釉	14-27	318
5	陶器	灯明皿	不明	(10.0)	5.4	2.6			14-29	108
6	陶器	灯明皿	罐小	不明	(7.0)	(5.0)	(1.85)	鉄輪 外底部回転糸切→ナゲ		138
7	陶器	灯明皿	罐小	不明	(5.4)	—	(1.6)	燒成不良	15-1	137
8	陶器	壺	不明	不明	(14.0)	—	(15.8)	鉄輪	15-12	187
9	陶器	甕	岸か	不明	(19.6)	—	(3.6)	甕部の凹は斜縦線	15-9	141
10	陶器	壺・便類	塙内か	18c~19c	—	—	(2.9)	灰釉 白蘿蔔	15-2	103
11	陶器	油壺	大堀相馬	19c	(2.4)	(4.8)	3.4	白蘿蔔	15-13	157
12	陶器	瓶	大堀相馬	19c	3.4	—	(7.8)	自然落灰内外面に付着	15-15	155
13	陶器	壺利	大堀相馬	19c	—	—	(3.4)	殘作技法による瓶文「松川」小~中型の壺利	15-38	159
14	陶器	甕	不明	19c	—	—	(6.6)	灰釉波しきび 細面系小	15-5	161
15	陶器	瓶	不明	18c後~19c	—	—	(5.5)	外底鉄輪	15-4	158
16	陶器	盆類	塙内か	不明	—	(6.5)	(5.2)	底部無調製(剥離?) 下部絞巻底有 製熟網紗か 目跡1ヶ所	15-7	143
17	陶器	壺・便類	塙内か	不明	—	7.9	(5.8)	正面回転糸切	15-6	142
18	陶器	壺利	大堀相馬	19c	—	(5.8)	(2.1)	菊口付高台 正面輪付着	15-3	156
19	陶器	甕	不明	不明	—	4.6	(4.0)	外底濃緑色釉 切り高台	15-14	178
20	陶器	甕	不明	不明	—	4.2	(3.1)	外底灰釉 相馬系	15-19	109
21	陶器	豆甕	不明	不明	—	(2.2)	(2.8)	外底面回転糸切 内外面ナゲ調整 外面一部灰釉付着	15-18	163
22	陶器	豆甕	大堀相馬	19c	—	2.4	1.3	底面回転糸切	15-24	164
23	陶器	豆甕	大堀相馬	19c	—	(3.0)	(2.4)	外底面回転糸切	15-23	162

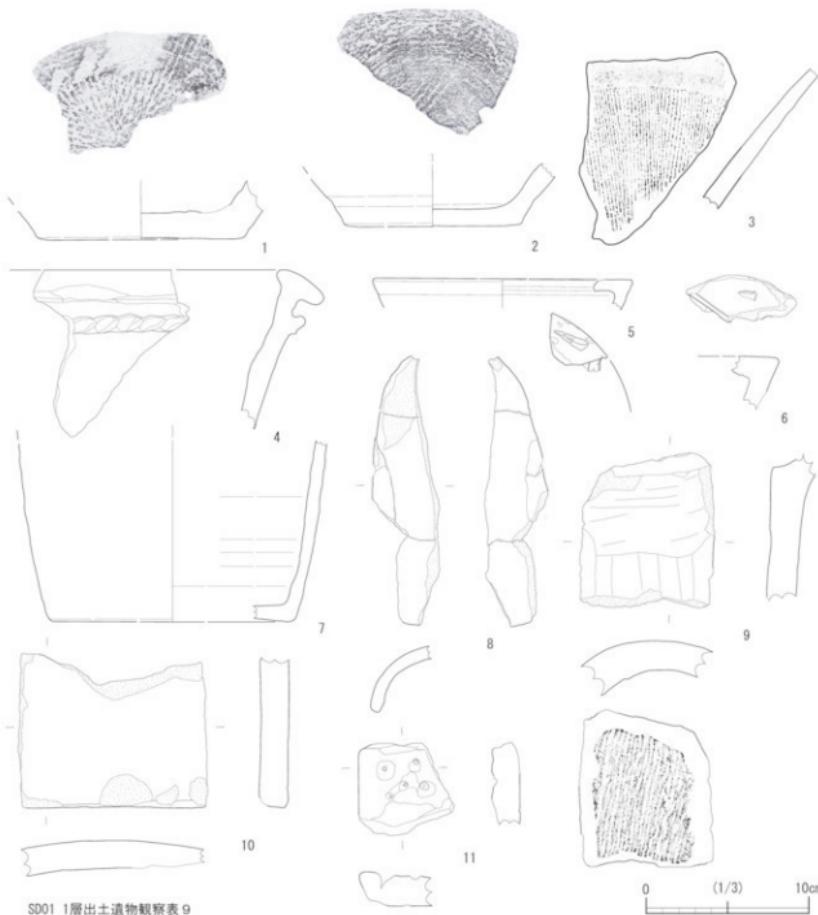
第34図 SD01 1層出土遺物・7



SD01 1層出土遺物観察表 8

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	標記 番号
1	陶器	土瓶	大垣相馬	19c	(8.2)	—	(3.2)	鉄筋山水文	15-17	401
2	陶器	土瓶	大垣相馬	19c	(7.0)	—	(2.5)	内面極少量の釉付着	15-10	167
3	陶器	土瓶	大垣相馬	19c	(8.1)	—	(1.2)	外面灰釉 外面鉄筋埋蔵	15-21	399
4	陶器	土瓶	大垣相馬	不明	—	—	(2.0)	鉄筋(山文)	15-33	186
5	陶器	土瓶	大垣相馬	18c~19c	—	—	(3.0)	鉄筋草文 下部に2条埋蔵	15-30	179
6	陶器	土瓶	大垣相馬	不明	—	—	(4.3)	鉄筋山水文	15-37	184
7	陶器	蓋	大垣相馬か	19c	(6.4)	(4.7)	(1.65)	外面灰釉 つまみ部分欠損 外面草間に黒煤付着	15-26	146
8	陶器	蓋	大垣相馬か	19c	(9.0)	(6.7)	(1.65)	貫入顯著 外面白濁釉	15-36	145
9	陶器	蓋	大垣相馬か	19c	5.6	3.8	(1.9)	貫入顯著 外面白濁釉 つまみ部分欠損	15-27	144
10	陶器	蓋	大垣相馬	18c末~19c	—	—	(1.35)	土瓶山蓋		185
11	陶器	擂鉢	在地小	19c~	(29.2)	—	(4.2)	外外面鉄釉 烧成不良	16-1	361
12	陶器	擂鉢	在地小	18c後	(26.4)	—	(4.2)	内外面鉄釉	16-5	363
13	陶器	擂鉢	在地小	18c後	(29.8)	—	(2.9)	内外面鉄釉	16-6	360
14	陶器	擂鉢	在地小	19c~	—	—	(10.5)	内外面鉄釉 烧成不良	16-2	362
15	陶器	擂鉢	在地小	19c~	(37.6)	—	(5.4)	内外面鉄釉		367
16	陶器	擂鉢	在地小	19c~	(37.8)	—	(5.2)	内外面鉄釉 烧成不良	16-7	370
17	陶器	擂鉢	在地小	19c~	(34.6)	—	(6.4)	内外面鉄釉 烧成不良	16-9	371

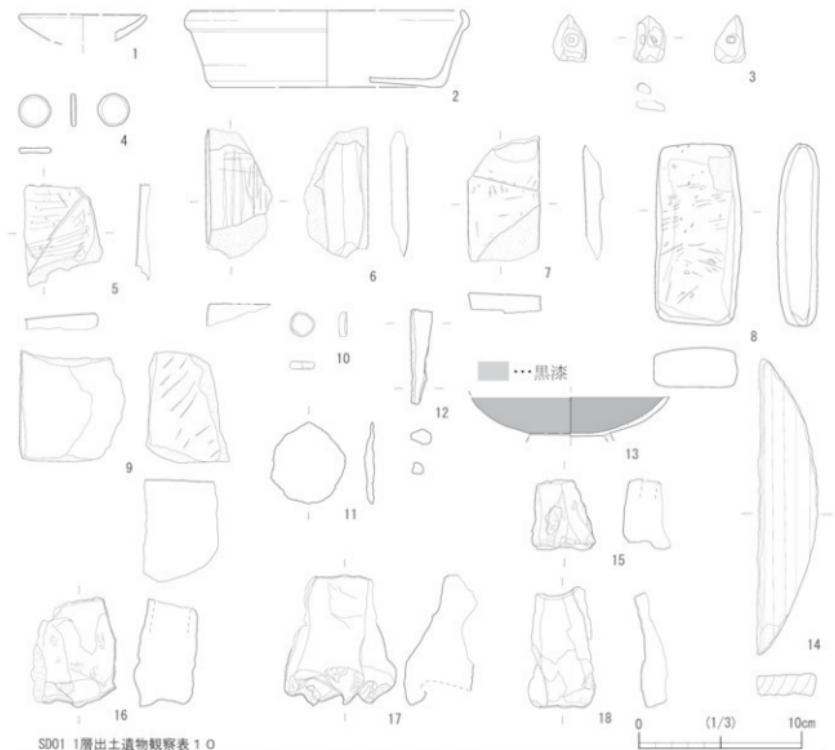
第35図 SD01 1層出土遺物・8



SD01 1層出土遺物観察表 9

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	陶器	擂鉢	在地か	19c	—	12.3	(3.6)	内外面鐵輪 回転系切刃	16-4	369
2	陶器	擂鉢	在地か	19c~	—	(11.0)	(3.6)	鉄輪	16-3	364
3	陶器	擂鉢	在地か	19c~	—	—	—	内外面鉄輪	16-12	368
4	瓦質土器	火鉢	在地	19e平	—	—	(9.9)	内外面黒褐色	17-3	85
5	瓦質土器	五徳	在地	不明	(32.0)	—	—	口縁内側使用による摩滅有 構成不良	17-5	301
6	瓦質土器	五徳	在地	不明	11.0	—	(3.3)	内外面黒褐色	17-8	337
7	瓦質土器	火入	在地	不明	—	15.2	(11.15)	内外面黒褐色 横ナゲ調査 表面薄く剝離	17-11	336
8	瓦質土器	不明	在地	不明	16.6	—	—	内外面黒褐色	17-9	339
9	瓦	丸瓦	在地	不明	—	—	—	内外面黒褐色 繁忙のナデ	17-13	331
10	瓦	平瓦	在地	不明	9.5	—	—	内外面黒褐色	17-14	332
11	瓦	不明	在地	不明	(6.7)	—	—	内面に凹窓所の刺突痕 軸用品	17-16	84

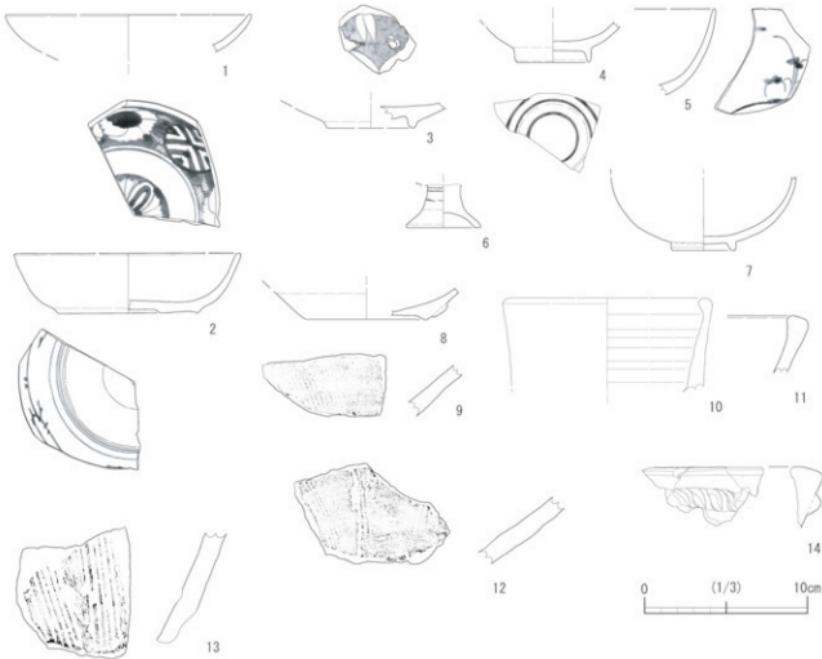
第36図 SD01 1層出土遺物・9



SD01 1層出土遺物観察表 10

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	土器	小口平付	在地	19c前	7.9	—	(1.6)	焼成不良	21-4	341
2	軟質陶輪陶器	燒造	在地か	19c半	(16.8)	(14.2)	4.7	外部底面寸寸着	21-2	160
3	土製品	不明	在地	不明	2.85	2.0	—	焼成不良	21-5	340
4	円盤状石製品	碁石か			1.9	1.9	0.3	凝灰岩	21-7	345
5	石製品	砾石			6.3	4.8	—	凝灰岩	21-9	342
6	石製品	砾			8.0	4.0	—	玄武岩	21-8	343
7	石製品	砾石			(7.0)	4.4	(1.0)	凝灰岩	21-13	341
8	石製品	砾石			11.15	5.3	—	安山岩 使用痕有 全面磨耗	21-14	335
9	石製品	砾石			6.8	6.45	—	花崗閃綠岩	21-10	346
10	金属製品	不明鋼製品			1.5	1.5	—	リング状	22-9	28
11	金属製品	不明			5.0	4.8	0.6		22-4	32a
12	金属製品	釘			(5.8)	0.6	—		22-3	32b
13	漆器	瓶			—	—	(2.5)	内外面黒漆	18-3	26
14	木製品	曲物			27.25	5.55	—	直板 板目取り 杉材か	19-6	14
15	骨製品	加工骨			—	—	—	切断面あり	22-12	399
16	骨製品	加工骨			—	—	—	切断面あり	22-15	401
17	骨製品	加工骨			—	—	—	切断面あり	22-14	400
18	骨製品	加工骨			—	—	—	切断面あり	22-13	398

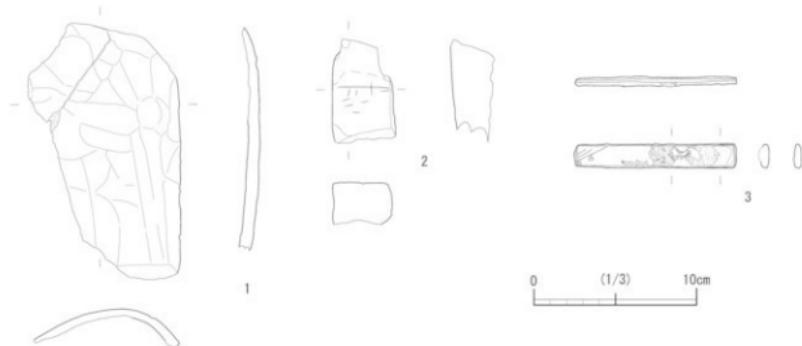
第37図 SD01 1層出土遺物・10



SD01 2層出土遺物観察表 1

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	青磁	皿	肥前	18c前	(15.2)	—	—		10-2	306
2	磁器	碗	不明	18c~19c	(14.0)	(8.6)	3.7	内底面二方割削直文 内面丸文 外面唐草文 高台2条彫縞 線の目高台	10-5	390
3	磁器	皿	肥前	17c後~18c	—	(5.5)	—	内底面竹文 目跡1ヶ所	10-3	306
4	磁器	碗	肥前	18c前	—	(4.6)	—	内外面透明釉 高台内1条文 高台外側上面に2条文 体部下に1条文	10-4	303
5	磁器	碗	肥前	18c前	—	—	—	外面草花文 外面下部に1条文	10-19	304
6	磁器	仏飯具	肥前	17c後	—	(4.6)	(2.6)	内外面透明釉 脚上部に2条文と1条文	10-6	307
7	陶器	碗	京焼風肥前	17c後~18c	—	3.9	(4.5)	縦1付け高台 同一固体有	13-21	107
8	陶器	土瓶	大坂相間	19c前	—	—	—	外面上部青釉 外面~底面模多量付着 内面ナガ彫整	15-16	92
9	陶器	擂鉢	在地か	18c	—	—	—			97
10	瓦質土器	火鉢	在地	19c半	(25.8)	—	(11.6)	内面クロコナガ彫整 外面ナガ彫整 口縁部外側~外周2/3位縦付着	17-6	86
11	瓦質土器	不明	在地	19c半	—	—	(3.5)	内外面横ナガ彫整	17-7	98
12	瓦質土器	擂鉢	在地	不明	(29.4)	—	(6.1)	5条以上1単位の櫛状工具 外面ナガ彫整	17-1	89
13	陶器	擂鉢	不明	不明	—	—	—	内外面鉄輪 外面横ナガ彫整 内面下部磨滅頗著	17-20	93
14	瓦質土器	火鉢	在地	17c末~18c初?	(3.6)	(7.5)	—	口縁部下に櫛状絞巻貼付有 織成不良	17-4	87

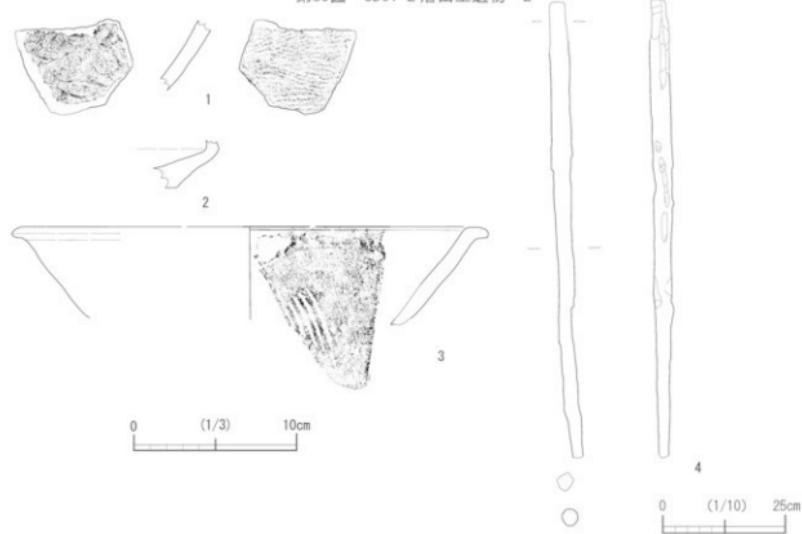
第38図 SD01 2層出土遺物・1



SD01 2層出土遺物観察表2

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	瓦質土器	不明	在地	不明	(15.8)	(9.4)	-	外面ナガ彫調整	17-10	88
2	石製品	硯石			(6.4)	(3.9)	(2.3)	上面に使用板有	21-11	302
3	金屬製品	刀子柄			10.0	1.5	0.6	一端に文様鋸刻	22-8	29

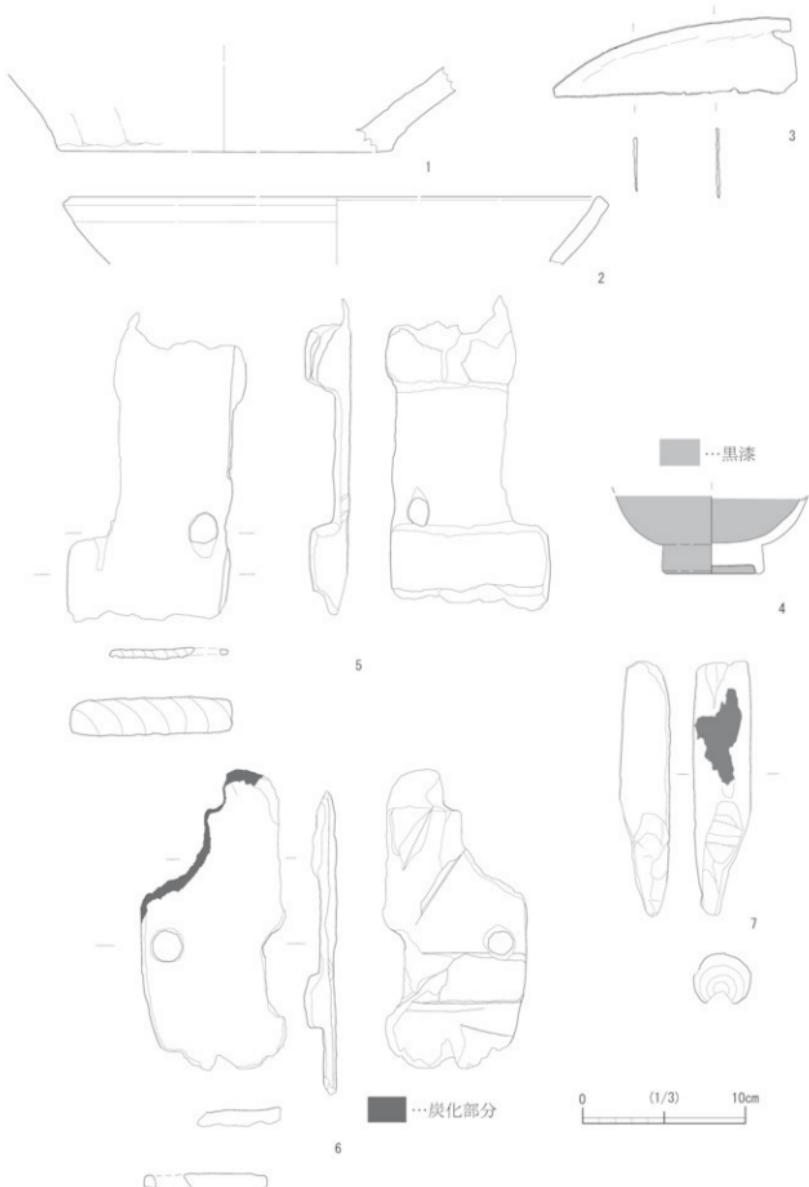
第39図 SD01 2層出土遺物・2



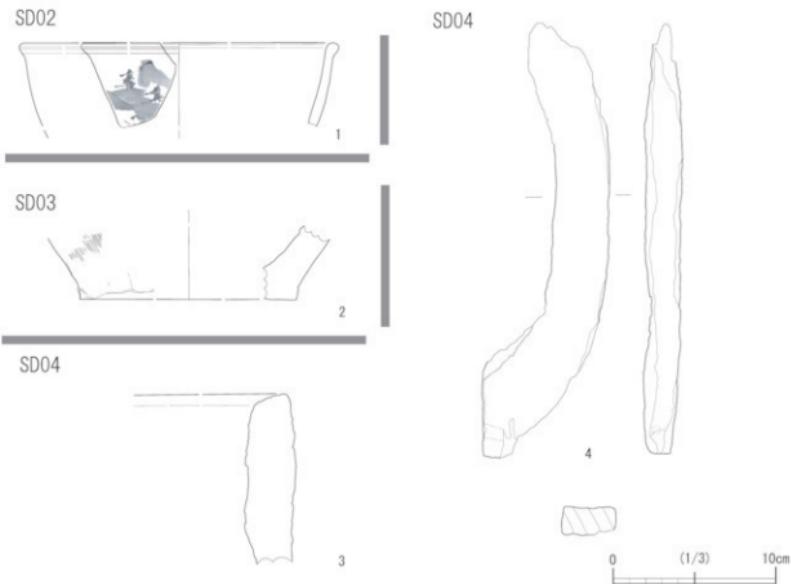
SD01 3層出土遺物観察表

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	瓦質器	甕	在地	不明	-	-	-	外面叩き目 内面有海波状凸具張	15-20	99
2	陶器	香炉か	不明	不明	-	-	-	内外面鉛錆 外面横ナガ彫整	16-11	94
3	瓦質土器	盤鉢	在地	不明	-	-	-	6粒単位の網状工具 外面ナガ彫整	17-2	90
4	木製品	机			93.0	4.5	-	先端部加工 破損一部残存 桜材か	19-13	5

第40図 SD01 3層出土遺物



第41図 SD01 4層出土遺物



SD01 4層出土遺物観察表

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	陶器	甕	在地	13c後～14c前	—	21.0	5.3	白石古窯跡群 底部付近で瓶底へナデ	17-17	201
2	陶器	鉢	在地	13c後～14c前	(31.8)	—	(4.1)	白石古窯跡群 内外面横ナデ調整 未成不良	17-19	91
3	金属製品	錠			15.0	4.7	—		22-5	31
4	漆器	椀	不明	16c半～後	—	(5.8)	(4.8)	内外面黒漆	18-4	27
5	木製品	下駄			(19.0)	10.0	2.9	連漸下駄 板目取り	18-6	20
6	木製品	下駄			18.5	8.95	1.9	連漸下駄 部分的に炭化 板目取り	18-5	19
7	木製品	机			(15.7)	3.6	—	先端部加工 部分的に炭化	19-10	17

SD02出土遺物観察表

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	陶器	鉢	不明	不明	(19.7)	—	(5.15)	京焼風陶器 内外面灰釉 山水文	12-6	307

SD03出土遺物観察表

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
2	陶器	甕	在地	13c後～14c前	—	13.4	4.5	白石古窯跡群 底部付近で瓶底へナデ	17-18	202

SD04出土遺物観察表

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
3	石製品	石鉗			—	—	—	安山岩	21-6	304
4	木製品	把手			—	—	—	板目取り	19-4	16

第42図 SD02・03・04出土遺物

5. 土坑

SK01 土坑（第 11 図）

調査区中央部西側に位置する。平面形状は円形を呈する。規模は長軸 1.62m、短軸 1.45m を測る。確認面からの深さは約 52cm であり、断面形状は円筒状を呈する。堆積土は概ね 2 層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK02 土坑（第 43・44 図）

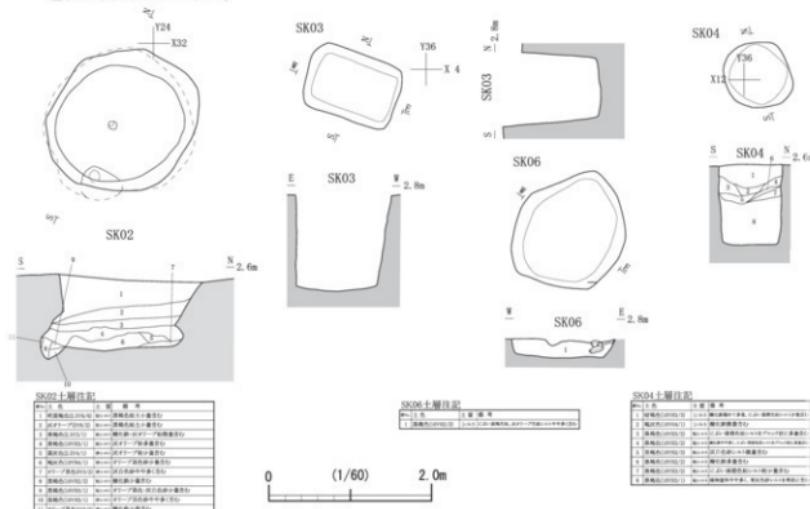
調査区中央部西側に位置する。平面形状は円形であり、規模は長軸 1.96m、短軸 1.78m を測る。確認面からの深さは約 103cm であるが、壁面中位下部よりオーバーハングして底面へと至る袋状を呈する。堆積土は 11 層に細分でき、全て人為的埋土である。なお、覆土 1 層と 2 層の境目には長さ 60 cm、幅 10~15 cm ほどの板材が 3 枚投棄されていた。

遺物は 44 図 1 の染付徳利片、2 の描鉢片がそれぞれ覆土中から出土している。

SK03 土坑（第 43 図）

調査区南部東側に位置する。平面形状は長方形を呈する。規模は長軸 1.17m、短軸 0.84m を測る。確認面からの深さは約 115cm であり、断面形状は箱状を呈する。堆積土は概ね 3 層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

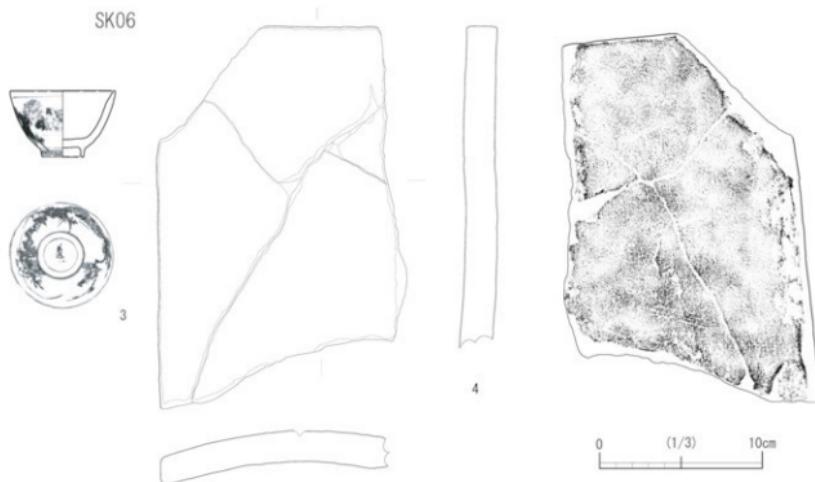


第43図 土坑

SK02



SK06



SK02出土遺物観察表

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	磁器	盤口	肥前	19c	—	(6.6)	(2.7)	外底下部に2条黒線と撫継 内底面に2条黒線 不明文様	10-12	49
2	陶器	盤鉢	在地	不明	—	(10.0)	(8.4)	内外墨鉛錆 回転系切	16-10	71

SK06出土遺物観察表

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
3	磁器	小杯	肥前	不明	6.5	2.5	6.1	外面に竹・花文 絹付コバルト錆 高台内罈有「道」	10-21	39
4	瓦	平瓦			(13.35)	(24.6)	—	内面布目張 外面に様付 磁成不良	17-12	36

第44図 SK02・06 出土遺物

SK04 土坑（第 43 図）

調査区東部中央に位置する。平面形状は円形を呈する。規模は長軸 0.88m、短軸 0.80m を測る。確認面からの深さは約 97cm であり、断面形状は円筒状を呈する。堆積土は 8 層に分層でき、1 ~ 7 層は人為的埋土、8 層は有機質の植物遺体を多く含む自然堆積である。

遺物は出土していない。

SK05 土坑（第 11 図）

調査区南部中央に位置する。平面形状は方形を呈する。規模は長軸 1.76m、短軸 1.43m を測る。確認面からの深さは約 46cm であり、断面形状は壺状を呈する。堆積土は概ね 2 層であり、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK06 土坑（第 43・44 図）

調査区中央部東側に位置する。平面形状は北辺がやや突出する五角形を呈する。規模は長軸 1.50m、短軸 1.35m を測る。確認面からの深さは約 23cm であり、断面形状は皿状を呈する。堆積土は 1 層であり、人為的埋土である。

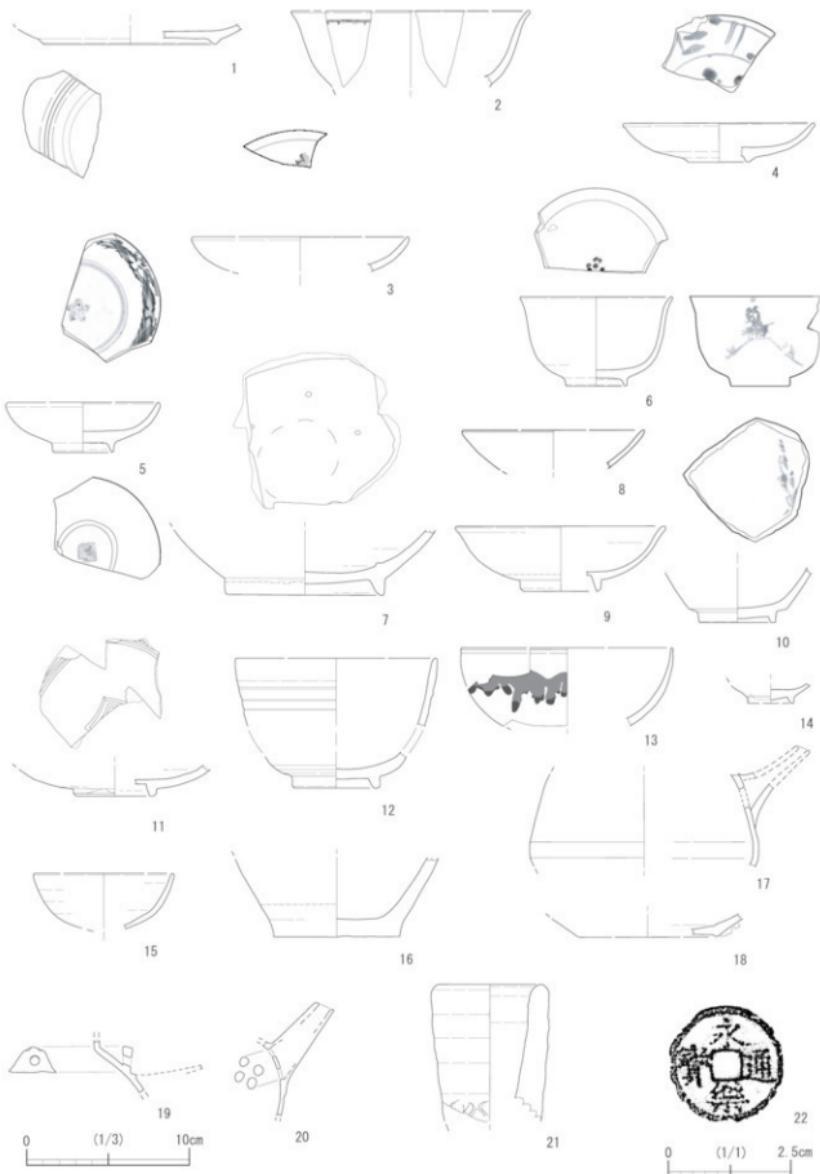
遺物は東側上位に存在する人頭大の縄の周辺から、44 図 3 の染付小壺、4 の平瓦が出土している。

6. 遺構外出土遺物(第 45 図)

第 45 図は表土掘削時、及び遺構精査時の出土遺物であり、近世磁器、近世陶器、焼塩壺、古錢などが出土しているが、全体量は概して少ない。これらの出土層位については概ね基本土層IV・V 層を中心に出土しているが、出土位置が集中する傾向は無く、散発的に確認されている。

遺構外出土遺物観察表

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	陶器	土瓶	大堀町窯	19c	(8.2)	-	(3.2)	鉢底山水文	15-17	401
2	陶器	土瓶	大堀町窯	19c	(7.0)	-	(2.0)	内面焼付墨の袖付壺	15-18	167
3	陶器	土瓶	大堀町窯	19c	(8.3)	-	(1.0)	外面部灰釉 内面部輪郭墨	15-21	366
4	陶器	土瓶	大堀町窯	不明	-	-	(2.0)	鉢底山水文	15-23	196
5	陶器	土瓶	大堀町窯	18c~19c	-	-	(3.0)	鉢底墨文 下部に3条開窓	15-30	179
6	陶器	土瓶	大堀町窯	不明	-	-	(4.0)	鉢底山水文	15-27	181
7	陶器	壺	大堀町窯か	19c	8.0	(4.7)	(0.0)	外面部灰釉 つまみ部分欠損 外面部に黒漆付帯	15-28	146
8	陶器	壺	大堀町窯か	19c	9.0	(6.7)	(1.0)	青入墨書き 外面部白輪釉	15-36	145
9	陶器	壺	大堀町窯か	19c	5.6	3.8	(1.0)	青入墨書き 外面部白輪釉 つまみ部分欠損	15-27	144
10	陶器	壺	大堀町窯	18c~19c	-	-	(1.0)	玉瓶山墨		195
11	陶器	壺	在地か	19c~	(29.2)	-	(4.0)	内外面部灰釉 壁成不良	16-1	301
12	陶器	壺	在地か	19c後	(28.4)	-	(4.0)	内外面部灰釉	16-5	303
13	陶器	壺	在地か	19c後	(29.8)	-	(2.0)	内外面部灰釉	16-6	300
14	陶器	壺	在地か	19c~	-	-	(10.0)	内外面部灰釉 壁成不良	16-2	302
15	陶器	壺	在地か	19c~	(32.6)	-	(0.0)	内外面部灰釉 壁成不良		304
16	陶器	壺	在地か	19c~	(37.8)	-	(5.0)	内外面部灰釉 壁成不良	16-7	320
17	陶器	壺	在地か	19c~	(34.6)	-	(6.0)	内外面部灰釉 壁成不良	16-9	321



第45図 遺構外出土遺物

第VI章 考察

本調査では、掘立柱建物跡 1 棟、柱列跡 2 列、井戸跡 12 基、溝跡 6 条、土坑などの遺構を検出した。その一方で各遺構から出土した遺物は SD01 溝跡を除くと少量に留まっている。以下では出土遺物と遺構について検討し、概要についてまとめることとする。

1. 遺物について

今回の調査では、整理箱 12 箱ほどの遺物が出土している。出土遺物の内訳は、国内産陶磁器、瓦質土器、瓦、土師質土器、土製品、石製品、金属製品、中世陶器、須恵器、木製品、自然遺物であるが、およそ近世遺物が圧倒的多数を占めている。

〈近世以前の遺物〉

古代遺物としては 40 図 1 の須恵器甕が出土している。須恵器甕片は内面には同心円状の当具痕、外面には叩き目を有する。調査地点の南西部にはかつて低位丘陵が存在し、丸山横穴墓群が展開していたことから、本調査においても古墳時代後期頃の集落跡の発見を期待していたが、今回の調査地点では確認できていない。

中世遺物は 41 図 1、42 図 2 の瓷器系陶器甕、15 図 1 の瀬戸・美濃產皿、40 図 3 の瓦質土器擂鉢、41 図 4 の漆器椀が出土している。このうち瓷器系陶器は、胎土・整形などの観察からいずれも白石市に展開する古窯跡群の製品の可能性が強く、在地の中世瓷器系陶器の生産時期を考慮すると 13 世紀半ば～14 世紀前半頃の年代観が考えられる(飯村均 1995、高橋博志 2002)。また瓦質土器は擂鉢であり、口縁部の形状から 16 世紀代の年代観が考えられる(高桑弘美 2003)。漆器は高台内部を浅く彫り窪めるという形状特徴から 16 世紀後半頃の年代観が考えられる。

〈近世遺物〉

近世遺物は大別すると磁器、陶器、瓦質土器、瓦、土器、金属製品、石製品、木製品、自然遺物が出土している。

【磁器】

磁器は大半が染付であり、生産地は肥前と瀬戸・美濃、平清水もしくは切込、そして産地不明で構成される。このうち主体を占めるのが肥前系磁器である。器種構成を見ると碗が最も多く、次いで皿が多い。染付以外としては白磁、青磁がみられるが、このうち白磁型押小皿(29 図 7)は内面に、同小杯(30 図 16)外面には変形卍文が施されている。

【陶器】

陶器の生産地は大堀相馬、小野相馬、瀬戸・美濃、肥前、岸窯、信楽の他に、堤や塩内などをはじめとする在地産、産地不明陶器がある。このうち大堀相馬焼が最も多く、次いで唐津焼をはじめとする肥前系陶器が多い傾向を示す。出土器種は碗・皿が主体を占めるが、他に土瓶、擂鉢、鉢、壺・甕、灰吹、徳利、油壺のほか、34 図 1～4 の仏飯具も含まれる。また軟質施釉陶器として 37 図 2 の焰塔がある。

【土器】

土器は土師質土器、いわゆる「かわらけ」と焼塙壺がある。かわらけは輪轉成形であり、手捏ね成形のものは皆無である。法量から判断すると中型のみと思われる。45 図 21 の焼塙壺は市内では初の出土事例となるが、淡い赤褐色を呈する色調と下半部には格子状の叩き目を有することから在地産と考えられる(藤沢敦 1994)。

【瓦質土器】

瓦質土器は火鉢、香炉、焜爐の 3 者がみられる。このうち火鉢の中には口縁部下に縄状の装飾を施したもののが見られるが、口縁部の形態から内側に若干張り出すもの(38 図 14)と T 字条を呈するもの(36 図 4)の 2 者がある。

【瓦】

瓦は平瓦と丸瓦、そして 1 点のみであるが用途不明の転用品が出土している。瓦の出土量は少量に留まっており、この地に存在した建物等で瓦が葺かれていたとは考えにくい。転用品(36 図 11)は破損した平瓦片の内面に 5 倍所ほどの小孔が穿たれているが、いずれも貫通はしていない。

【石製品】

石製品は砥石のほか、硯と石鉢、円形石製品が出土している。砥石の種類は安山岩製であることから中砥としての使用が考えられる 1 点(37 図 9)を除くと全て仕上砥であり、石材は概ね凝灰岩と粘板岩の 2 者を選択している。明確な使用面数を判断できる例が少ないが、37 図 8 では 4 面で使用痕が見られる。円形石製品(37 図 4)は、縁部が丁寧に整形されており碁石の可能性も考慮できる。42 図 3 の石鉢は安山岩製であるが、確認した限りでは表面が摩滅しているなどの使用痕跡は認められていない。

【金属製品】

金属製品は銅製品として古銭・不明銅製品、鉄製品として釘・刀子・鎌、真鍮製品として煙管が出土している。古銭は全て永楽通寶である。不明銅製品のうち、15 図 3 はほぼ円形状を呈する薄いもので、中央部から折れ曲がっている。また 3 箇所では孔が穿たれており、何らかの蓋であった可能性がある。37 図 10 はリング状を呈する。刀子の柄(39 図 3)では陽刻と陰刻によって文様が施されるが、鋲着のため詳細は不明である。煙管(15 図 4)は火皿のみが出土している。

【木製品】

木製品は漆器椀、筒状製品、下駄、桶、櫛、把手状製品、曲物、杭のほか不明円形状製品が出土している。このうち漆器椀では内外面黒漆のもの(37 図 13)と内面と文様が朱漆、外面黒漆のもの(18 図 1)がある。桶(19 図 2)は立木 8 枚と角状に突出する立木 2 枚で構成され、外面上下にタガ痕を残す。用途不明の円形状製品(20 図 10)は、縁部を丁寧に整形している。

【自然遺物】

自然遺物としては骨、種子が出土している。骨については切断痕を有するものが SD01 上層よりまとまって出土しているが、これらは関節部分の特徴から牛馬の中手骨、中足骨であると考えられる。種子は SD01・02・04・05 溝跡下層や井戸跡覆土中から散発的に出土し、種類としてはウメとクルミが確認できた。

2. 出土遺物から見る特色

これまで市内で行われてきた調査成果と今回の調査で出土した遺物を比べた場合、ひとつにはかわらけの出土量が非常に少ないことが挙げられる。平成 19 年に調査を実施した竹駒神社境内遺跡は神事を執り行う場という特殊な性格上、かわらけの出土量は面積比で見た場合突出する傾向にあるが、同時期の遺跡である下野郷館跡と比べても少ない。しかしながら下野郷館跡出土のかわらけには煤が付着しているものが数多くあり、灯明皿としてのかわらけの利用を考えられる。一方で本地点では出土量は少ないながらも灯火具の存在（34 図 5・6・7）が確認できることから、近世におけるかわらけの出土量の多寡については使用した灯火具の違いが反映された可能性も考慮する必要性があるかもしれない。

出土遺物を概観した中でもうひとつの特色として挙げられるのは、仏飯具がまとめて出土したことである。仏飯具は県内に展開する近世遺構からも一定量出土しているが、今回の調査では陶器製 4 点、磁器製 1 点（脚部のみ）が SD01 溝跡上層から出土している。出土した陶器製の製品の法量は非常に近似することから、ほぼ同時期の生産・使用が考えられ、該期の当地域で一屋敷内における神棚もしくは仏壇に仏飯具を供する個数を考える上での指標になりうるものと思われる。

さらに同遺構では切断痕を有する加工骨が大量に出土していることも特筆される。残念ながら遺存状況が劣悪であり、完全に近い形で取り上げられたものは少ないと、調査時には検出した全てが牛馬の関節部位のみであり、骨幹部分は含んでいないことを確認している。このような出土状況から牛馬の骨幹部分を加工して製品を作る人物がこの付近にある時期存在し、製品に適さない関節部分をまとめて遺棄した姿を推量できる。骨を原料とした製品の製作については中世においては鎌倉を中心に事例が散見できるものの、管見に触れた限りでは仙台領内の近世遺構からこのような骨製品作製に関わる資料は見当たらず、今後の類例の増加に期待したいが、調査地周辺が「侍屋敷」という性格であることを踏まえれば、これらを遺棄した人物像としては屋敷内の家人というよりはむしろ、屋敷内にある一定時間滞在して注文に応じた製品を製作する職能人の姿が想像できよう。

ところで今回の調査では、SD01 溝跡西側上層から近世陶磁器が非常なまとまりを持って出土した。これらの遺物の中心となる年代観は 17 世紀代～19 世紀後半の間に収まるが、この年代観は当地域を田村氏の後に古内氏が拝領してから明治維新を迎えるまでの時期に概ね相当する。最も新しい年代観である 19 世紀後半に起きた大きな事象としては戊辰戦争があるが、この戦争の際には岩沼要害は官軍により接收されており、市中でも多大な混乱が生じたと思われるが、古内氏に仕える家臣団の屋敷地である本調査地点での一括廃棄とも受け取れる遺物出土のあり方は、明治維新後の動揺を物語る資料になるものと思われる（註 1）。

3. 溝跡について

SD01 溝跡では平面では明確に確認できなかったものの、西側壁面の観察から上層部分では複数期の掘り直しが行われていることが判明した。これらはいずれも底面幅がやや広い浅めの溝と考えられ、近世陶磁器や加工骨を含むなどいずれも人為的に埋め戻されているが、同位置の下層部分では底面幅が狭く覆土が自然堆積で構成され、近世以前の遺物を包含する溝跡の存在が明らかとなつ

た。

SD04 溝跡の上層部分では地山ブロックなどを多量に含む人為的埋め戻しが行われているが、下層部分では木の葉など植物遺体、種別不明の骨を含む自然遺物を包含する自然堆積で構成されている。溝の形状は、新段階では上幅がやや広い皿状を呈するものであり、旧段階は底面の狭い薺研状であり、北から南側にかけて傾斜している。

SD05 溝跡も上層部分では地山ブロックなどを多量に含む人為的埋め戻しが行われているが、下層部分では木の葉など植物遺体、種別不明の骨を含む自然遺物を包含する自然堆積で構成されている。溝の形状は上幅と底面幅の差が少ない箱状を呈し、底面までの深さも北側と南側では深く、中央南側付近では浅くなるなど一定の傾斜はみられない。

この南北方向の溝である SD04、SD05 溝跡および部分的な検出のため全容は不明ながらも調査区北西部隅で検出した SD02 溝跡は、それぞれ主軸方位が SD04 溝跡で N·40°·E、SD05 溝跡で N·43°·E、SD02 溝跡で N·39°·E となるなど、N·40°·E 周辺に基軸が設定される。一方東西方向の溝である SD01 溝跡の主軸方位は N·51°·W であり、直接的な接続は調査地内では確認できないもののこれらの溝跡は直交関係にあると言え、区画性が高い。この区画成立の時期については SD02、SD04、SD05 溝跡からは年代推定の根拠となる遺物が未出土であることから、資料数は少ないながらも SD01 溝跡下層出土遺物の最新年代を参考とすると、16世紀後半頃の時期と推定される。近世以前の岩沼市中の様相についてはこれまで明確な文献資料はみとめられていないが、伊達氏より岩沼館を拝領した泉田氏が天正年間に初期の町割を行ったとの伝承もあり、この年代観と矛盾しない本地点の成果はこれを裏付ける資料のひとつになり得るものと思われる。なお、第Ⅰ章3でも触れているとおり、近世に描かれた要害絵図と現在の町並みでは特に通路・水路では共通する箇所が多く見られるが、調査地点の西側では SD01 溝跡に対応する地割が現在も残っていることを鑑みれば、今後調査事例の追加によって初期の町割りから現代にいたるまでのさらに詳細な様子が明らかになる可能性もある。

これに対し調査区北部で検出した SD03、SD06 溝跡は主軸方位、形状、規模が上記の溝とは大きく異なり、また SD03 溝跡からは 1 点のみではあるが中世瓷器系陶器片が出土していることから岩沼市中の町割り以前の自然流路もしくは区画溝と考えられる。

4. 井戸跡について

本調査地点で検出した井戸跡は 12 基で、その内訳は素掘りが 10 基、石組みが 1 基、桶埋設が 1 基となる。このうち石組み、桶埋設の井戸跡は市内では初の検出事例となった。

石組み井戸である SE02 井戸跡は、掘り方形状はやや南北に長い楕円形である。最下面に長さ約 70cm、幅約 40cm の板材を四角形に組み合わせて水溜施設を設置した後に、礫石を積み上げる構造である。安山岩を主体とした礫石は 11~12 段ほど積み上げるが、いずれも長軸方向を中心部から放射状に配置しており、また内部への転落防止のため井戸内側が高く、裏込側が低くなっていた。

桶埋設井戸跡である SE04 井戸跡は、ほぼ円形の掘り方を呈する。その南西隅に高さ 1.8m ほどで底板が無い桶を埋設して井戸枠としている。桶の立木は 17 枚で構成され、上・中・下の 3 節所

を竹製のタガで締める。また立木はそれぞれ竹釘によって連結されていた。

素掘りの井戸跡は SE01、SE03、SE05、SE06、SE07、SE08、SE09、SE10、SE11、SE12 であるが、漏斗状の断面形態を呈する SE03、SE06 井戸跡と筒状を呈する SE01、SE05、SE07、SE08、SE09、SE10、SE11、SE12 井戸跡の 2 者に大別できる。

今回検出した井戸跡の分布を概観した場合、もっとも大きな特徴としては調査区の全域に展開していたのではなく、南東部に集中する傾向にあることが挙げられよう。これは東西溝である SD01 と、SD04 もしくは SD05 の南北溝によって区画されたひとつの屋敷地の中でも、特に水場として機能していた場所が江戸時代を通じて大きく変化していないことを意味する。本調査では屋敷地内における建物配置等については残念ながら把握できなかつたが、ひとつの空間内で水場施設がほぼ固定化されていたことを確認できたことは、今後市内に展開する近世侍屋敷跡を調査する上で空間利用のあり方を探る際の重要な手がかりとなり得る。

5. 各遺構の年代について

今回の調査では SD01 溝跡から大量の遺物が出土している一方、そのほかの遺構から年代推定の足掛かりとなり得る遺物の出土量は少ない。また各遺構も直接的な重複関係がほとんど認められないことから個別遺構ごとに年代推定を行うことは困難であるが、以下に若干の考察を試みる。

まず井戸跡から見ていくと、SE01 井戸跡からは 16 世紀末頃の年代観が与えられている 15 図 1 の瀬戸・美濃産皿が出土しているほか、17 世紀末～18 世紀初頭の年代観が与えられてい 15 図 2 のかわらけが出土しており、機能時期は 17 世紀末～18 世紀初頭と推量される。SE02 井戸跡の最新年代の遺物は 17 図 2 の擂鉢であることから、機能時期は 19 世紀代と推量される。SE04 井戸跡では年代観が推定できる最新年代の遺物は 20 図 3・4 の大堀相馬産の製品であり、機能時期は 19 世紀代と推量される。SE08 井戸跡では年代推定が可能な遺物は 26 図 4 の染付皿のみであることから、機能時期は 17 世紀後半以降と推量される。SE10 は年代推定が可能な遺物は 26 図 6 の施釉陶器擂鉢のみであるが、櫛目の様相から広く 17～18 世紀代の機能時期を考えたい。

次に溝跡を見ていくと、前述のとおり SD01 溝跡では上層（1・2 層）と下層（3・4 層）では覆土の堆積状況や遺物の年代観から大きな差が認められる。このためそれぞれの機能時期を別箇に見ていくと、下層では須恵器や鎌倉時代後期頃の瓷器系陶器片が出土しているが、最新資料となるのは 16 世紀後半代の年代観が与えられる 40 図 3 の瓦質土器擂鉢である。一方で上層では 17 世紀代の肥前産染付碗・皿類を含むものの、最新資料としては 19 世紀の年代観を有する瀬戸・美濃産磁器、平清水や切込窓の可能性もある在地産磁器、大堀相馬焼なども出土していることから 19 世紀後半頃までの機能時期を考えたい。SD02 溝跡は年代推定が難しいが上層から 17 世紀以降と考えられる肥前系陶器片が出土していることから、下層の機能時期については概ね 16 世紀以降であると思われる。SD03 溝跡では鎌倉時代後期頃の白石古窯跡群の製品と考えられる瓷器系陶器片が出土している。この構は走方向も近世遺物を含む溝跡とは大きく軸線を異にし、規模や形状の面からも相違点が多いことから中世遺構と考えられる。遺物は未出土ではあるが同様の走方向を呈している SD06 溝跡も近世以前の遺構である可能性は高い。SD04・SD05 溝跡については、年代推定の根拠

となる遺物が出土していないが、前述のとおり SD01 溝跡下層の形状と共にし、またほぼ直交関係にあることから、現時点での機能時期については概ね 16 世紀以降であると思われる。しかしながら、両者の詳細な年代推定及び新旧関係の把握については今後の課題である。

第V章 まとめ

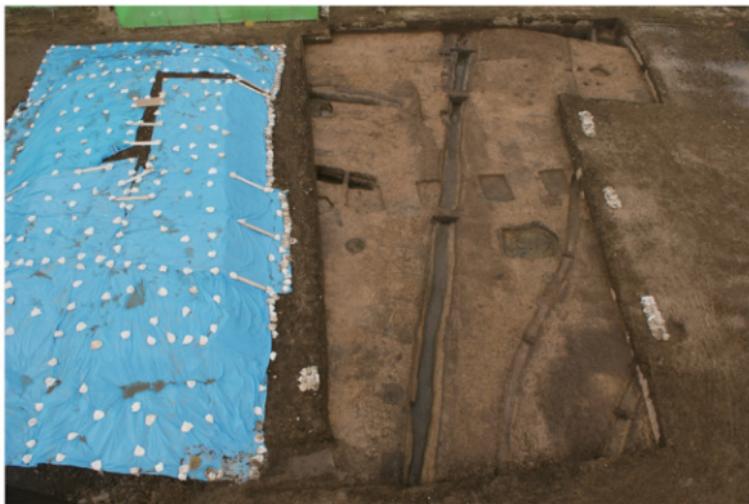
- ・丸山遺跡は平成 17 年に登録された中世～近世の遺跡で、自然堤防上・浜堤上に立地している。
- ・調査地点は江戸期に岩沼要害を中心に描いた古絵図では「侍屋敷」「下中屋敷」と表記される場所に相当し、調査では掘立柱建物跡 1 棟、柱列跡 2 列、井戸跡 12 基、溝跡 6 条などを検出した。
- ・掘立柱建物跡は桁行 3 間・梁行 1 間の東西棟で、東側では半間の庇が取り付く。
- ・柱列跡は区画溝と考えられる溝跡とほぼ直交関係にあることから、屋敷地内を細分するための堀もしくは柵跡と考えられる。
- ・井戸跡は 10 基が素掘りであるが、ほかに石組が 1 基、井戸枠に桶を使用しているものが 1 基確認されている。これらは市内では初の確認事例となった。
- ・溝跡のうち、SD03、SD06 溝跡は江戸時代の遺物を含む遺構の軸線とは大きく異なり、また SD03 溝跡からは白石市に所在する中世瓷器系陶器窯跡群の製品が出土していることから中世段階の遺構と考えられる。
- ・SD01、SD02、SD04 溝跡は複数期の作り替えが行われていたことが明らかとなった。また SD01 溝跡と同様の軸線が現在の市街地でも見られること、及びそれぞれの溝跡は直接連結していないが直交関係にあることから、区画を意図して作られたと考えられる。
- ・SD01 溝跡の下層から出土した遺物の年代観が最新でも 16 世紀代であることから、泉田氏が伊達氏より岩沼館を押領した際に行ったとされる町割に関連するものと考えられ、同様の覆土・形状を呈する SD02、SD04 溝跡についても該期の遺構である可能性が考慮される。
- ・SD01 溝跡の上層からは大量の近世陶磁器などが出土している。これらは概ね 19 世紀後半を最新年代とすることから、戊辰戦争後の社会情勢が大きく変わるものと想われる。
- ・また SD01 溝跡上層からはほかに牛馬の中手骨、中足骨が大量に出土しているが、いずれも関節部分のみであることから、骨製品を製作時に使用不可能な部位を投棄したと考えられる。
- ・調査地点では南東部で井戸跡が集中して検出できたが、これは押領者が変わっても屋敷内では水を扱う場が大きく変更していなかったことを意味するものと考えられ、今後侍屋敷の空間利用を考える上で大きな手掛かりになるものと期待される。

註1 同様の年代観を持つ陶磁器類の一括発表事例は岩沼市鶴ヶ崎城跡（吉井宏ほか 2002～2009）、仙台市養種園・保春院前遺跡 SK322（渡部弘美 2009）、および仙台城二の丸跡周辺でも確認されており、近年事例が増加している。

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2007 「愛知県史 別編中世・近世 漢戸系 家業2」 愛知県
- 阿部昭平 2003 「伝承長谷古館と墓守り」『岩沼市文化財だより』第2号 岩沼市教育委員会
- 熊村均 1995 『[J]東北諸窯』『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 真陽社
- 井波隆夫 1992 「器形分類表と分類基準」『東京都新宿区内藤町遺跡 第II分冊 (遺物編)』 新宿区内藤町遺跡調査会
- 石黒伸一郎 2009 「岩沼市岩藏寺の板碑を伴う集石遺構」『宮城考古学』第11号 宮城県考古学会
- 伊藤正義ほか 1990 「東北の陶磁史」 福島県立博物館
- 井上喜久男 2002 「近世の瀬戸・美濃」『東洋陶磁史—その研究の現在—』 東洋陶磁学会
- 岩沼市 1984 「岩沼市史」 岩沼市史編纂委員会
- 岩沼市 1992 「岩沼市土地分類調査 (細部調査) 報告書・現況調査編」
- 大友透・鶴崎哲也 1998 「泉道跡」 名取市文化財調査報告書第39集
- 大友透・鶴崎哲也 2000 「原道跡」 名取市文化財調査報告書第43集
- 小川望 2001 『[M] 江戸の遺物 3. 土器 脊原1耀堀』『江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会
- 小野力ほか 1968 「装飾土器を出土した宮城県岩沼町所在の長谷寺横穴古墳調査報告」『日本考古学協会第3・4回総会研究発表要旨』 笠原信男 1995 『宮城県の桶廻』 東北歴史資料館資料集38
- 範治一郎・佐藤公一ほか 1962 「宮城県岩沼町丸山横穴古墳群」『東北考古学』第3号
- 川又隆央 2004a 「鶴ヶ崎城跡・第2地点」 岩沼市文化財調査報告書第3集
- 川又隆央 2004b 「鶴ヶ崎城跡・第3地点」 岩沼市文化財調査報告書第4集
- 川又隆央 2005c 「長徳寺前遺跡」 岩沼市文化財調査報告書第5集
- 川又隆央 2005b 「鶴ヶ崎城跡・第4地点」 岩沼市文化財調査報告書第6集
- 川又隆央 2005c 「塗場研究の方法」『遺跡研究の方法』 東北中世考古学会第12回研究大会資料
- 川又隆央 2005d 「宮城県の礎石経緯」『宮城考古学』第7号 宮城県考古学会
- 川又隆央 2007 「朝日古墳群」 岩沼市文化財調査報告書第7集
- 川又隆央 2009 「竹御神社境内遺跡」 岩沼市文化財調査報告書第8集
- 川又隆央・熊谷篤 2009 「岩沼市中ノ原遺跡所在地の板碑と出土資料について」『宮城考古学』第11号 宮城県考古学会
- 川又隆央・小泉博明 2004 「「下野櫛御跡」 岩沼市文化財調査報告書第2集
- 菊地造也夫 1996 「一本杉遺跡」 宮城県文化財調査報告書第172集
- 菊地造也夫 2003 「陸奥の陶器生産、一本杉窯跡群」『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会編
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」 九州近世陶磁学会10周年記念号完会編
- 窪田忍・佐藤通子 2002 「野田山遺跡」 名取市文化財調査報告書第47集
- 小村田達也・三好秀樹ほか 1993 「北原遺跡」 宮城県文化財調査報告書第159集
- 齋木秀雄 1998 「鍾倉出土の漆器」『中世遺跡出土の漆器一覧・皿類を中心』 鶴見大学大会発表資料
- 佐川正敏ほか 2006 「賀籠沢遺跡発掘調査(2003~2006年度)の成果」『平成18年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
- 佐藤宏一 1968 「宮城県岩沼町長谷寺横穴古墳群」『仙台湾周辺の考古学的研究』 宮城県教育大学歴史研究会編
- 開根達人 1998 「相馬藩における近世豪農生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』 東北大学埋蔵文化財調査研究センター
- 高桑弘美 2003 「5.瓦質土器」『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会編 高志書院
- 高橋博志 2002 「陶器生産と陶磁器流通」『鍾倉・宝町時代の奥州』 高志書院
- 千葉宗久 1985 「名取南野小川村絵図(文久元年(1861年))」『地図で見る岩沼の歴史』 東北歴史博物館
- 2005 「特別展 古代の旅～人とのものとのみち～ 展示実績」
- 名取市教育委員会 2007 「泉・前野田東・北台遺跡の発掘」 名取市文化財調査報告書第56集
- 藤沢敦 1998 「仙台城における土師質・瓦質土器の変遷」『東北大学埋蔵文化財調査年報9』 東北大学埋蔵文化財調査研究センター
- 藤沢良祐 2002 「瀬戸・美濃大室編年の再検討」『研究紀要第10輯』 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 宮城県教育委員会 1977 「(3) 長谷寺横穴古墳群」『宮城県文化財発掘調査報告(昭和51年分)』 宮城県文化財調査報告書第48集
- 吉川宏ほか 2002~2009 「鶴ヶ崎城跡(岩沼要害)」第1~9次発掘調査概報 東北福祉大学
- 渡辺清子 2000 「[J]横穴墓群発掘調査報告書」 岩沼市文化財調査報告書第1集
- 渡部弘美 2009 「仙台市養樹園遺跡第2次・保春院前遺跡」 仙台市文化財調査報告書第344集

写 真 図 版



1. 調査区北側全景(東から)



2. 調査区南側全景(東から)

写真図版 1



1.SB01 挖立柱建物跡(東から)



2.SA01・02 柱跡(東から)



3.SD02 溝跡(北から)



4.SD03・06 溝跡(北西から)



5.SD04・05 溝跡(北から)



6.SD06 溝跡(北西から)



7.SD04 溝跡土層断面(南から)



8.SD05 溝跡土層断面(南から)

写真図版 2



1. SD01 溝跡(東から)



2. SD01 溝跡土層断面(東から)



3. SD01 溝跡上層・加工骨出土状況(東から)



4. 加工骨出土状況(近景)

写真図版 3



1. SD01 溝跡・白磁皿出土状況(北から)



2. SD01 溝跡・漆器椀出土状況(東から)



3. SD01 溝跡・
陶器鉢出土状況(北から)



4. SD01 溝跡・
染付皿出土状況(南から)



5. SD01 溝跡・
染付仏飯具出土状況(北から)



6. SD01 溝跡・
陶器皿出土状況(北から)



7. SD01 溝跡・
陶器土瓶出土状況(西から)



8. SD01 溝跡・
陶器鉢出土状況(東から)



9. SD01 溝跡・下駄出土状況(南から)



10. SD01 溝跡・下駄出土状況(南から)

写真図版 4



1. SE02 検出状況(南から)



2. SE02 土層断面(南から)



3. SE02 (南から)



4. SE02 積石の状況(南から)



5. SE02 漢器梶状況(南から)



6. SE02 水溜施設状況(南東から)



7. SE02 水溜材結合状況(南から)



8. SE02 完掘状況(南から)

写真図版 5



1. SE04 検出状況（西から）



3. SE04 完掘状況（南東から）



2. SE04 土層断面（南西から）



4. SE01 土層断面（東から）



5. SE01 完掘状況（東から）



6. SE01 出土陶器皿（東から）



7. SE01 出土金属製品（北から）



8. SE01 出土かわらけ（北から）



9. SE03 土層断面（東から）



10. SE03 完掘状況（西から）

写真図版 6



1. SE05 土層断面(西から)



2. SE05 完掘状況(西から)



3. SE06 土層断面(西から)



4. SE05 完掘状況(西から)



5. SE07 土層断面(北から)



6. SE07 完掘状況(西から)



7. SE08 土層断面(東から)



8. SE05 完掘状況(南から)

写真図版 7



1. SE09 土層断面(東から)



2. SE09 完掘状況(南から)



3. SE10 土層断面(西から)



4. SE10 完掘状況(西から)



5. SE11 土層断面(南から)



6. SE11 完掘状況(西から)



7. SE12 土層断面(南から)

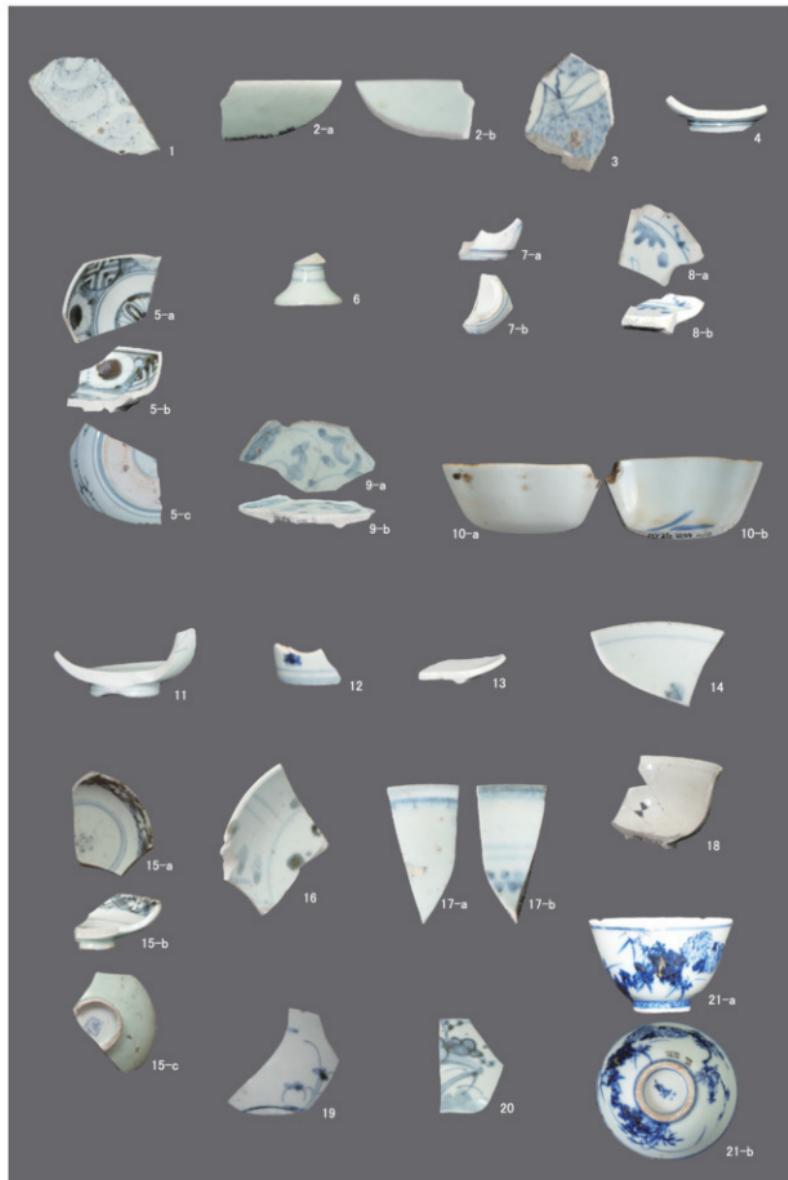


写真図版 8

8. SE12 完掘状況(南から)



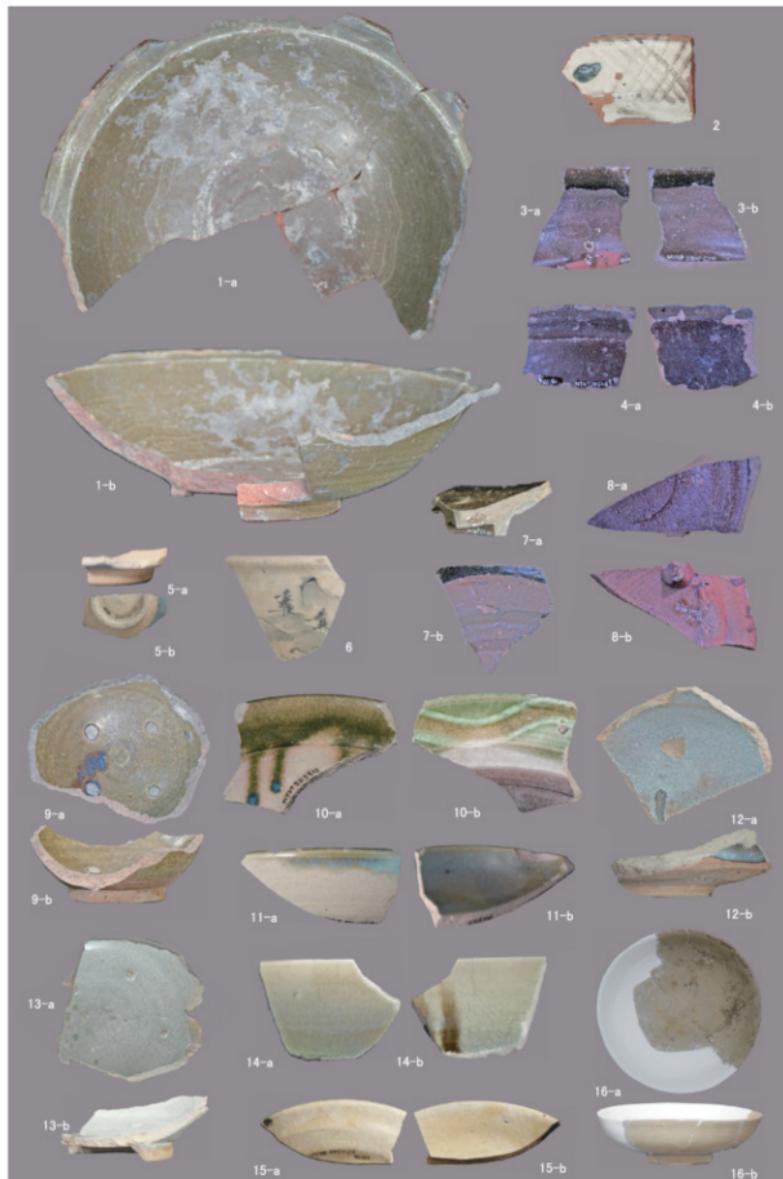
写真図版 9



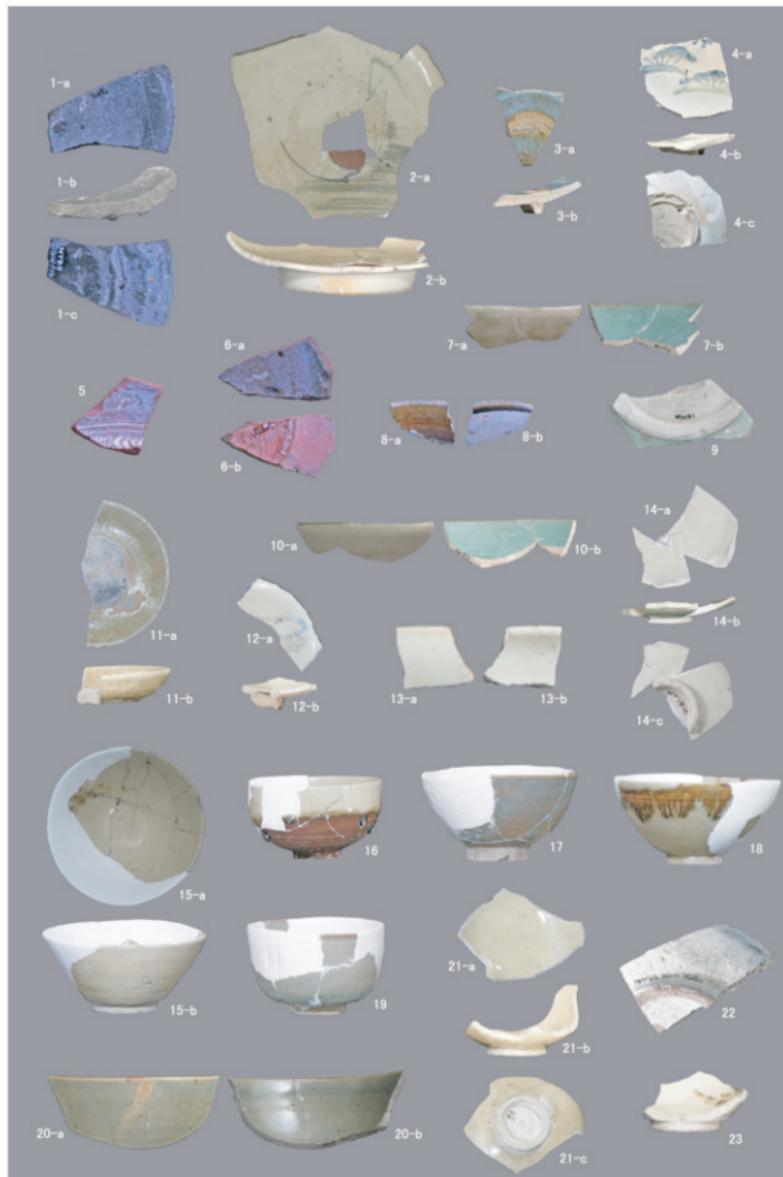
写真図版10



写真図版11



写真図版12



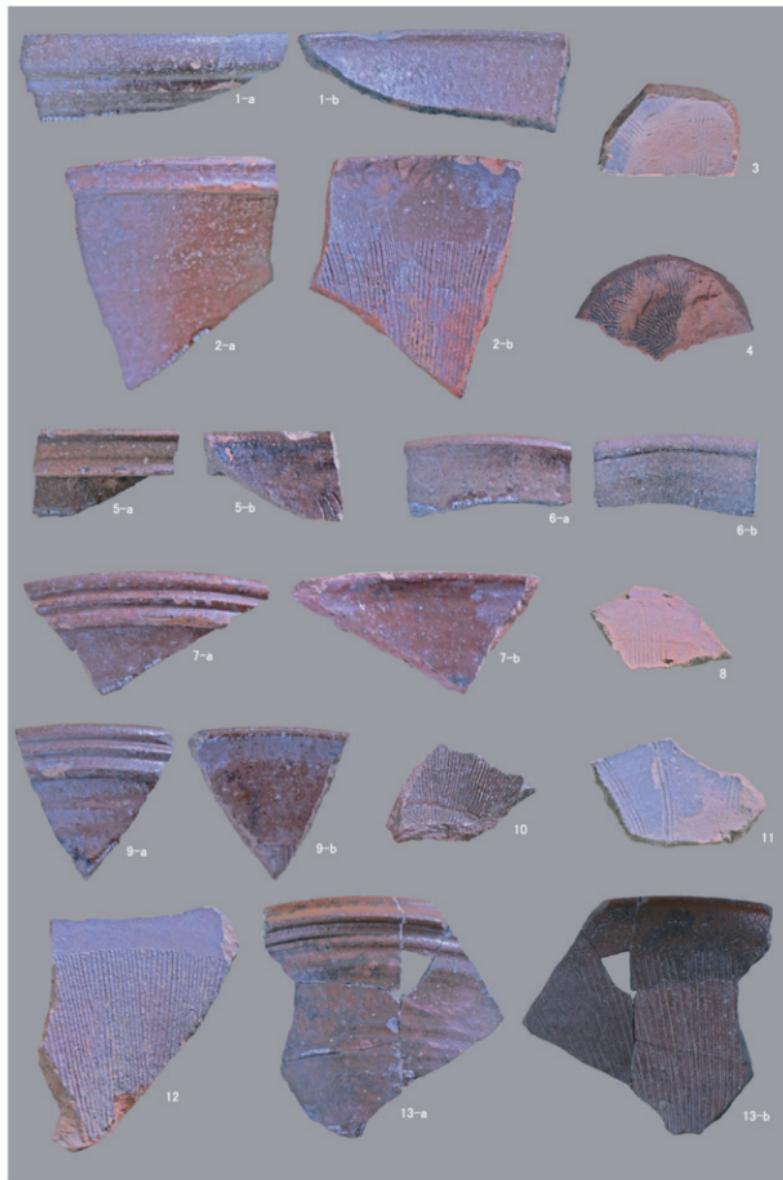
写真図版13



写真図版14



写真図版15



写真図版16



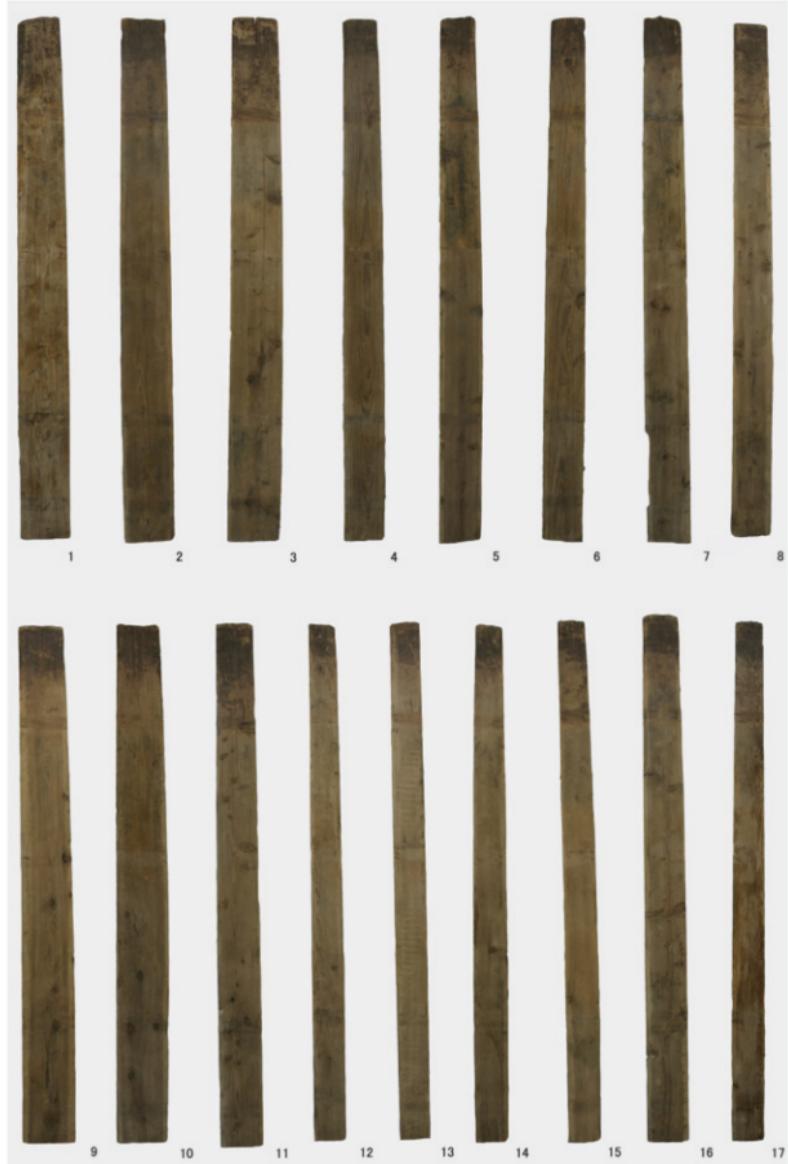
写真図版17



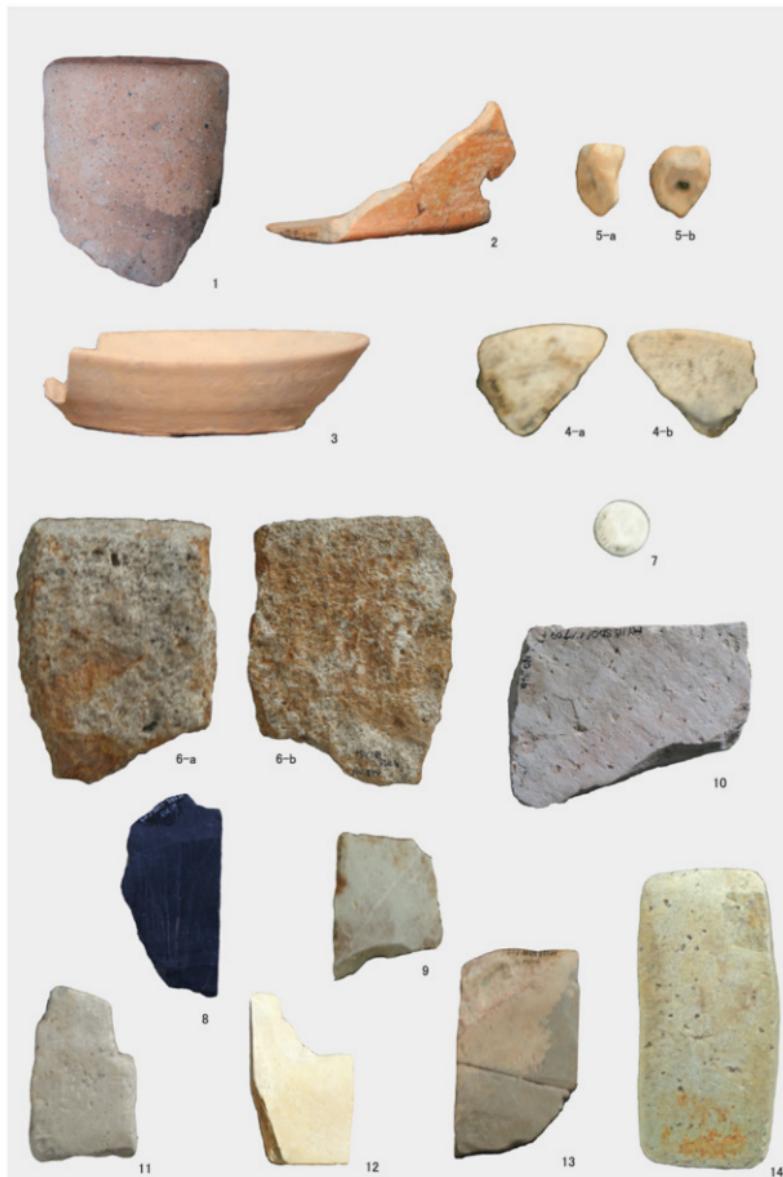
写真図版18



写真図版19



写真図版20



写真図版21



写真図版22

報告書抄録

ふりがな	まるやまいせき						
書名	丸山遺跡						
副書名	岩沼市図書館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第9集						
編集者名	川又隆央・熊谷篤						
編集機関	岩沼市教育委員会						
所在地	〒989-2480 宮城県岩沼市桜1丁目6-20 TEL(0223)-22-1111						
発行年月日	西暦 2010年3月31日						
所取遺跡	所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
丸山遺跡	宮城県 岩沼市 二木 二丁目	042111 15055	38° 6' 29"	140° 51' 52"	20090204 ～ 20090331	1,600 m ²	岩沼市新図書館建 設工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
丸山遺跡	散布地	中世	溝跡	中世陶器 漆器 古錢	文献等の記録では 見られない中世末 段階の区画溝を確 認。		
	中世・近世	近世	掘立柱建物跡 柱列跡 井戸跡 溝跡 土坑	近世陶磁器 土器 瓦質土器 瓦 土製品 金属製品 石製品 木製品 自然遺物	各種の『岩沼要害 絵図』等に描かれて いる家屋敷を区画 する溝跡や区内 部での空間利用の 一場を確認。		
要約	丸山遺跡は宮城県岩沼市二木二丁目に所在し、自然堤防・浜堤上に位置する。今回の調査では掘立柱建物跡1棟、柱列跡2列、井戸跡12基、溝跡6条、土坑6基などを検出した。調査地点は、近世に描かれた古絵図では岩沼要害に関わる家中屋敷として描かれており、検出した遺構についても出土遺物の年代観から近世を中心とした時期の所産と考えられる。なお、ほぼ同位置で重複して作られている溝跡の最古段階の構造からは中世陶器等が出土していることから、現在まで部分的に踏襲される区割りの初現が中世末まで遡る可能性が考えられ、文献資料の少ない当地域の中世像を構築する上での貴重な手掛かりが得られた。						

